茨城県教育財団文化財調査報告第251集

東岡中原遺跡 4

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ

平成 17 年 3 月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第251集

東岡中原遺跡 4

ひがしおかなかはら

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ

平成17年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人　茨城県教育財団

序

つくば市は，国際交流の拠点都市にふさわしい町づくりを進めています。この町づくりの一環として，つくば市と都市基盤整備公団茨城地域支社は，つくば市と東京圏を直結する「つくばエクスプレス」の開発と同時に，沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進してます。この事業予定地内には，東岡中原遺跡をはじめ数多くの埋蔵文化財包蔵地が所在します。

財団法人茨城県教育財団は，都市基盤整備公団茨城地域支社から中根・金田台特定土地区画整理事業地内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成８年度からこれまでに中谷津遺跡，中原遺跡，上野陣馬遺跡，上野古屋敷遺跡，金田西遺跡，金田西坪B遺跡，九重東岡廃寺の調査を実施しました。その成果は既に当財団の文化財報告第139・155・159・170・182・195・209集として報告したところです。

本書は，東岡中原遺跡の平成13年度における発掘調査の成果を収録したもので，本書が学術的な研究資料としてはもとより郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助としてご活用いただければ幸いです。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である都市基盤整備公団茨城地域支社から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し感謝申し上げます。

平成１７年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，都市基盤整備公団茨城地域支社の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成13年12月１日から平成14年１月31日まで発掘調査を実施した茨城県つくば市大字東岡（おおあずまおか）に所在する東岡中原遺跡（ひがしおかなかはら）の発掘調査報告書である。なお，東岡中原遺跡は，つくば市教育委員会が平成10年度から平成12年度にかけて実施した，茨城県遺跡地図改訂事業に伴う遺跡分布調査をもとに，つくば市遺跡地図が平成13年７月に発行され，その際，中原遺跡から東岡中原遺跡と名称を変更した。

2　発掘調査期間及び整理期間は，以下の通りである。

調　　査　　平成13年12月１日～平成14年１月31日

整　　理　　平成16年４月１日～平成16年６月30日

3　発掘調査は，調査第二課長鈴木美治のもと，首席調査員兼第１班長萩野谷悟，主任調査員横倉要次，調査員駒澤悦郎が担当した。

4　整理及び本書の執筆，編集は，整理第一課長瓦吹堅のもと，副主任調査員駒澤悦郎が担当した。

凡　　例

1　地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X軸＝＋10,640m，Y軸＝＋26,040mの交点を基準点（A１a1）とした。なお，この原点は，日本測地系による基準点である。

調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ１，２，３…とし，「A１区」，「B２区」のように呼称した。さらに，小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3…0とし，名称は，大調査区の名称を冠して「A１a1区」，「B２b2区」のように呼称した。

2　抄録の北緯及び東経の欄には，世界測地系に基づく緯度・経度を（　）を付して併記した。

3　実則図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は，次のとおりである。

遺構　SI－住居跡　SK－土坑　SD－溝　P－柱穴

遺物　TP－拓本記録土器　DP－土製品　Q－石器・石製品　M－金属製品

土層　K－撹乱

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の表記については，次のとおりである。

(1)　遺跡全体図は縮尺300分の１とし，各遺構の実測図は60分の１の縮尺で掲載することを基本とした。

(2)　遺物は原則として３分の１の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3)　遺構・遺物実測図中の表示は，次の通りである。

焼土・赤彩・施釉　竈構築材・粘土・研摩・黒色処理　柱痕跡

● 土器　○ 土製品　▲ 瓦　□ 石器・石製品　△ 金属製品　－－－－ 硬化面

6　遺物観察表・一覧表の表記については，次の通りである。

(1)　計測値の（　）内の数値は現存値を，［　］内の数値は推定値を示した。計測値の単位は㎝，gで示した。

(2)　遺物観察表の備考の欄は，残存率及びその他必要と思われる事項を記した。

7　「主軸」は，竈を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線，他の遺構については長軸（径）を通る軸線を主軸とした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例：N－10°－E）。なお，推定値は［　］を付して示した。

抄　　録

ふ り が な	ひがしおかなかはらいせき
書　　名	東岡中原遺跡 4
副 書 名	中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	Ⅷ
シ リ ー ズ 名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第251集
編 著 者 名	駒澤悦郎
編 集 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所　在　地	〒310-0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL　029(225)6587
発 行 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所　在　地	〒310-0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL　029(225)6587
発 行 日	2005（平成17）年３月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
ひがしおかなかはらいせき 東岡中原遺跡	いばらきけん 茨城県つくば市 おおあざひがしおかあざにしおか 大字東岡字西岡 ばんち 128番地ほか	08220 ｜ 222	36度 5分 36秒 (36度 5分 50秒)	140度 7分 29秒 (140度 7分 12秒)	23.1 ～ 25.3m	20011201 ～ 20020131	1,735㎡	中根・金田台特定土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東岡中原遺跡	包蔵地	旧石器	石器単独出土地点１か所	石器（彫刻刀形石器・掻器・角錐状石器・石核・２次加工を有する剥片・削片・剥片）	これまでの調査により，当遺跡は８世紀初頭から10世紀初頭を中心に隆盛した集落跡であることが判明している。今回の調査区でも，該期の一群を形成する掘立柱建物跡や，遺物を大量に出土した竪穴住居跡などが発見された。 その他，旧石器時代の荒屋型彫刻刀形石器を含む細石刃石器群や縄文土器片，近世の遺構・遺物も僅少ながら出土していることから，旧石器時代から近世にかけて，断続的に土地利用された複合遺跡である。特に，古代においては，隣接する金田官衙遺跡との密接な関連性が考えられる。
		縄文		縄文土器（深鉢），石器（剥片），土製品（耳飾り）	
	集落跡	奈良	竪穴住居跡　6軒 掘立柱建物跡　5棟	土師器（坏・高台付坏・甕・甑・墨書土器），須恵器（坏・高台付坏・壺・甕・蓋・盤・高盤・甑・鉢・長頸瓶・短頸壺・埦鉢・鉄鉢形土器），瓦，土製品，石製品（砥石・紡錘車），金属製品(紡錘車・刀子・鎌・釘・鈴具)	
		平安	竪穴住居跡　4軒 掘立柱建物跡　1棟 溝　1条		
	その他	近世	掘立柱建物跡　1棟 土坑　36基 溝　6条	陶磁器（碗・擂鉢・灯明皿），土師質土器（内耳鍋・カワラケ），石製品（砥石）	

目　　次

序
例言
凡例
抄録
目次
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の成果 …… 8
　第１節　遺跡の概要 …… 8
　第２節　基本層序 …… 9
　第３節　遺構と遺物 …… 15
　　１　旧石器時代の遺物 …… 15
　　(1)　調査の方法 …… 15
　　(2)　石器単独出土地点 …… 15
　　２　奈良時代の遺構と遺物 …… 17
　　(1)　竪穴住居跡 …… 17
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 39
　　３　平安時代の遺構と遺物 …… 47
　　(1)　竪穴住居跡 …… 47
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 55
　　(3)　溝 …… 56
　　４　近世の遺構と遺物 …… 58
　　(1)　掘立柱建物跡 …… 58
　　(2)　土坑 …… 60
　　(3)　溝 …… 65
　　５　遺構外出土の遺物 …… 69
　第４節　まとめ …… 74
　　１　Ⅶ区における奈良・平安時代の集落変遷 …… 74
　　２　東岡中原遺跡における竈構造の変化 …… 74
写真図版

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

つくば市は，世界に開かれた国際交流の中心，世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として，21世紀の新しい街づくりを進めている。その一環として取り組んでいるのが，西暦2005年開業をめざした「つくばエクスプレス」の建設とそれに伴う沿線の開発である。中根・金田台地区については，住宅・都市整備公団つくば開発局（平成９年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に，平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に名称を変更）を事業主体として，土地区画整理事業を進めている。

平成６年11月18日，住宅・都市整備公団つくば開発局は茨城県教育委員会教育長に対して，中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は平成７年５月15日～６月８日に現地踏査を，平成７年10月９日～13日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成７年12月28日，茨城県教育委員会教育長は，住宅・都市整備公団つくば開発局及びつくば市教育委員会あてに，事業地内に中原遺跡（平成13年７月から東岡中原遺跡に名称変更）が所在する旨回答した。

平成９年３月，住宅・都市整備公団つくば開発局は，茨城県教育委員会教育長に対して，文化財保護法第57条の３の第１項の規定に基づき，土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は，計画変更が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると判断し，住宅・都市整備公団つくば開発局あてに，工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成９年３月11日，住宅・都市整備公団つくば開発局は，茨城県教育委員会教育長に対して，中根・金田台特定土地区画整理事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成９年３月17日，茨城県教育委員会教育長は，住宅・都市整備公団つくば開発局あてに，中原遺跡について，発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として，財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，住宅・都市整備公団つくば開発局から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成９年４月１日から平成12年３月31日まで中原遺跡（Ⅰ～Ⅵ区）の発掘調査（55,575㎡）を実施した。

茨城県教育委員会は，これまでの調査結果から，中原遺跡の西側部分においても，遺跡の範囲が拡大すると予想したため，平成12年１月４日・17日に試掘調査を実施し，遺跡範囲の拡大を確認した。

平成12年３月１日，都市基盤整備公団茨城地域支社は，茨城県教育委員会教育長に対して，中根・金田台特定土地区画整理事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成12年３月24日，茨城県教育委員会教育長は，都市基盤整備公団茨城地域支社あてに，中原遺跡について，発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として，財団法人茨城県教育財団を紹介した。

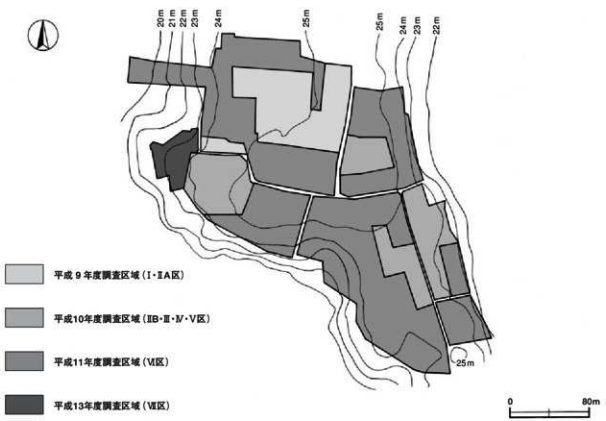
財団法人茨城県教育財団は，都市基盤整備公団茨城地域支社から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成13年12月１日から平成14年１月31日まで，東岡中原遺跡Ⅶ区の発掘調査を実施することとなった。

第2節　調　査　経　過

平成13年度の調査は，平成13年12月１日から平成14年１月31日までの２か月間にわたって実施した。以下，

調査経過について，工程表で示す。

行程＼月	12月			1月		
調査準備 表土除去 遺構確認						
遺構調査						
遺物洗浄 注記作業 写真整理						
補足調査 撤収						



第１図　東岡中原遺跡調査区設定図

第2章　位　置　と　環　境

第1節　地理的環境

東園中原遺跡は，茨城県の南西部に位置するつくば市大字東園字中原187番地ほかに所在している。

つくば市の東方5㎞には霞ヶ浦，北端には筑波山がそれぞれ位置しており，つくば市域は，筑波山の南西麓を南流する桜川の低地と，市の西側を南流する小貝川の低地及びそれらに挟まれた台地からなっている。この台地は筑波・稲敷台地と呼ばれ，千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部である。これらの台地は，数多くの中小河川により開析され，樹枝状の入り組んだ複雑な地形を形づくっている。

台地の地質は，下部から成田層，竜ヶ崎砂礫層，その上部に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層（0.3～5.0m），その上部に関東ローム層（0.5～2.5m）がそれぞれ堆積し，最上部は腐植土層となっている[1]。標高は25～26mで，ほぼ平坦である。地形の形成に深く関与した河川である桜川と小貝川によつて大きく開析された流域は，標高約5mの沖積低地になっており，台地との比高は約20mとなっている。また，この二つの河川間の台地には，花室川，蓮沼川，東谷田川，西谷田川などの中小河川が南流し，台地縁部を樹枝状に開析している。そのため谷津や低地が南北に細長く発達し（第2図），北から南に細長く延びる舌状台地が形成されている。

当遺跡は，市域の東部，つくば市立桜中学校から西に約700mの地点に所在し，花室川左岸の低地を西に望む標高23.1～25.3mの舌状台地上に立地している。この台地は，北から南に向かって950mほど延びており，幅は350m，遺跡の東側には谷津が細長く入り込んでいる。

当遺跡と周辺の土地利用の現状は，台地上は主に畑地び平地林となつており，花室川流域の沖積低地は水田として利用されている。

第2節　歴史的環境

当遺跡は，旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。当遺跡の周辺は桜川と花室川の水系に属し，水利の便に富み，また，居住に適した台地と後背地である筑波山麓からの恵みも豊かなため，旧石器時代から人々の生活の舞台となつてきた。当遺跡の周辺には，それを裏付けるように旧石器時代から江戸時代にかけての遺跡が数多く確認されている。ここでは，当遺跡に関連する市域の遺跡を中心に，時代別に述べる[2]。

旧石器時代の遺跡は，現在13か所が確認されているが，他の時代と比べて遺跡数は極めて少ない。これらの遺跡は，主に桜川・花室川流域の台地上や東谷田川・蓮沼川流域の台地上に立地している。桜川・花室川流域の遺跡では，当遺跡をはじめ，北条中台遺跡や柴崎遺跡〈18〉，新治村高崎山古墳群〈32〉，同村田宮古墳群〈14〉があり，ナイフ形石器や尖頭器などが出土している[3]。また当遺跡からは，これまでの調査で数多くの荒屋型彫刻刀形石器を含む細石刃石器群も出土しており，その質・量共に注目されている[4]。東谷田川・蓮沼川流域の遺跡は，島名前野東遺跡〈54〉，面野井北ノ前遺跡〈57〉，苅間神田遺跡〈26〉などがあり，面野井北之前遺跡からは，2点の荒屋型彫刻刀形石器が出土している[5]。県内では5番目の発見で，県内の細石刃石器群の貴重な資料を提供し，関東地方における北方系細石刃石器群の分布とその様相を考える上で極めて貴重である。

縄文時代の遺跡は，現在148か所が確認され，遺跡は市域全体に広がっている。特に，桜川・花室川流域の台地縁辺部には，数多くの貝塚が所在しており，国指定史跡の土浦市上高津貝塚〈58〉は後・晩期を主体とした，その代表的な貝塚の一つである[6]。中期を主体とする大規模な集落跡は，北条中台遺跡，島名境松遺跡〈55〉，下広岡遺跡〈51〉などがあり，それぞれ桜川，東谷田川，花室川流域に営まれている。また，当遺跡に隣接する金田西坪B遺跡〈22〉の確認調査では，多量の縄文土器や硬玉製大珠などが出土し，大規模な中期の集落跡と想定されている[7]。

弥生時代の遺跡は，現在20か所が確認されているが，旧石器時代と同様，遺跡数は少ない。それらの多くは，台地の平坦部から縁辺部にかけて立地し，桜川流域に多く分布しているが，低地部に発達した自然堤防上や微高地での遺跡の確認はまだされていない。蓮沼川流域の刈間六十目遺跡〈56〉からは，弥生時代終末期の十王台式土器や南関東に系譜を求められる壺形土器などが出土し[8]，土浦市原田北遺跡群では，弥生時代後期の竪穴住居跡183軒が確認されている[9]。出土した弥生土器は，県南域を中心に分布する上稲吉式土器を主体としながら，南関東に系譜を求められる弥生土器も散見され，南関東と北関東の弥生文化の交錯を予想させる。

古墳時代になると遺跡数が急増し，現在304か所が確認されている。遺跡は市域全体に広がり，各流域の微高地や，台地縁辺部はもとより，台地中央部に立地する遺跡が増加している。特に，1983年に調査された新治村武者塚古墳〈43〉では，石室内から大刀，青銅製杯，銀製帯状透彫金具や，美豆良を結った頭髪，鬘が出土している[10]。また，桜川流域では，100軒の竪穴住居跡，65基の古墳，２基の方形周溝墓などが発見された北条中台遺跡，市指定史跡の古墳を含む平沢古墳群，前方後円墳２基と円墳１基からなる松塚古墳群〈45〉，円墳３基からなる横町古墳群〈49〉などが分布している。当時，この地方にも有力な豪族が出現したことを示しているが，多くの集落が形成されて古代の人々の生活が広範囲に広がり，この時代に低地開発と生産基盤の飛躍的な発達が成し遂げられたことを物語っている。

奈良・平安時代になると，律令制度の確立に伴い，桜地区は河内郡沓田郷に所属し，その後のち12世紀にかけて田中庄と呼ばれる。この時代の遺跡としては，桜川と花室川流域において30か所を越え，市域では193か所が知られ，当遺跡周辺には隣接する九重東岡廃寺〈20〉，金田西坪A遺跡〈21〉，金田西坪B遺跡〈22〉，金田西遺跡〈23〉がある。九重東岡廃寺からは，以前から礎石や瓦塔，蔵骨器などが出土しており，河内郡の郡寺と考えられていた。1984年には部分的な発掘調査が実施され，基壇や井戸跡，筑波廃寺系と結城廃寺系の瓦などが出土している[11]。金田西坪A･B遺跡は，1959年に桜中学校校庭の拡張工事に伴って表土を除去したところ，倉庫跡と考えられる掘立柱建物跡や炭化米が多量に出土した[12]。2000～2002年にかけては，金田西遺跡，金田西坪A･B遺跡，九重東岡廃寺の確認調査が実施され，郡衙正倉域の確認をはじめ，大まかな遺構群の変遷と各施設や区域の性格などが検討された。台地の下に広がる桜川低地に条里が遺存することなどを含めて，河内郡の郡衙跡と推定された[13]。

このような環境の中，この地域は当時の地方政治・文化の中心として栄えていたことが推測され，さらに，桜川左岸には，筑波郡衙及び郡寺とされる国指定史跡平沢官衙遺跡と筑波廃寺（中台廃寺）が所在し，これらの遺跡は，地方に国・評（郡）・里（郷）制が成立した律令期の様子を知る大きな手がかりとなっている。また，当遺跡から出土した須恵器の中には，新治村小高，東城寺，小野の３地区に所在する須恵器窯から供給されたと考えられるものが多く，小野須恵器窯跡〈４〉，東城寺須恵器窯跡〈５〉をはじめ，常陸国における一大窯業地として栄えていたこれらの窯跡群と，官衙や寺院及びその周辺の集落との供給関係の解明は，今後の進展に期待するところが大きい。

中世以降の遺跡としては城館跡が多く，桜川左岸では，小田氏居城の国指定史跡小田城跡〈30〉，新治村

田土部館跡（33），同村藤沢城跡（39）などがあり，桜川右岸には，金田城跡（50），上之室城跡（53）などがある。さらに，筑波山の南，三村山麓一帯には中世寺院群が確認されており，三村山清冷院極楽寺跡（28）には，13世紀半ば，大和の高僧忍性が来往し，布教に努めたことが伝えられている。その後の戦国の世から江戸時代において当地域は，佐竹氏の支配下を経てそのほとんどが土浦藩に属することとなり，金田台地区は明治4（1871）年の廃藩置県に至るまでその支配下にあった。

※　文中の〈　〉内の番号は，第2図及び周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と同じである。

註

1）大森昌衛・蜂須紀夫「茨城の地質をめぐって」『日曜の地学』8　築地書館　1979年9月

2）a 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会　2001年3月

b つくば市教育委員会『つくば市遺跡地図』　2001年7月

3）a 斎藤弘道「一般国道125号道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　田宮古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第57集　1990年3月

b 土生朗治「研究学園都市計画桜榮崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）　榮崎遺跡Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第72集　1992年3月

c 萩野谷悟「研究学園都市計画桜榮崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）　榮崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第93集　1994年9月

d 吉川明宏・新井聡・黒澤秀雄「（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書　中台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第102集　1997年12月

e 平岡和夫・高野浩之・大賀健・折原洋一・長井正欣・土生朗治『高崎山古墳群西支群第2号墳・第3号墳』山武考古学研究所・新治村教育委員会　2001年3月

4）成島一也・宮田和男「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　中原遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集　2000年3月

5）鹿島直樹「島名関ノ台南B遺跡　面野井北ノ前遺跡　常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第231集　2004年3月

6）佐藤孝雄・大内千年編『国指定史跡上高津貝塚A地点－史跡整備に伴う発掘調査報告書－』土浦市教育委員会　1994年3月

7）川上直澄・長谷川聡・大塚雅昭「金田西・西坪B遺跡　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第195集　2002年3月

8）小澤重雄「慈城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　六十目遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第160集　2000年3月

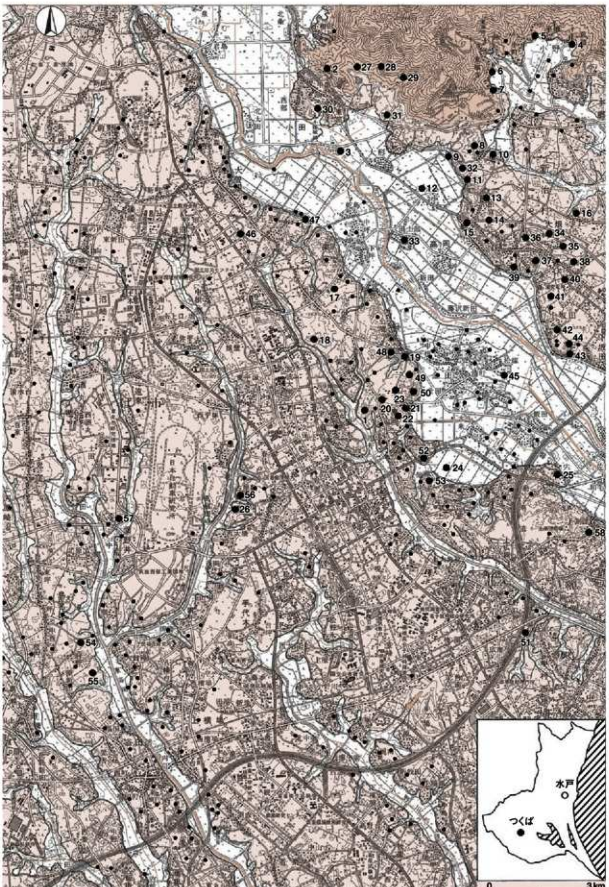
9）江幡良夫「土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　原出口遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第94集　1995年3月

10）増田清一編『武者塚古墳』新治村教育委員会　1986年3月

11）九重廃寺遺跡調査団「東岡遺跡－九重廃寺跡調査報告－」桜村教育委員会　1984年3月

12）桜村史編さん委員会『桜村史　上巻』桜村教育委員会　1982年3月

13）白田正子「金田西遺跡　金田西坪B遺跡　九重東岡廃寺　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第209集　2003年3月



第２図　東岡中原遺跡周辺遺跡分布図

表1　東岡中原遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近
1	東岡中原遺跡	○	○		○	○	○
2	小田田向遺跡		○			○	
3	小田小田橋遺跡				○	○	
4	小野須恵器窯跡(新治村)					○	
5	東城寺須恵器窯跡(新治村)					○	
6	東城寺桑木須恵器窯跡(新治村)					○	
7	東城寺雷居前須恵器窯跡(新治村)					○	
8	小高天神遺跡(新治村)		○	○	○	○	
9	小高須恵器窯跡(新治村)					○	
10	小高村内須恵器窯跡(新治村)					○	
11	田宮須恵器窯跡(新治村)					○	
12	下大島遺跡(新治村)					○	
13	田宮梶の宮遺跡(新治村)		○	○	○	○	
14	田宮古墳群(新治村)	○			○	○	
15	高岡根遺跡(新治村)	○	○	○	○	○	
16	大畑新田遺跡(新治村)		○	○	○	○	
17	栗原大山遺跡		○		○	○	
18	柴崎遺跡	○	○		○	○	○
19	中根中谷津遺跡	○	○		○	○	○
20	九重東岡廃寺					○	
21	金田西坪A遺跡					○	
22	金田西坪B遺跡		○		○	○	
23	金田西遺跡					○	
24	上之室条理					○	
25	鞍若寺跡					○	○
26	苟間神田遺跡	○	○	○	○	○	○
27	尼寺入廃寺						○
28	三村山清冷院極楽寺跡						○
29	常願寺廃寺						○

番号	遺跡名	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近
30	小田城跡						○
31	小田古墳群				○		
32	高崎山古墳群(新治村)	○			○		
33	田土部館跡(新治村)						○
34	大畑本田遺跡(新治村)	○	○	○	○		
35	大畑本田貝塚(新治村)		○				
36	藤沢山後遺跡(新治村)		○	○	○		
37	藤沢北斗遺跡(新治村)		○	○			
38	藤沢東町遺跡(新治村)		○				
39	藤沢城跡(新治村)						○
40	藤沢南原遺跡(新治村)		○	○			
41	北坂田北部貝塚(新治村)		○	○	○		
42	上坂田寺裏貝塚(新治村)		○	○			
43	武者塚古墳(新治村)				○		
44	上坂田古墳群(新治村)				○		
45	松塚古墳群				○		
46	方穂故城跡						○
47	玉取古墳群				○		
48	上境旭台貝塚		○				
49	横町古墳群				○		
50	金田城跡						○
51	下広岡遺跡		○				
52	花室城跡						○
53	上之室城跡						○
54	島名前野遺跡	○			○	○	
55	島名境松遺跡		○		○	○	
56	苟間六十目遺跡			○	○	○	○
57	面野井北ノ前遺跡	○			○		○
58	上高津貝塚(土浦市)		○				

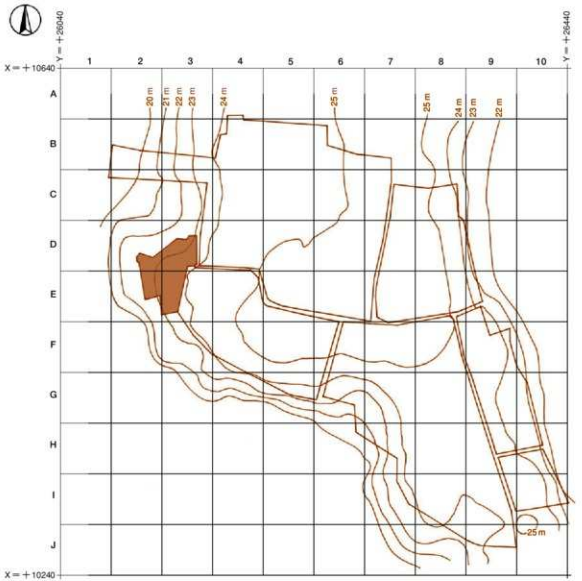
第3章　調　査　の　成　果

第1節　調査の概要

東岡中原遺跡は，つくば市の東部に位置し，花室川左岸の標高23.1～25.3mの舌状台地上に立地している。調査前の現況は，畑地及び平地林であり，平成13年度の調査面積は，1,735㎡である。

これまでの調査の結果，当遺跡は，旧石器時代から近世までの複合遺跡であるが，奈良時代から平安時代を主体とする官衙周辺に位置する遺跡であることが判明している。調査は平成９年度から実施され，平成13年度までに竪穴住居跡517軒が確認された。その内訳は縄文時代３軒，古墳時代７軒で，残りはすべて奈良・平安時代である。遺跡の中心となる時期は，８世紀から10世紀にかけてであり，この時期の竪穴住居跡は504軒，掘立柱建物跡は146棟となる。竪穴住居跡は遺跡全体に分散しているが，掘立柱建物跡は大きく７つの範囲に分かれて分布している。

平成13年度の調査では，旧石器時代の石器単独出土地点１か所，奈良・平安時代の竪穴住居跡10軒，掘立柱



第３図　東岡中原遺跡グリット設定図

建物跡６棟，溝１条，近世の掘立柱建物跡１棟，土坑36基，溝６条を確認した。また，遺構外から旧石器時代の石器や縄文土器なども出土し，平成10年度の調査で出土した荒屋型彫刻刀形石器を含む細石刃石器群が，今回の調査においても確認された。奈良・平安時代の竪穴住居跡は，規模や内部施設に相違があるものの，北側に竈を構築している。また，掘立柱建物跡は総柱式が３棟，側柱式が３棟であり，総柱式の建物跡は台地縁辺部にほぼ一列に並んで発見された。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に16箱出土している。旧石器時代の遺物は，彫刻刀形石器，掻器，角錐状石器，石核，２次加工を有する剥片，削片，剥片などであり，縄文時代では，縄文土器片，土製品（耳飾り），剥片などが出土している。奈良・平安時代の遺物は，土師器（坏・高台付坏・椀・高台付椀・高台付皿・甕・甑・墨書土器），須恵器（坏・高台付坏・壺・甕・蓋・盤・高盤・甑・長頸瓶・短頸壺・瑠鉢・鉄鉢形土器），瓦，土製品，石製品（砥石・紡錘車），金属製品（紡錘車・刀子・鎌・釘・鈴具）があり，近世では，陶磁器（碗・擂鉢・灯明皿），土師質土器（内耳鍋・カワラケ），石製品（砥石）が出土している。

第２節　基　本　層　序

テストピットは平成９年度２か所，平成10年度１か所，平成11年度３か所，平成13年度１か所（Ｅ３d3）を設定して，基本土層の観察を行ったが，ローム層の層序区分については，火山ガラス比分析及び重鉱物分析の行われた平成９年度の分析結果を参考とした。また，第４図にはテストピット間におけるローム層の対応関係と，出土した石器群の垂直分布（▶）を模式図的に示した。

第Ⅰ層は，灰褐色を呈する現耕作土でローム粒子を多量，ロームブロックを少量含む。層厚は30～50cmである。

第Ⅱ層は，暗褐色を呈する粘性の弱い旧耕作土でローム粒子を多量に含む。層厚は10～15cmである。

第Ⅲ層は，黒色スコリアを微量含む褐色を呈するローム層で，ソフト化とクラックが発達している。層厚は10～24cmである。

第Ⅳ層は，褐色を呈するハードローム層で，白色粒子及び黒色粒子を微量含む。本層の中位から下層にかけては，ガラス質粒子及びスコリア粒子を微量含んで締まりが強く，姶良Tn火山灰（AT）を含む層に対比される。層厚は10～29cmである。

第Ⅴ層は，暗褐色を呈するハードローム層で，赤色スコリア粒子を微量含む。姶良Tn火山灰（AT）を含む層の下に確認された黒色帯であることから第２黒色帯（BBⅡ）上部に対比される。層厚は５～21cmである。

第Ⅵ層は，暗褐色を呈するハードローム層で，白色粒子を微量含む。第２黒色帯（BBⅡ）下部に対比される。層厚は９～21cmである。

第Ⅶ層は，暗褐色を呈するローム層で，白色スコリア粒子を極めて少量含み，硬く締まっている。この層までが立川ローム層に比定されると考えられる。層厚は10～22cmである。

第Ⅷ層は，暗褐色を呈するローム層で，粘性が強く，硬く締まっている。黒色スコリア粒子を極めて少量含む。この層以下が武蔵野ローム層に比定されると考えられる。層厚は５～20cmである。

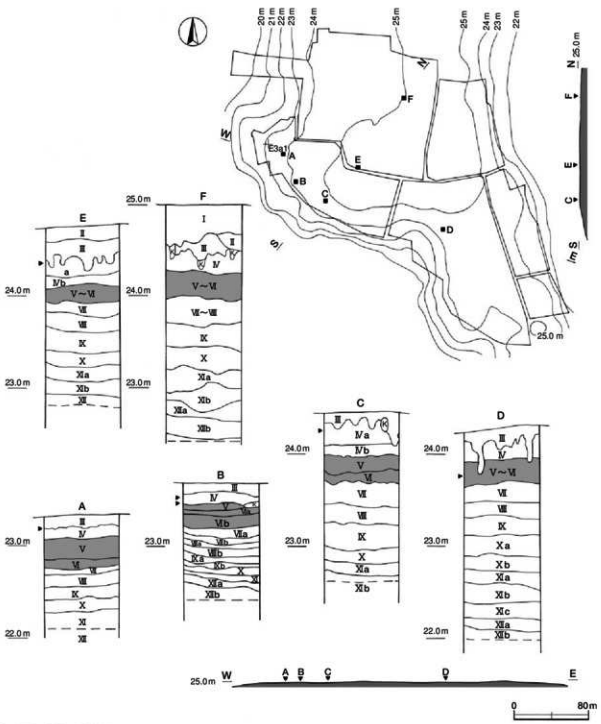
第Ⅸ層は，暗褐色を呈するローム層で，灰白色粘土粒子を少量含み，粘性及び締まりが強い。層厚は７～22cmである。

第Ⅹ層は，オリーブ褐色を呈するローム層で，粘性及び締まりが強く，白色粒子・灰白色粘土粒子を少量，鉄分の黒色粒子を微量含む。層厚は８～17cmである。

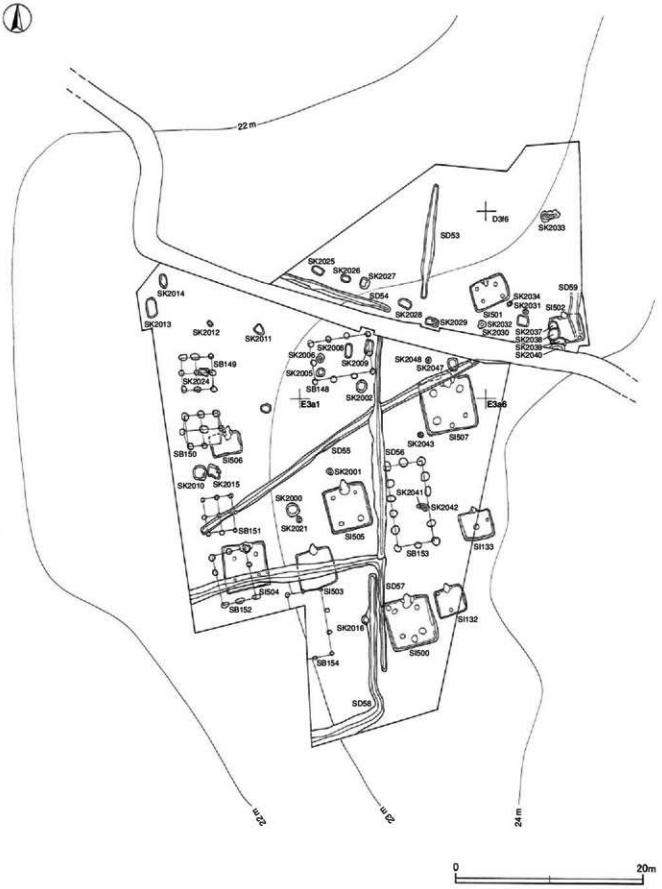
第Ⅺ層は，オリーブ褐色を呈するローム層で，粘性及び締まりが極めて強く，鉄分の黒色粒子を少量，白色粒子・灰白色粘土粒子を微量含む。層厚は８～20cmである。

第Ⅻ層以下は，常総粘土層となる。明緑灰色を呈する粘土層で，鉄分の黒色粒子を多量含み，粘性が極めて強い。

なお，遺構の多くは，第Ⅱ層下部及び第Ⅲ層上面で確認され，第Ⅲ～Ⅵ層にかけて掘り込まれている。



第４図　基本土層図



第5図 東岡中原遺跡全体図

第3節　遺構と遺物

1　旧石器時代の遺物

（1）調査の概要と方法（第6図）

これまでの調査では，平成9年度に1か所の石器単独出土地点と4か所の石器集中地点が確認され，ナイフ形石器・彫刻刀形石器・石核・掻器・剥片・砕片など88点，平成10年度にも3か所の石器集中地点が確認され，ナイフ形石器・荒屋型彫刻刀形石器・角二山型掻器・楔形石器・抉入石器・削器・石刃・石核・剥片・砕片など79点が出土している。平成11年度には3か所の石器集中地点が確認され，ナイフ形石器・尖頭器・有樋尖頭器・掻器・削器・楔形石器・石刃・石核・剥片・砕片など358点が出土し，平成9年度から合計525点の石器が出土している。さらに，平成13年度の発掘調査においても，遺構確認作業及び各時代の遺構調査を進めていく中で，多数の旧石器時代の石器が出土している。竪穴住居跡などの遺構調査終了後，旧石器時代の文化層が確認できると想定される地点に調査区を設定し，ローム層の掘り下げを実施した。調査区は，ローム層が比較的厚く堆積している調査区域東部で，平成10年度に荒屋型彫刻刀形石器・角二山型掻器などが出土した第5・6号石器集中地点に近接した地点に設定した。標高23.3～23.5mの台地縁辺部に位置しているE3b3・E3c4・E3d3・E3d5・E3e4の5か所のグリッドで，調査面積は90㎡である。

調査の結果，E3d3から黒曜石製の剥片が1点出土した。さらに，周辺のローム層の掘り下げを入念に行ったが，石器の集中地点を確認することはできず，石器単独出土地点と判断した。

（2）石器単独出土地点

前述した通り，今回の発掘調査では，E3d3から黒曜石製の剥片が1点出土した。平成9年度の発掘調査で確認された石器単独出土地点に次ぐため，第2号石器単独出土地点と呼称した。

第2号石器単独出土地点（第6図）

位置　調査区域の東部，平坦部のE3d3に位置している。

出土状態　腹面を上に向けた状態で，単独で出土している。標高23.195mに位置し，ローム層第Ⅲ層に相当すると考えられる。

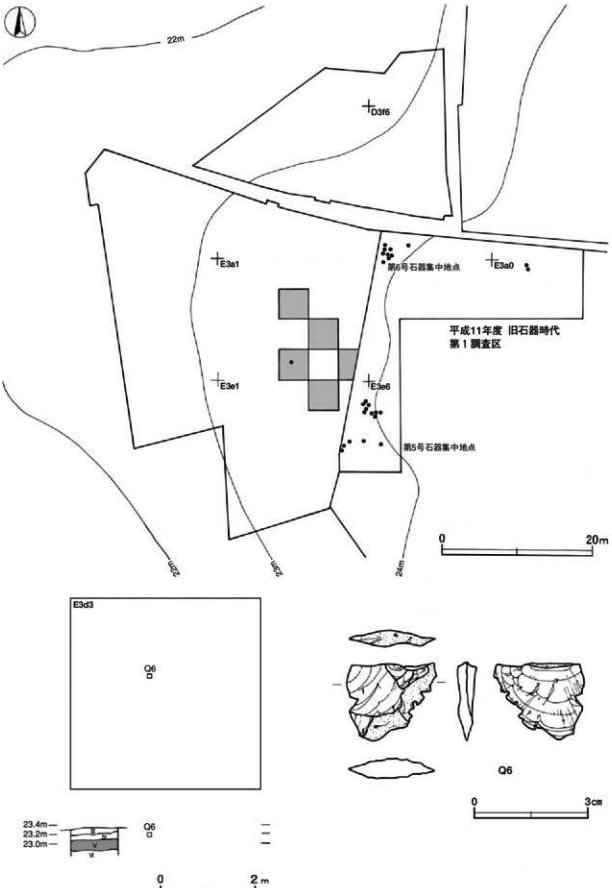
遺物　黒曜石製の横長剥片1点である。Q6は，背面に礫面と前段階の剥離面を有し，打面は礫面打面である。調整は施されていない。

所見　当地点は，平成10年度の第5・6号石器集中地点に近接している。第5号石器集中地点では，標高23.220～23.466mのローム層第Ⅲ層中部から下部にかけて，硬質頁岩製の荒屋型彫刻刀形石器を含む細石刃石器群をはじめ，チャート・凝灰岩製の剥片が確認されている。第6号石器集中地点では，標高23.347～23.577mのローム層第Ⅲ層上部から中部にかけて，黒曜石製の抉入石器・石刃・剥片が出土している。

当地点から出土した黒曜石製横長剥片は，出土層位や石材などから，平成10年度の第6号石器集中地点との関係が想定される。当地点と第6号石器集中地点を含めた範囲で，接合関係は確認されていない。製品や石核が欠けていることから，極めて短期間に小規模な剥片剥離が行われ，不要とされた剥片類が廃棄されたものと考えられる。

第2号石器単独出土地点出土遺物観察表（第6図）

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q6	剥片	2.0	2.3	0.5	2.0	黒曜石	横長剥片,打面は礫面打面で,背面に前段階の剥離面と礫面を残す。	第Ⅲ層下部	PL.17・18



第6図　第2号石器単独出土地点

2　奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構は，竪穴住居跡６軒，掘立柱建物跡５棟である。これらの遺構は主に台地縁辺部から谷部に向かう緩斜面に存在している。竪穴住居跡はそれぞれ重複し合うことなく，竈はすべて北壁に構築されている。側柱式建物跡は，南北棟１棟，東西棟１棟である。また，総柱式建物跡は２間×２間の３棟で，調査区域の西部で一列に並んでいる。これらの遺構の確認面は，標高22.9～23.5mである。以下，それらの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

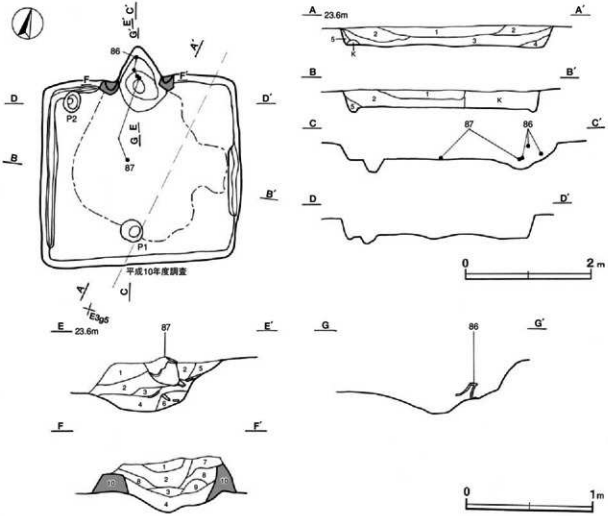
なお，第132号住居跡は，平成10年度のⅡB区と平成13年度のⅦ区にまたがって位置している。住居跡の記述については，基本的に平成13年度の調査状況を中心とした。

（１）竪穴住居跡

第132号住居跡（第７・８図）

位置　調査区域の南東部，E３f5区。標高23.4mの台地縁辺部に位置している。平成10年度のⅡB区にまたがっているため，一部が『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集で報告されている。平成13年度は竈を含めた西側を調査した。遺存状況は良好である。

規模と形状　長軸3.12m，短軸2.94mの方形である。壁高は21～36cmで外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－15°－Wである。



第７図　第132号住居跡実測図

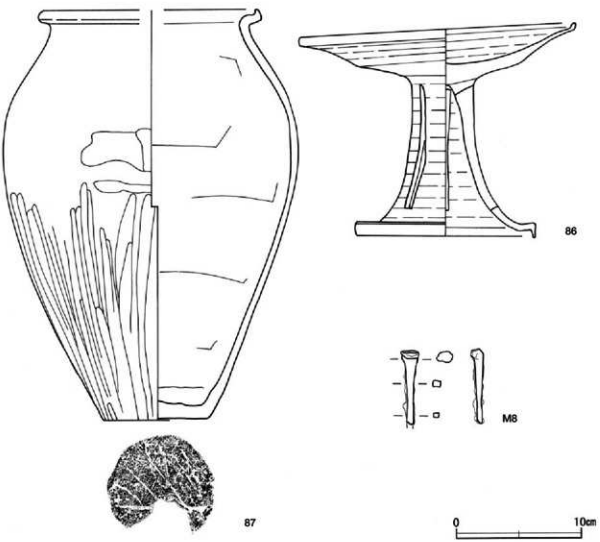
床　中央部に凹凸が見られるものの，ほぼ平坦である。壁際やコーナー部付近を除いて踏み固められている。竈の前面は硬化が著しい。

ピット　2か所。P1は南壁際の中央部に位置しているため，出入り口施設に関係するピットと推定される。深さは20cmである。P2は北西コーナー部に位置し，性格は不明である。

竈　北壁中央部に付設され，遺存状況は不良である。焚口から燃焼部奥壁までの長さは1.06mである。火床部は楕円形を呈し，底面は床面から深さ16cmで，皿状に掘りくぼめられている。最終の火床面は第4層上面に想定されるが，明瞭な赤変硬化は認められなかった。燃焼部奥壁は階段状に外傾しながら立ち上がり，壁外に50cm張り出している。残存する袖部の最大幅は1.19mで，黄褐色の砂質粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを含んでいる。第1～9層は流入土，第4層・第6層は火床面下位の埋土，第10層は袖部の構築土と考えられる。

竈土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化物微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子微量
4　黒 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
5　黒 褐 色　炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子微量
6　暗 褐 色　焼土ブロック・炭化物少量
7　暗 褐 色　ロームブロック微量
8　黒 褐 色　砂質粘土ブロック多量，ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
9　暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
10　暗 褐 色　砂質粘土ブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量



第8図　第132号住居跡出土遺物実測図

覆土　5層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
2　黒褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量
3　暗褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック微量
4　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片144点（坏15，高台付坏２，鉢７，甕82，不明38），須恵器片212点（坏132，高台付坏２，盤１，蓋２，高盤10，鉢24，長頸瓶２，甕１，不明38），灰釉陶器１点（長頸瓶），金属製品１点（釘），礫６点が，主に覆土中層から下層にかけて，まばらに廃棄されたような状態で出土している。竈の火床面から正位の状態で確認された86は支脚に転用されたと考えられ，87がその上に置かれた状態で出土している。また，混入した剥片３点が出土している。

所見　竈は遺存状況が不良であったものの，86・87の出土状態は，竈の掛け口の位置や使用状況を考える上で示唆に富んでいる。平成10年度の調査成果を踏まえ，時期は出土土器から８世紀中葉～後葉と考えられる。

第132号住居跡出土遺物観察表（第８図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
86	須恵器	高盤	21.8	17.0	14.2	石英・長石・雲母	黄灰	普通	坏部・脚部ロクロナデ，3か所の透かし孔ヘラ切り	竈底面	転用支脚 83%	PL12
87	土師器	甕	17.2	32.7	8.4	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口辺部横ナデ，胴部外面下半ヘラ磨き，内面ヘラナデ	竈下層・床面	73%	PL12

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M8	釘	（5.9）	1.4	（0.5）	（9.1）	鉄	頭部先端折り曲げ，断面長方形，先端部欠損	覆土下層	PL16

第500号住居跡（第９～12図）

位置　調査区域の南部，E３f3区。標高23.3mの台地縁辺部に位置している。第132号住居跡の西側に位置し，第57号溝と北西コーナー部で接している。遺存状況は良好である。

規模と形状　長軸5.29m，短軸5.10mの方形である。壁高は24～50cmでほぼ直立しているが，東壁側は外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－11°－Wである。

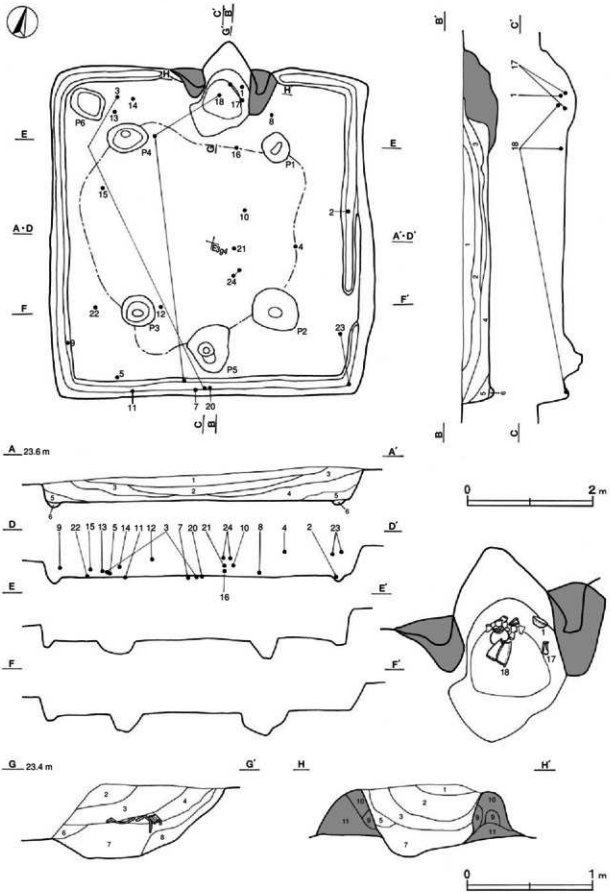
床　中央部がやや盛り上がっているが，ほぼ平坦である。主柱穴と考えられるP１～P４の内側は，よく踏み固められているが，壁際やコーナー部付近は軟弱である。壁溝は東壁の一部で途切れているが，竈の範囲を除く壁下に確認されている。深さは６～12cmで，断面形はU字形を呈している。

ピット　６か所。P１～P４は規模と配置から主柱穴と考えられ，深さは28～42cmである。P５は南壁際の中央部に位置しているため，出入り口施設に関係するピットと推定され，深さは20cmである。P６は北西コーナー部に位置し，深さ20cmであるが，性格は不明である。

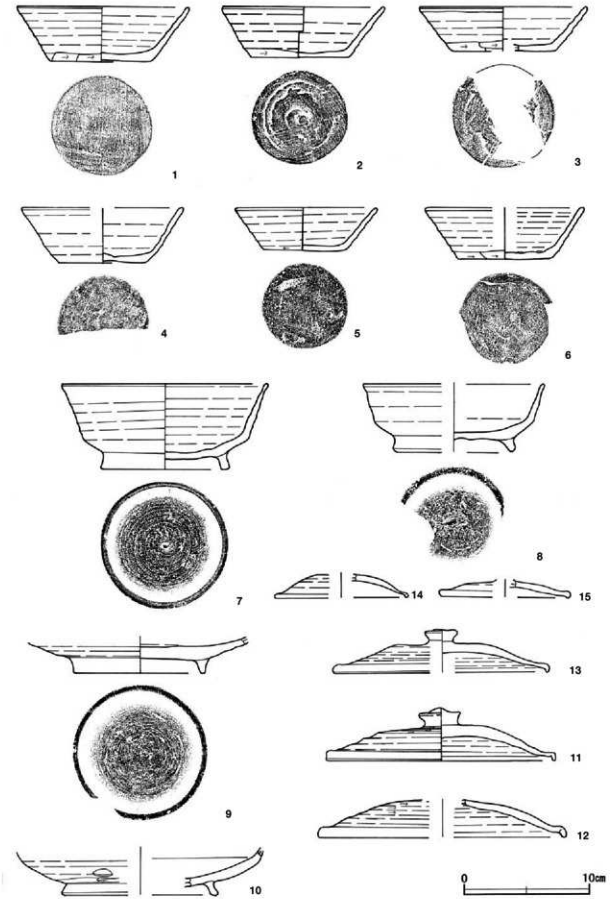
竈　北壁中央部に付設され，遺存状況は良好である。焚口から燃焼部奥壁までの長さは1.55mである。燃焼部は不整楕円形を呈し，底面は床面から深さ16cmで，皿状に掘りくぼめられている。最終の火床面は第５層上面に想定されるが，明瞭な赤変硬化は認められなかった。燃焼部奥壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり，壁外に46cm張り出している。残存する袖部の最大幅は1.70mで，黄褐色の砂質粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを含んでいる。第１～６層は流入土，第７層・第８層は火床面下位の埋土，第９～11層は袖部の構築土と考えられる。

竈土層解説

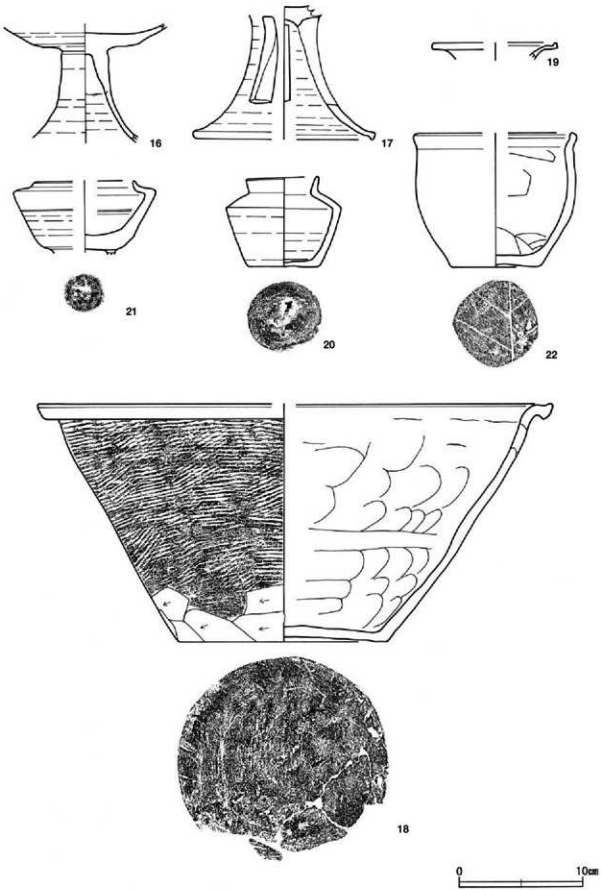
1　暗褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化物・砂質粘土粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
3　暗褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物・砂質粘土粒子微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量
6　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量



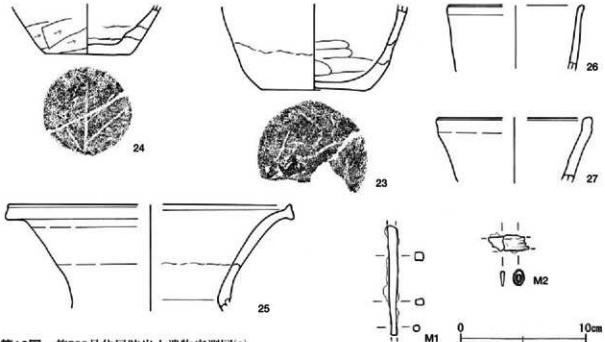
第９図　第500号住居跡実測図



第10図　第500号住居跡出土遺物実測図(1)



第11図　第500号住居跡出土遺物実測図(2)



第12図　第500号住居跡出土遺物実測図(3)

7　暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭化材・ローム粒子・砂質粘土粒子微量
8　黒褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量
9　暗赤褐色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子微量
10　暗褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・砂質粘土粒子・炭化粒子微量
11　にぶい黄褐色　砂質粘土ブロック多量，焼土ブロック少量，ローム粒子微量

覆土　6層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　焼土ブロック少量，ローム ブロック・炭化物微量
2　黒褐色　焼土ブロック中量，ローム ブロック少量，炭化物微量
3　暗褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
4　黒褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量
5　暗褐色　ローム ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　黒褐色　ローム ブロック少量

遺物出土状況　土師器片894点（坏9，盤2，蓋4，甕700，甑1，不明178），須恵器片949点（坏398，高台付坏10，盤5，蓋12，高盤14，鉢272，長頸瓶1，短頸壺3，壺9，甕6，コップ形土器2，捏鉢2，不明215），金属製品2点（刀子1，不明1），瓦1点（平瓦），土製品1点（支脚），焼成粘土塊12点，礫6点が，主に覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。竈内からは，胴部から底部の土師器甕を逆位に据えて転用支脚とし，その上に須恵器坏片7枚が重ねられた状態で出土している。また，南壁中央部の壁直下には，7や11，20が遺棄されたような状態で出土している。そのほか，混入した縄文土器片3点，剥片7点，陶磁器片4点が出土している。

所見　竈内から出土した土師器甕の転用支脚の上に重ねられた須恵器坏片は，支脚の高さを調整したものと考えられる。また，南壁中央部の壁直下から並んで出土した完形の須恵器蓋や短頸壺・高台付坏は，意図的に配置されたような状態であるが，18は，竈内の大形破片と南壁中央部の壁直下の7と20に挟まれた状態で出土した破片が接合しているため，竈及び住居を廃絶する際の儀礼的な行為の結果とも考えられる。時期は出土土器から8世紀後葉と考えられる。

第500号住居跡出土遺物観察表（第10～12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
1	須恵器	坏	13.4	4.4	8.0	石英・長石・雲母	黄灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ，体部外面下端ヘラ削り，底部外面一方向のヘラ削り	竈下層	100%	PL.3
2	須恵器	坏	12.8	4.0	7.6	石英・長石・雲母	黄灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ，体部外面下端ヘラ削り，底部外面回転ヘラ削り後ヘラナデ	床面	70%	PL.3
3	須恵器	坏	13.2	3.5	[8.0]	石英・長石・雲母	灰褐	普通	口辺部・体部ロクロナデ，体部外面下端ヘラ削り，底部外面回転ヘラ削り	床面	45%	PL.3
4	須恵器	坏	[12.6]	4.3	7.0	石英・長石・雲母	浅黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ	覆土上層	45%	
5	須恵器	坏	11.0	3.4	6.4	石英・長石	灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ，体部外面下端ヘラ削り，底部外面一方向のヘラ削り後ヘラナデ	覆土下層	45%	PL.3

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
6	須恵器	坏	[12.4]	4.0	7.4	石英・長石・雲母	褐灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ,体部外面下端ヘラ削り,底部外面多方向のヘラ削り	覆土上層	45%
7	須恵器	高台付坏	16.2	6.8	10.0	石英・長石・白色粒状物	灰褐	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面回転ヘラ削り後高台貼り付け	床面	80% PL.3
8	須恵器	高台付坏	[14.2]	5.4	[9.2]	石英・長石・雲母	黄灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土下層	50%
9	土師器	盤	−	(2.9)	10.4	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	底部外面回転ヘラ削り,高台貼り付け後ナデ	覆土下層	50%
10	須恵器	盤	−	(3.7)	[12.1]	石英・長石・雲母	黄灰	普通	底部外面回転ヘラ削り,高台貼り付け後ナデ	覆土下層	10%
11	須恵器	蓋	18.0	4.1	−	石英・長石・雲母	褐灰	普通	天井部外面回転ヘラ削り,擬宝珠状のつまみ貼付	床面	100% PL.3
12	須恵器	蓋	[19.6]	(2.9)	−	石英・長石・小石	灰黄	普通	天井部外面回転ヘラ削り	覆土中層	45%
13	須恵器	蓋	[16.8]	3.4	−	石英・長石・白色粒状物	灰	普通	天井部外面回転ヘラ削り,擬宝珠状のつまみ貼付	覆土下層	60%
14	須恵器	蓋	[10.6]	(1.9)	−	石英・長石・白色粒状物	灰	普通	天井部外面回転ヘラ削り	覆土下層	45%
15	須恵器	蓋	[10.4]	(1.4)	−	石英・長石	灰黄	普通	天井部外面回転ヘラ削り	覆土下層	30%
16	須恵器	高盤	−	(9.6)	−	石英・長石・雲母	黄灰	普通	坏部・脚部ロクロナデ	覆土下層	70%
17	須恵器	高盤	−	(10.7)	[14.2]	石英・長石・雲母	暗灰黄	普通	脚部ロクロナデ,3か所の透かし孔ヘラ切り	竈下層	45%
18	須恵器	鉢	[41.0]	19.2	16.8	石英・長石	褐灰	普通	口辺部ロクロナデ,体部外面横位の平行叩き,内面円形の当て具痕,指頭押圧後ナデ	竈下層・覆土下層	45%
19	須恵器	長頸瓶	[9.8]	(1.4)	−	長石・雲母	灰黄褐	普通	口辺部ロクロナデ	覆土上層	5%
20	須恵器	短頸壺	5.7	7.2	5.9	長石・雲母	灰褐	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面ヘラ削り後ナデ	床面	100% PL.3
21	須恵器	短頸壺	[8.0]	(5.8)	−	石英・長石・雲母	灰黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面ヘラ削り後高台貼り付け	覆土下層	45% PL.3
22	土師器	甕	[12.4]	10.8	7.0	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口辺部横ナデ,胴部外面摩滅,内面ヘラナデ,指頭ナデ	床面	底部本葉痕 70% PL.3
23	土師器	甕	−	(6.7)	8.4	石英・長石・雲母	橙	普通	胴部外面摩滅,内面ヘラナデ,指頭ナデ	覆土上層	底部本葉痕 25%
24	土師器	甕	−	(3.9)	6.6	石英・雲母	明赤褐	普通	胴部外面ヘラ削り,内面ヘラナデ,指頭ナデ	覆土中層	底部本葉痕 25%
25	須恵器	甕	[22.4]	(8.3)	−	石英・長石	褐灰	普通	口辺部・頸部横ナデ,内面輪積み痕	覆土上層	5%
26	須恵器	コップ形土器	[10.5]	(5.3)	−	石英・長石	浅黄	普通	口辺部ロクロナデ	覆土下層	5%
27	須恵器	擂鉢	[12.2]	(5.2)	−	石英・雲母	灰褐	普通	口辺部ロクロナデ,11将部平坦	覆土中層	5%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	鏃	(8.6)	0.7	0.6	(11.8)	鉄	茎部,断面長方形,鏃身部・茎部先端欠損	覆土下	PL16
M2	刀子	(3.3)	(1.2)	(0.3)	(4.4)	鉄	両関,刀身部・茎部欠損,木質付着	覆土中	PL16

第501号住居跡（第13～15図）

位置　調査区域の北東部，D３h6区。標高23.1mの緩斜面に位置している。地形が北側に向かって傾斜していくため，北壁側がかなり削平されており，遺存状況は不良である。

規模と形状　長軸3.90m，短軸3.05mの長方形である。壁高は７～24cmでほぼ直立し，主軸方向はN－17°－Wである。

床　緩やかな凹凸が見られるが，ほぼ平坦である。全体的に北側に傾斜しており，主柱穴と考えられるＰ１～Ｐ４の内側は，踏み固められ，壁際やコーナー部付近は軟弱である。壁溝は北壁の一部で途切れるが，竈の範囲を除く壁下に確認されている。深さは３～８cmで，断面形はU字形を呈している。

ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ４は規模と配置から主柱穴と考えられ，深さは14～26cmである。

竈　北壁中央部に付設され，上部はかなり削平されており，遺存状況は不良である。焚口から燃焼部奥壁までの長さは0.76mである。火床部は隅丸方形を呈し，底面は床面からの深さが５cmで，皿状に掘りくぼめられている。最終の火床面は第３層上面に想定されるが，明瞭な赤変硬化は認められなかった。燃焼部奥壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり，壁外に５cm張り出している。残存する袖部の最大幅は0.96mで，黄褐色の砂質粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを含んでいる。第１～３層は流入土，第３層は火床面下位の埋土，第４層は袖部の構築土と考えられる。

竈土層解説

1　黒褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化物微量
3　黒褐色　砂質粘土粒子多量，ローム粒子・焼土粒子微量
4　暗褐色　砂質粘土ブロック多量，ローム粒子・焼土粒子微量

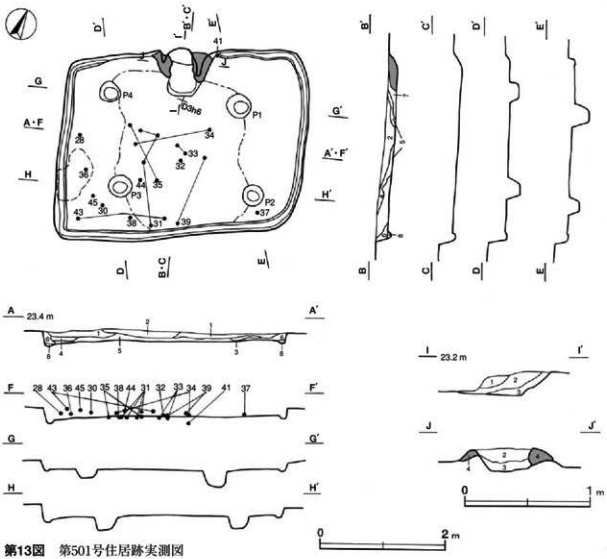
覆土　8層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説

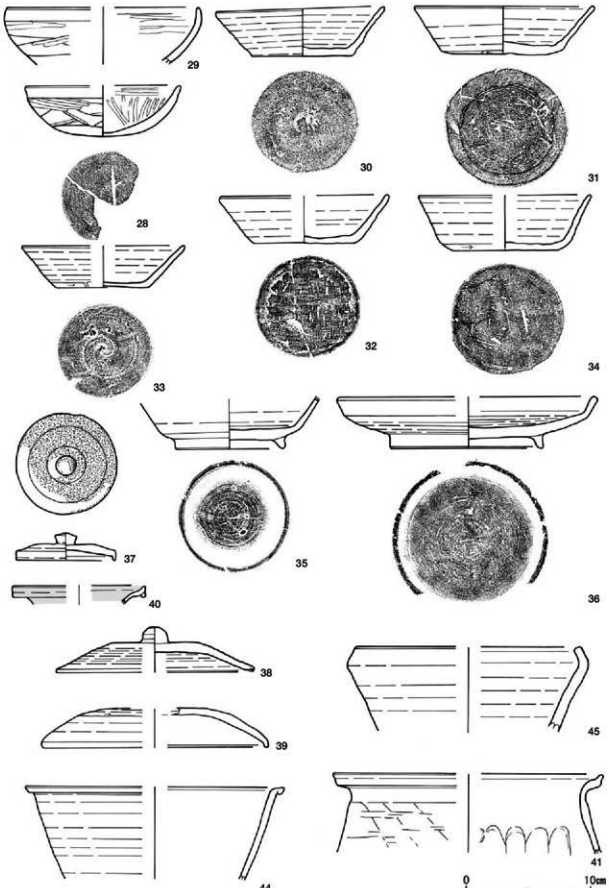
1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　にぶい褐色　砂質粘土ブロック多量，ローム粒子・炭化物微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量
6　褐　　色　ロームブロック少量
7　にぶい赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
8　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器片446点（坏17，甕360，不明69），須恵器片425点（坏233，高台付坏６，盤８，蓋43，鉢５，長頸瓶１，短頸壺３，甕84，甑２，捏鉢１，不明39），金属製品１点（刀子），瓦１点（平瓦），土製品１点（支脚），石製品１点（紡錘車），焼成粘土塊41点，礫１点が，主に南西部の覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。南西コーナー部付近の覆土中層から下層にかけて焼土層が堆積しており，その上面から36が，逆位の状態で出土し，37や30は，南壁際の床面から出土している。そのほか，混入した剥片２点が出土している。

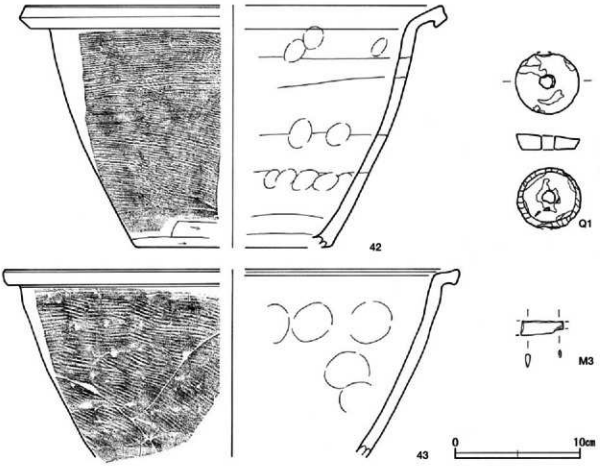
所見　遺物のほとんどが破片であり，南西部の覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土していることから，住居が廃絶されて窪地化した段階で投棄されたものと考えられる。南西コーナー部付近で確認された焼土層の存在から，火災を被った可能性も考えられるが，他にそれを裏付けるような状況は認められなかった。その焼土層上面から逆位の状態で出土した36や，南壁際の床面から出土した完形の37・30は，住居跡の廃絶時期を示す遺物であると考えられる。時期は出土土器から８世紀後葉と考えられる。



第13図　第501号住居跡実測図



第14図　第501号住居跡出土遺物実測図(1)



第15図　第501号住居跡出土遺物実測図(2)

第501号住居跡出土遺物観察表（第14・15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
28	土師器	坏	[12.2]	4.0	－	石英・長石	赤褐	普通	口辺部外面横ナデ,体部外面ヘラ削り後ナデ,内面ヘラナデ	覆土中層	底部木葉痕 50%　PL.4
29	土師器	坏	[15.2]	(4.6)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	口辺部外面横ナデ,体部外面ヘラ削り,内面ヘラナデ	覆土中	70%
30	須恵器	坏	13.3	3.9	8.0	石英・長石・雲母	黄灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面回転ヘラ削り後ヘラナデ	床面	85%　PL.4
31	須恵器	坏	14.1	3.8	7.1	石英・長石	黄灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面回転ヘラ削り後外周ヘラ削り	床面	60%　PL.4
32	須恵器	坏	[13.2]	3.8	8.0	石英・長石・雲母	灰黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面回転ヘラ削り後一方向のヘラ削り	床面	50%　PL.5
33	須恵器	坏	[12.6]	3.4	7.2	石英・長石・雲母	灰黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ,体部外面下端ヘラ削り,底部外面回転ヘラ削り	床面	75%　PL.5
34	須恵器	坏	[13.6]	4.4	8.2	石英・長石・雲母	灰黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ,体部外面下端ヘラ削り,底部外面多方向のヘラ削り	床面	60%　PL.5
35	須恵器	高台付坏	－	(4.0)	8.5	石英・雲母	灰黄褐	普通	体部ロクロナデ,底部外面回転ヘラ削り後高台貼り付け	床面	50%
36	須恵器	蓋	[20.2]	4.1	12.0	石英・長石・雲母	灰黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面回転ヘラ削り後高台貼り付け	下層	70%　PL.5
37	須恵器	蓋	8.0	2.1	－	石英・長石	黄灰	普通	天井部外面回転ヘラ削り,擬宝珠状のつまみ貼付	床面	95%　PL.5
38	須恵器	蓋	[15.6]	(3.6)	－	石英・長石・雲母	灰黄褐	普通	天井部外面回転ヘラ削り,擬宝珠状のつまみ貼付	床面	45%
39	須恵器	蓋	[17.8]	(2.9)	－	石英・長石	灰	普通	天井部外面回転ヘラ削り	床面	30%
40	灰釉陶器	長頸瓶	[10.6]	(1.5)	－	黒色粒子	黄黄	普通	口辺部ロクロナデ	覆土中	5%
41	土師器	甕	[21.4]	(6.4)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口辺部横ナデ,胴部外面ヘラ削り後ナデ,内面ナデ・指頭押圧	床面	10%
42	須恵器	鉢	[33.0]	19.3	[15.5]	石英・雲母	褐灰	普通	口辺部ロクロナデ,体部外面横位の平行叩き,下端ヘラ削り,内面ナデ後指頭押圧	覆土上層	10%
43	須恵器	鉢	[36.0]	(14.9)	－	石英・長石・雲母	灰	普通	口辺部ロクロナデ,体部外面横位の平行叩き,下端ヘラ削り,内面ナデ後指頭押圧	覆土中層	10%
44	須恵器	鉢	[30.6]	(7.3)	－	石英・長石・雲母	灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ	覆土下層	20%
45	須恵器	鼎鉢形土器	[17.8]	(6.7)	－	石英・雲母・白色鉄状物	暗灰黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ	覆土中層	20%

番号	種　別	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q1	紡錘車	4.8	5.0	1.3	37.2	頁岩	両面欠損後再研磨，側面削り，中央部穿孔。孔径1.1cm	覆土上層	PL.5

番号	種　別	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M3	刀子	（3.4）	（1.1）	（0.4）	（2.8）	鉄	片関，刀身部・茎部欠損	覆土中	PL.16

第504号住居跡（第16図）

位置　調査区域の西部，E２e9区。標高22.9mの緩斜面に位置している。南側に向かって傾斜していく地形のため，南壁側がかなり削平されており，遺存状況は不良である。

重複関係　第57号溝に中央部南側を分断され，第152号掘立柱建物跡のP１・P２・P５に覆土を掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.92m，短軸4.61mの方形である。壁高は８～34cmでほぼ直立している。主軸方向はN－８°－Wである。

床　全体に緩やかな凹凸が見られるが，ほぼ平坦である。中央部から主柱穴と考えられるP１・P２の内側及び竈の前は，踏み固められているが，壁際やコーナー部付近は軟弱である。壁溝は南壁及び竈の範囲を除く壁下に確認されている。南部は覆土が削平され，さらに，第57号溝に掘り込まれているため，壁や床の遺存状況が不良であり，南壁にも壁溝は巡っていた可能性は高い。深さは４～８cmで，断面形はU字形を呈している。

ピット　５か所。P１～P４は規模と配置から主柱穴と考えられる。P１の深さは43cm，P２・P３は上部を第57号溝に削平されており，本来は深さ20cm程度と考えられる。P４は深さ10cmで極めて浅い。P５は南壁際の中央部に位置しているため，出入り口施設に関係するピットと推定され，深さは10cmである。

竈　北壁中央部に付設され，遺存状況は比較的良好である。焚口から燃焼部奥壁までの長さは1.25mである。火床部は楕円形を呈し，底面は床面から深さ11cmで，皿状に掘りくぼめられている。火床面は第７層上面に想定され，燃焼部の全体が赤変硬化している。燃焼部奥壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり，壁外に18cm張り出している。残存する袖部の最大幅は1.39mで，黄褐色の砂質粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを含んでいる。第１～７層は流入土，第７層は火床面下位の埋土，第８～11層は袖部の構築土と判断される。

竈土層解説

1　黄褐色　砂質粘土ブロック中量，焼土ブロック少量
2　黄褐色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量
3　暗褐色　焼土ブロック少量，炭化物・砂質粘土粒子微量
4　褐　　色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量
5　黄褐色　焼土ブロック多量，砂質粘土ブロック・炭化物少量
6　黄褐色　砂質粘土ブロック少量
7　褐　　色　焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子・砂微量
8　暗赤褐色　焼土ブロック・炭化物中量，ローム粒子・砂微量
9　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
10　暗褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量
11　明褐色　砂質粘土ブロック中量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

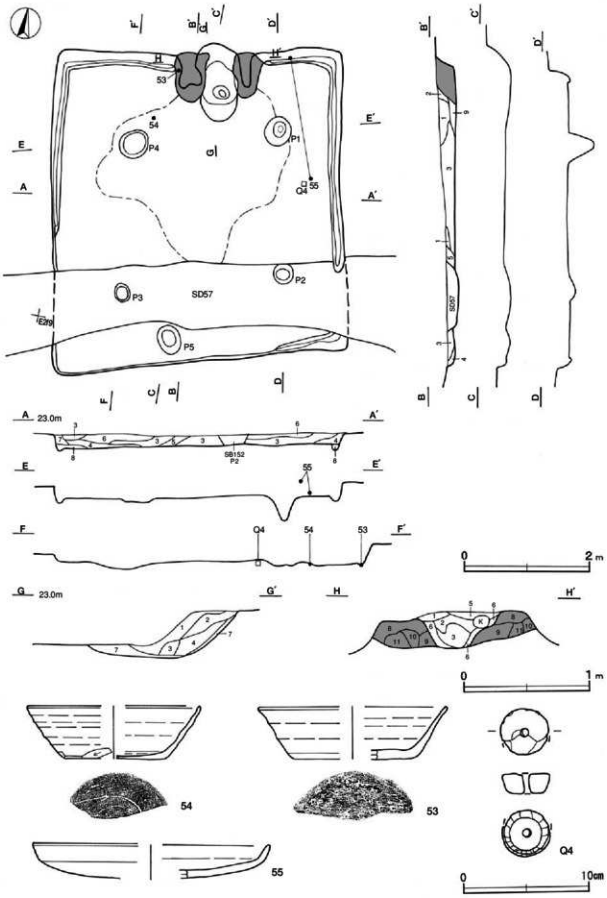
覆土　９層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
2　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
3　暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物微量
4　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
6　暗褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
7　暗褐色　ロームブロック少量
8　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
9　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物少量

遺物出土状況　土師器片27点（皿２，甕25），須恵器片13点（坏２，盤１，蓋１，鉢９），石製品１点（紡錘車）が，主に北東部の覆土上層から下層にかけて廃棄されたような状態でまばらに出土している。

所見　時期は出土した53・54などから，８世紀後葉～９世紀前葉と考えられる。



第16図　第504号住居跡・出土遺物実測図

第504号住居跡出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
53	須恵器	坏	〔14.8〕	4.1	〔9.4〕	石英・長石・雲母	黄褐	普通	口辺部・体部ロクロナデ,内・外面摩滅	竈袖	40%
54	須恵器	坏	〔13.8〕	4.2	〔8.0〕	長石・雲母	灰黄褐	普通	口辺部・体部ロクロナデ,体部外面下端ヘラ削り,底部外面回転ヘラ削り後一方向のヘラ削り	床面	20%
55	土師器	甕	〔16.8〕	（27）	〔6.4〕	石英・長石・雲母	橙	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面多方向のヘラ削り	覆土上一下層	20%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	紡錘車	3.7	3.9	1.6	〔23.2〕	頁岩	両面研磨，側面削り，中央部穿孔，一部欠損，孔径0.6cm	床面	PL7

第505号住居跡（第17・18図）

位置　調査区域の中央部，E３c2区。標高23.2mの台地縁辺部に位置している。第153号掘立柱建物跡の西側に位置し，遺存状況は良好である。

規模と形状　長軸4.77m，短軸4.50mの方形で，壁高は20～28cmでほぼ直立している。主軸方向はN－８°－Wである。

床　全体に緩やかな凹凸が見られるが，ほぼ平坦である。全体的に軟弱で，竈の前が部分的に硬化している。壁溝は東壁の一部と竈の範囲を除く壁下に確認され，深さは５～20cmで，断面形はU字形を呈している。

ピット　４か所。P１～P４は規模と配置から主柱穴と考えられ，深さは13～21cmである。

竈　北壁中央部に付設され，遺存状況は良好である。焚口から燃焼部奥壁までの長さは1.65mである。火床部は楕円形を呈し，底面は床面から深さ18cmで，皿状に掘りくぼめられている。火床面は長径73cm，短径47cmの楕円形を呈し，赤変硬化している。燃焼部奥壁は階段状に立ち上がり，壁外に60cm張り出している。残存する袖部の最大幅は1.35mで，黄褐色の砂質粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを含んでおり，第１～９層は流入土，第10層は袖部の構築土と判断される。

竈土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
2　暗褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
3　暗褐色　炭化材中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
4　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量
6　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
7　黒褐色　焼土ブロック多量，炭化物少量，ローム粒子微量
8　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
9　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子微量
10　暗褐色　砂質粘土ブロック多量，ローム粒子・焼土粒子微量

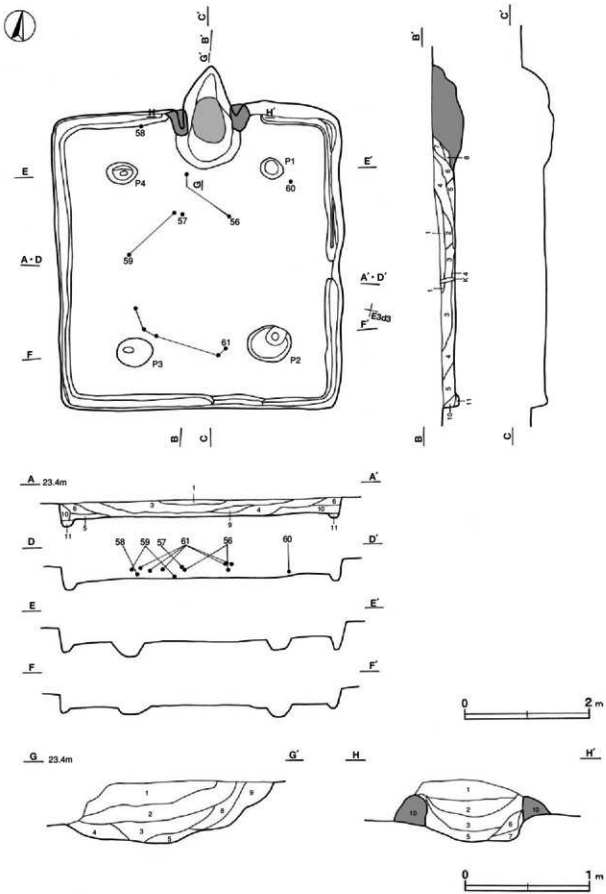
覆土　11層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説

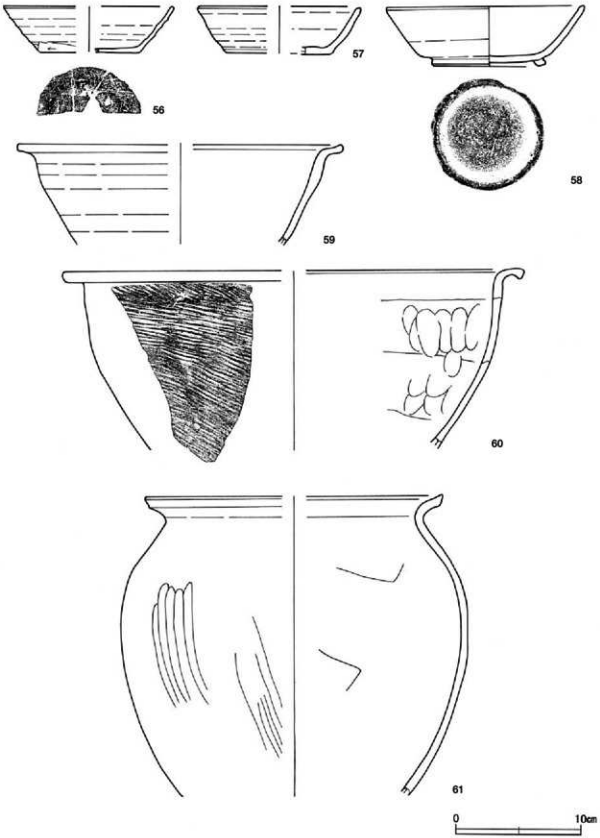
1　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化物微量
3　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
4　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　黒褐色　焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量
7　暗褐色　焼土ブロック・炭化物少量，ローム粒子微量
8　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　黒褐色　焼土ブロック・炭化材中量，ローム粒子微量
10　黒褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
11　褐色　ロームブロック中量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器片325点（坏20，高台付坏４，皿１，甕228，不明72），須恵器片64点（坏41，蓋２，鉢11，長頸瓶１，不明９），焼成粘土塊８点，礫４点が，主に中央部の覆土上層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。そのほか，混入した縄文土器片２点が出土している。

所見　遺物のほとんどが破片であり，中央部の覆土上層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土しており，住居が廃絶されて窪地化した段階で投棄されたと考えられる。時期は覆土下層から出土した58などから，８世紀後葉～９世紀前葉と考えられる。



第17図　第505号住居跡実測図



第18図　第505号住居跡出土遺物実測図

第505号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
56	須恵器	坏	[13.4]	3.6	[8.0]	石英・長石・雲母	灰黄褐	普通	1.1辺部・体部ロクロナデ,体部外面下端ヘラ削り,底部外面回転ヘラ削り後ナデ	覆土中層	40%
57	須恵器	坏	[12.8]	3.7	[8.6]	長石・雲母	黄灰	普通	1.1辺部・体部ロクロナデ,底部外面多方向のヘラ削り	覆土上層	20%
58	土師器	高台付坏	15.7	4.8	8.8	石英・赤色粒子	橙	普通	1.1辺部・体部ロクロナデ,高台貼り付け,内・外面摩滅	下層	70%　PL.8
59	須恵器	鉢	[25.8]	(8.0)	－	石英・長石・雲母	灰黄褐	普通	1.1辺部ロクロナデ	覆土中～下層	20%
60	須恵器	鉢	[36.6]	(14.2)	－	長石・雲母	灰黄褐	普通	1.1辺部ロクロナデ,体部外面横位の平行叩き,内面ナデ後若干押圧	下層	10%
61	土師器	甕	[23.4]	(24.0)	－	石英・雲母	橙	普通	1.1辺部横ナデ,胴部外面幅広いヘラ磨き,内面ヘラナデ	覆土上～中層	40%

第507号住居跡（第19～23図）

位置　調査区域の東部，E３a4区。標高23.5mの台地縁辺部に位置している。遺存状況は全体的に良好である。

重複関係　第55号溝に北壁から竈の上部を掘り込まれている。

規模と形状　長軸5.72m，短軸5.63mの方形で，壁高は30～60cmでほぼ直立している。主軸方向はN－12°－Wである。

床　中央部がややくぼんでいるが，ほぼ平坦である。主柱穴と考えられるP１～P４の内側は，踏み固められているが，壁際やコーナー部付近は軟弱である。壁溝は竈の範囲を除く壁下を周回し，深さは４～10cmで，断面形はU字形を呈している。

ピット　５か所。P１～P４は規模と配置から主柱穴と考えられ，深さは37～42cmである。P５は南壁際の中央部に位置しているため，出入り口施設に関係するピットと推定され，深さは18cmである。

竈　北壁中央部に付設されている。第55号溝に上部を掘り込まれているが，遺存状況は良好である。焚口から燃焼部奥壁までの長さは1.58mである。火床部は不整楕円形を呈し，底面は床面から深さ５cmで，皿状に掘りくぼめられている。また，焚き口も楕円形に床から18cmほど掘り込まれているが，火床部の掘り方と考えられる。最終の火床面は第６層上面に想定され，燃焼部の全体が赤変硬化している。燃焼部奥壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり，壁外に52cm張り出している。残存する袖部の最大幅は1.60mで，黄褐色の砂質粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを含んでいる。第１～５層は竈内に流入土，第６層・第７層は火床面下位の埋土，第８層・第９層は袖部の構築土と考えられる。

竈土層解説

1　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・砂質粘土粒子微量
2　褐　　色　砂質粘土ブロック多量，焼土粒子微量
3　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物・砂質粘土ブロック少量
4　暗　赤　褐　色　焼土ブロック多量，炭化物・砂質粘土ブロック少量
5　暗　赤　褐　色　焼土ブロック中量，ローム・ブロック・炭化物少量
6　黒　褐　色　ローム・ブロック・焼土ブロック・炭化物少量
7　暗　褐　色　焼土ブロック多量，炭化材・砂質粘土ブロック少量
8　にぶい黄橙色　砂質粘土ブロック中量，焼土ブロック少量
9　にぶい黄橙色　砂質粘土ブロック中量，焼土粒子・炭化物少量

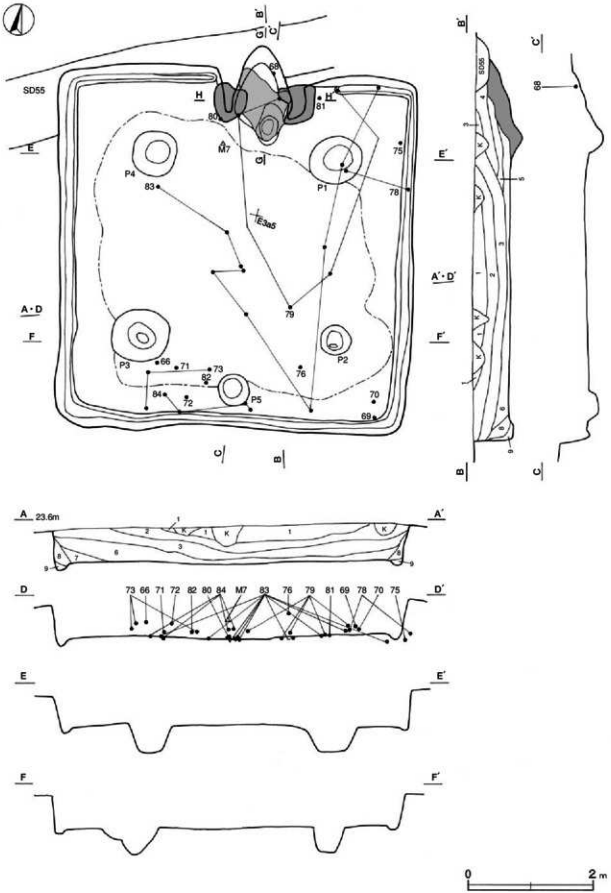
覆土　９層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説

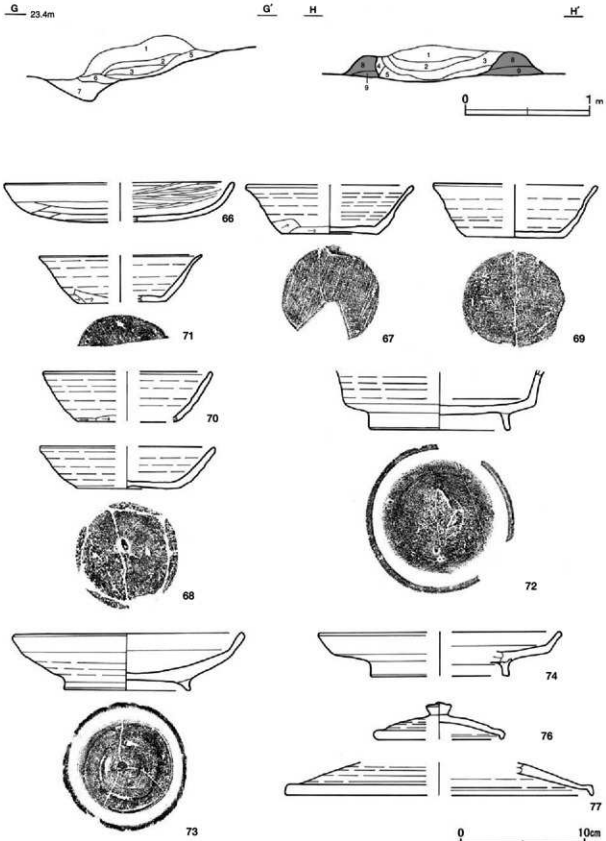
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム・ブロック・焼土ブロック・炭化物微量
3　黒褐色　ローム・ブロック・焼土ブロック中量，炭化物少量
4　暗褐色　ローム・ブロック・焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量，炭化物微量
5　暗褐色　焼土ブロック少量，炭化材微量
6　黒褐色　ローム・ブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
7　暗褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
8　黒褐色　ローム・ブロック・焼土粒子少量
9　暗褐色　ローム・ブロック少量

遺物出土状況　土師器片901点（坏９，高台付坏５，蓋２，鉢30，甕730，不明125），須恵器片1258点（坏512，高台付坏19，盤22，蓋156，高盤10，鉢144，長頸瓶１，壺10，甕244，甑17，捏鉢３，不明120），金属製品２点（刀子，鎌），焼成粘土塊16点，礫８点が，主に覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。竈内の燃焼部奥壁から須恵器坏の破片がまばらに投棄されたような状態で出土している。そのほか，混入した縄文土器片１点，剥片４点，陶器片３点が出土している。

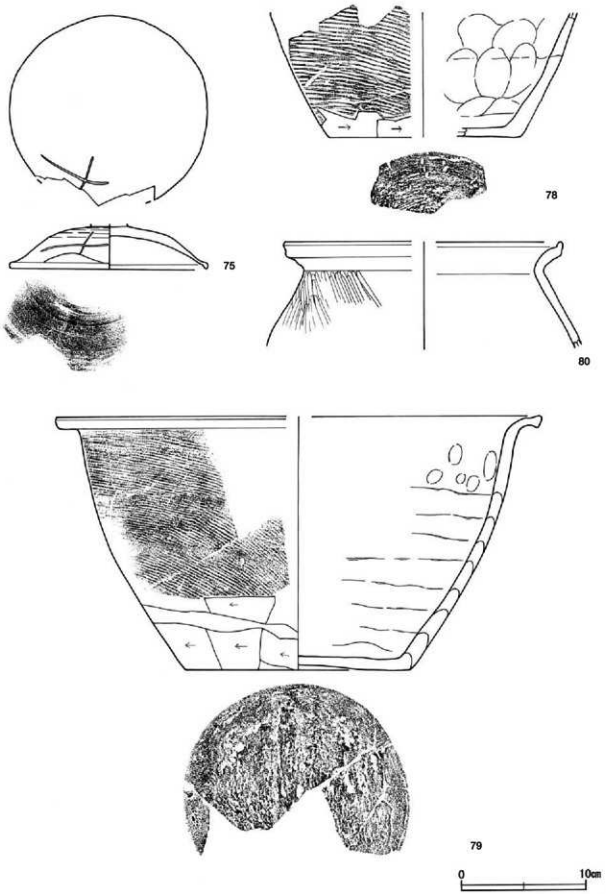
所見　遺物のほとんどが破片であり，散在する破片同士が接合するものが多い。こうしたことから，大半の遺物は住居が廃絶されて窪地化した段階で投棄されたと考えられる。時期は竈から出土した68や79などから，８世紀中葉～後葉と考えられる。



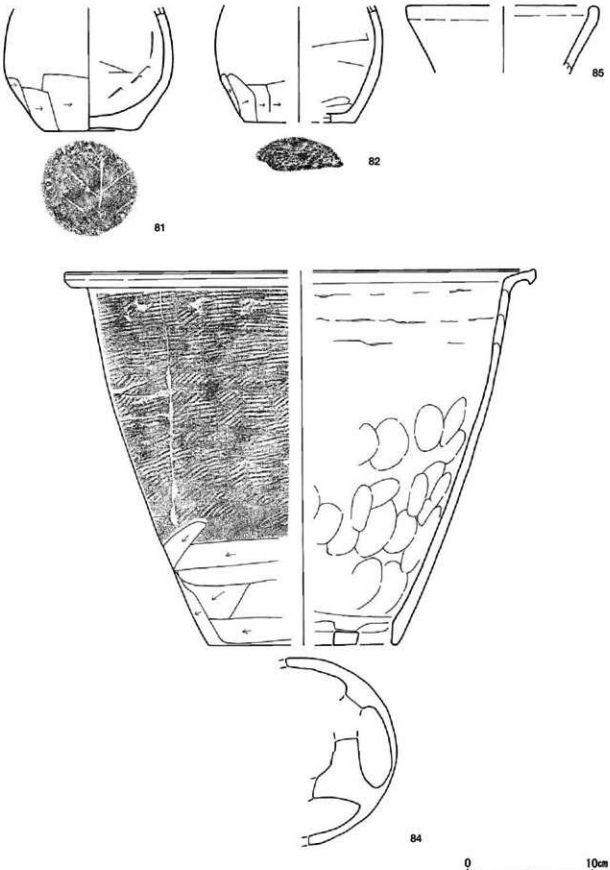
第19図　第507号住居跡実測図



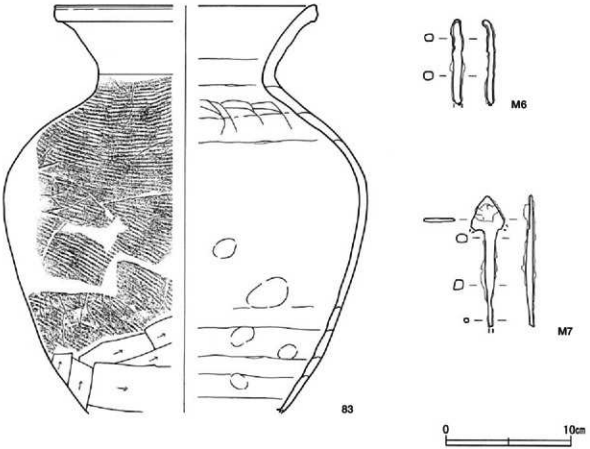
第20図　第507号住居跡・出土遺物実測図



第21図　第507号住居跡出土遺物実測図(1)



第22図　第507号住居跡出土遺物実測図(2)



第23図　第507号住居跡出土遺物実測図(3)

第507号住居跡出土遺物観察表（第20～23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
66	土師器	甕	[18.2]	(3.1)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	口辺部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラ磨き	覆土中層	30%
67	須恵器	坏	[13.2]	3.9	7.8	石英・長石	灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ,体部外面下端ヘラ削り,底部外面一方向のヘラ削り	覆土下層	60%　PL. 9
68	須恵器	坏	[13.8]	3.3	8.0	石英・長石・雲母	暗灰黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面一方向のヘラ削り後ナデ	竈下層	60%
69	須恵器	坏	[13.0]	4.2	8.0	石英・長石・雲母・白色針状鉱物	暗灰黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面多方向のヘラ削り後ナデ	覆土下層	50%
70	須恵器	坏	[13.4]	(3.9)	[7.9]	石英・長石・雲母	黄灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ，体部外面下端ヘラ削り,底部外面一方向のヘラ削り	覆土下層	20%
71	須恵器	坏	[13.2]	3.3	[7.0]	石英・長石・小石	褐灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ,体部外面下端ヘラ削り,底部外面一方向のヘラ削り	覆土下層	25%
72	須恵器	高台付坏	－	(4.8)	11.2	石英・長石・小石	灰	普通	体部ロクロナデ,底部外面回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中層	底部外面「×」ヘラ描き 60%
73	須恵器	壺	18.1	4.7	10.0	石英・長石・雲母	黄灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ,底部外面回転ヘラ削り,高台貼り付け後ナデ	覆土下層	65%　PL. 9
74	須恵器	壺	[19.2]	3.5	[11.0]	石英・長石	褐灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ，高台貼り付け後ナデ	覆土中層	10%
75	須恵器	蓋	15.8	(3.6)	－	石英・長石・小石	灰	普通	天井部外面回転ヘラ削り	床面	天井部外面「×」ヘラ描き 85%　PL. 9
76	須恵器	蓋	[10.2]	2.8	－	石英・長石・白色針状鉱物	灰	普通	天井部外面回転ヘラ削り,擬宝珠状のつまみ貼付	覆土中層	30%
77	須恵器	蓋	[24.6]	(2.5)	－	長石・黒色粒子	灰黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ	覆土下層	20%
78	土師器	鉢	－	(9.9)	[15.2]	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面横位の平行叩き,下端ヘラ削り,内面円形の当て具痕	覆土下層	15%
79	須恵器	鉢	[38.4]	20.1	17.8	石英・長石	灰	普通	口辺部ロクロナデ,体部外面横位の平行叩き,下端ヘラ削り,内面ナデ後指頭押圧	竈下層・覆土下層	35%
80	土師器	甕	[22.0]	(8.4)	－	石英・雲母	橙	普通	口辺部横ナデ,胴部外面ヘラ磨き,内面ナデ	覆土下層	5%
81	土師器	甕	－	(9.7)	7.0	石英・長石・雲母	赤褐	普通	胴部外面下端ヘラ削り,内面ヘラナデ	床面	底部本葉痕 60%
82	土師器	甕	－	(9.3)	[8.8]	石英・長石・雲母	橙	普通	胴部外面下端ヘラ削り,内面ヘラナデ	覆土下層	20%
83	須恵器	甕	[22.8]	(32.4)	－	石英・長石・雲母	黄灰	普通	口辺部・頸部横ナデ,胴部外面横位の平行叩き,内面ナデ,円形の当て具痕,輪積み痕,指頭押圧痕	床面	40%　PL. 9
84	須恵器	瓶	[37.4]	29.8	[15.0]	石英・長石・雲母	黄灰	普通	口辺部横ナデ,胴部外面横位の平行叩き,下端ヘラ削り,内面ナデ,円形の当て具痕,輪積み痕	覆土下層～床面	40%
85	須恵器	捏鉢	[15.2]	(5.3)	－	石英・長石・雲母	黄灰	普通	口辺部ロクロナデ,口唇部平坦	覆土中層	20%

番号	種　別	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
M6	釘	（6.8）	（0.9）	（1.0）	（9.1）	鉄	断面長方形，上部彎曲，頭部・先端部欠損	覆土下層	PL16
M7	鏃	（10.5）	（2.6）	（0.5）	（17.9）	鉄	茎部断面方形，篦被部断面長方形，逆刺先端・茎部先端欠損	覆土中層	PL16

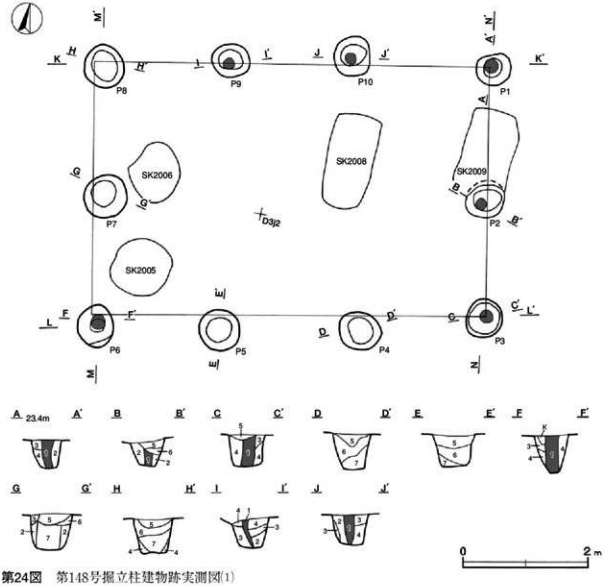
（２）　掘立柱建物跡

第148号掘立柱建物跡（第24・25図）

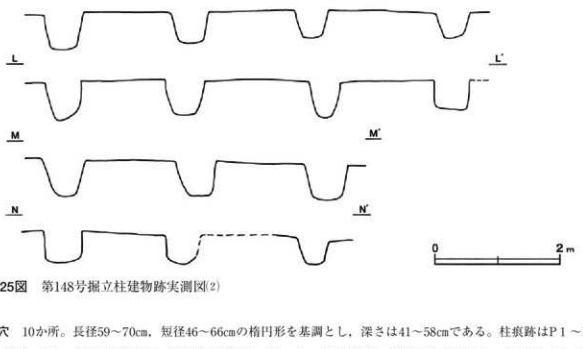
位置　調査区域の中央部，Ｄ３i1・Ｄ３i2・Ｄ３j1・Ｄ３i2区。標高23.1mの台地縁辺部に位置している。西10mには柱筋が通る総柱式の第149号掘立柱建物跡が，南東9.5mには柱筋が通る南北棟で側柱式の第153号掘立柱建物跡が位置している。

重複関係　第2009号土坑にＰ２の北側を掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間，柱穴数10か所の側柱式建物跡で，桁行方向N－81°－Eの東西棟である。桁行6.25m，梁行3.96mで，面積は24.75㎡であり，柱間寸法は桁行が1.93～2.22m，梁行が1.98～2.12mである。桁間７尺，梁間は南梁間（Ｐ１・Ｐ２間，Ｐ６・Ｐ７間）６尺，北梁間（Ｐ１・Ｐ２間，Ｐ７・Ｐ８間）７尺と２間の寸法が異なる。



第24図　第148号掘立柱建物跡実測図(1)



第25図　第148号掘立柱建物跡実測図(2)

柱穴　10か所。長径59～70cm，短径46～66cmの楕円形を基調とし，深さは41～58cmである。柱痕跡はP１～P３・P６・P９・P10で確認され，柱痕跡の径は15～20cmで，土層は粘性・締まりとも弱いロームブロック・焼土粒子を微量含んだ黒褐色土で，第１層に相当する。掘り方の埋土はロームブロックを少量含んだ黒褐色土を基調とし，強く叩き締められた様子はなく，第２～４層が相当する。P４・P５・P７・P８は，柱が抜き取られ，その覆土は，ロームブロックを中量含んだ黒褐色土を基調とし，第５～７層が相当する。

土層解説

1　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子微量
2　極暗褐色　ロームブロック少量
3　暗 褐 色　ロームブロック中量
4　黒 褐 色　ロームブロック少量
5　黒 褐 色　ロームブロック中量
6　黒 褐 色　ロームブロック微量
7　黒 褐 色　ロームブロック中量

遺物出土状況　P４の抜取り穴の覆土から土師器片２点（甕），P７の抜取り穴の覆土から土師器片１点（甕），須恵器片１点（坏），P９の掘り方の埋土から土師器片４点（甕），須恵器片１点（高盤）が出土している。いずれも細片で図示できない。そのほか，混入した石核１点がP４の覆土から出土している。

所見　本跡の梁行方向と南東に位置する第153号掘立柱建物跡の桁行方向がほぼ一致し，また，西に位置する第149号掘立柱建物跡や第150号掘立柱建物跡とも柱筋が通ることから，同時期に機能していたと考えられ，南側に開口する「コの字状」の配置をとっている。さらに，主軸方向が一致する竪穴住居跡としては，８世紀中葉～後葉に比定される第507号住居跡や第132号住居跡があり，これらと本跡は同時期に群として機能していたと推測される。時期は８世紀中葉～後葉であり，性格は「屋」と考えられる。

第149号掘立柱建物跡（第26図）

位置　調査区域の西部，D２i7・D２i8・D２j7・D２i8区。標高23.1mの緩斜面に位置している。東10mには柱筋が通る側柱式の第148号掘立柱建物跡，南2.1mにも柱筋が通る総柱式の第150号掘立柱建物跡がそれぞれ位置し，総柱式の第151号掘立柱建物跡などと，一群を形成している。

重複関係　第2024号土坑にP２・P９の上部を掘り込まれている。

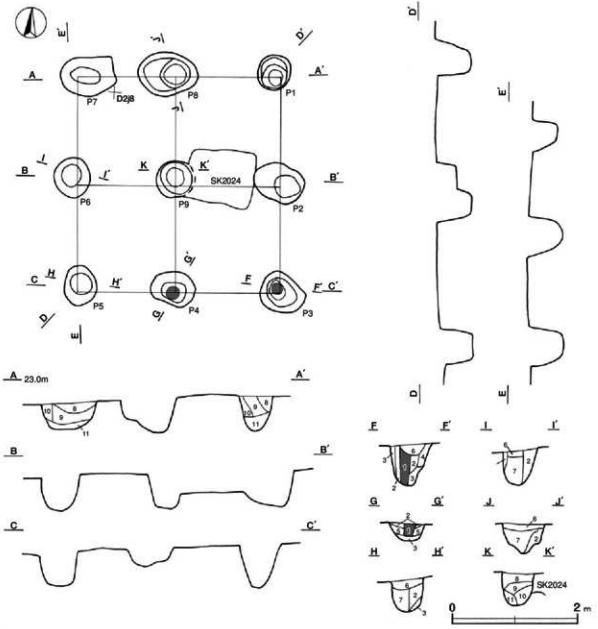
規模と構造　桁行２間，梁行２間，柱穴数９か所の総柱建物跡で，桁行方向はN－４°－Wの南北棟である。桁行3.42m，梁行3.21mで，面積は10.98㎡である。柱間寸法は桁行が1.70～1.72m，梁行が1.56～1.68mであり，

いずれも柱間５尺５寸と考えられる。

柱穴　９か所。長径56～73cm，短径48～70cmの楕円形を基調とし，深さは36～68cmである。柱痕跡はＰ３・Ｐ４で確認され，柱痕跡の径は18～20cmで，土層は粘性・締まりとも弱いロームブロックを微量含んだ黒褐色土であり，第１層に相当する。掘り方の埋土はロームブロックを少量含んだ黒褐色土を基調とするが，強く叩き締められた様子はなく，第２～５層が相当する。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５～Ｐ10は，柱が抜き取られ，その覆土は，ロームブロックを中量と，炭化物を微量含んだ黒褐色土を基調とし，第６～11層が相当する。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック微量
2　黒褐色　ロームブロック少量
3　暗褐色　ロームブロック微量
4　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック少量
6　暗褐色　ロームブロック中量
7　暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
8　暗褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
9　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量
10　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
11　黒褐色　ロームブロック・炭化物微量



第26図　第149号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況　P１の抜取り穴の覆土から土師器片４点（坏１，甕１，不明２），P３の掘り方の埋土から土師器片３点（坏１，甕２），須恵器片４点（坏２，不明２点），P５の抜取り穴の覆土から土師器片３点（甕）が出土している。いずれも細片で図示できない。そのほか，混入した礫１点がP５の覆土から出土している。

所見　本跡の南側に位置する第150号掘立柱建物跡と柱筋が通ることから，同時期に機能していた可能性が考えられ，第150号掘立柱建物跡は，９世紀中葉～後葉に比定される第506号住居に掘り込まれている。また，主軸方向が一致する竪穴住居跡としては，８世紀中葉～後葉に比定される第507号住居跡や第132号住居跡がある。これらと本跡はほぼ同時期に群として機能していたと推測され，南側に開口する「コの字状」の配置をとつている。時期は８世紀中葉～９世紀前葉であり，性格は「倉」と考えられる。

第150号掘立柱建物跡（第27図）

位置　調査区域の西部，E３a7・E３b8区。標高22.9mの緩斜面に位置している。北2.1mには柱筋が通る総柱式の第149号掘立柱建物跡，南５mには第151号掘立柱建物跡がそれぞれ位置し，南北一列に総柱式の建物跡群を形成している。

重複関係　第506号住居に南東隅の柱穴を掘り込まれている。

規模と構造　桁行２間，梁行２間，柱穴数９か所の総柱式建物跡で東西棟と考えられる。桁行方向はN－83°－Eであり，南東隅の柱穴は第506号住居に掘り込まれているため検出されず，８か所の柱穴を確認した。柱筋から見ると，梁行中央に位置するP２は東に30cm，P５は西に50cmそれぞれ張り出した亀甲形を呈している。P２・P５は棟持ち柱であろうか。桁行3.27m，梁行3.25mで，面積は12.25㎡ほどである。柱間寸法は桁行が1.76～1.79m，梁行が1.59～1.68mであり，桁行間尺は５尺５寸と考えられる。また，梁行についても柱間は５尺５寸である。

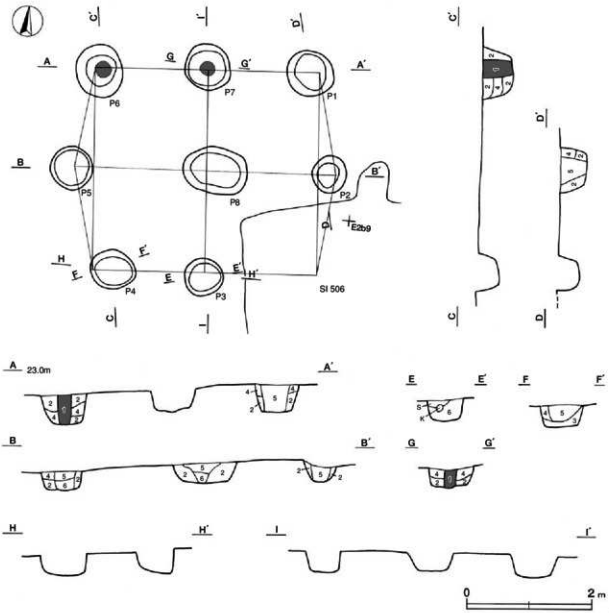
柱穴　８か所。長径59～103cm，短径53～70cmの楕円形を基調とし，深さは30～49cmである。柱痕跡はP６・P７で確認され，柱痕跡の径は20～23cmであり，土層は粘性・締まりとも弱いロームブロックを少量と，焼土粒子・炭化粒子を微量含んだ黒褐色土で，第１層に相当する。掘り方の埋土はロームブロックを少量と，炭化粒子を微量含んだ黒褐色土を基調とし，強く叩き締められた様子はなく，第２～４層が相当する。P１～P５・P８は，柱が抜き取られ，その覆土は，ロームブロックを少量含んだ黒褐色土を基調としており，第５層・第６層が相当する。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　黒褐色　ロームブロック・白色粘土粒子微量
4　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
5　黒褐色　ロームブロック少量
6　黒褐色　ロームブロック微量

遺物出土状況　P４の抜取り穴の覆土から土師器片３点（甕），須恵器片３点（坏２，蓋１），P６の掘り方の埋土から土師器片１点（甕）が出土している。いずれも細片で図示できない。そのほか，混入した縄文土器片３点がP６の覆土から出土している。

所見　本跡の北2.1mに位置する第149号掘立柱建物跡と柱筋が通ることから，同時期に機能していた可能性が高い。東西の妻より，中柱が張り出しているため，こられは棟持ち柱と考えられるが，上屋構造については社殿など特異なものと想定できる。現時点では「倉」と認識しておきたい。また，南５mに位置する第151号掘立柱建物跡とも中柱が東西に張り出している点で，構造上の類似点が認められる。主軸方向が一致する竪穴住居跡は，８世紀中葉～後葉に比定される第507号住居跡や第132号住居跡がある。これらと本跡はほぼ同時期に機能し，南側に開口する「コの字状」の配置をとっている。時期は，９世紀中葉～後葉に比定される第506号住居に掘り込まれていることなどから，８世紀中葉～９世紀前葉と考えられる。



第27図　第150号掘立柱建物跡実測図

第151号掘立柱建物跡（第28図）

位置　調査区域の西部，E２c8・E２d8・E２e9・E２d9区。標高22.9mの緩斜面に位置している。南3.1mには側柱式の第152号掘立柱建物跡，北側には総柱式の第149・150号掘立柱建物跡がそれぞれ並び，一群を形成している。さらに，北西14.4mには軸方向がほぼ一致する側柱式の第148号掘立柱建物跡，東16.3mには柱筋が通って軸方向もほぼ一致する側柱式の第153号掘立柱建物跡が位置している。

重複関係　第55号溝にP２・P９の上部を掘り込まれている。

規模と構造　桁行２間，梁行２間，柱穴数９か所の総柱式建物跡で，桁行方向はN－９°－Wの南北棟である。桁行3.62m，梁行3.05mで，面積は11.04㎡であるが，P２・P６は東西にやや張り出している。柱間寸法は桁行が1.65～1.97m，梁行が1.44～1.57mであり，桁行柱間６尺，梁行柱間５尺５寸と考えられる。

柱穴　９か所。長径43～55㎝，短径42～50㎝の楕円形を基調とし，深さは21～40㎝である。柱痕跡はP１～P３，P６～P９で確認され，柱痕跡の径は15～22㎝であり，土層は粘性・締まりとも弱いロームブロックを微

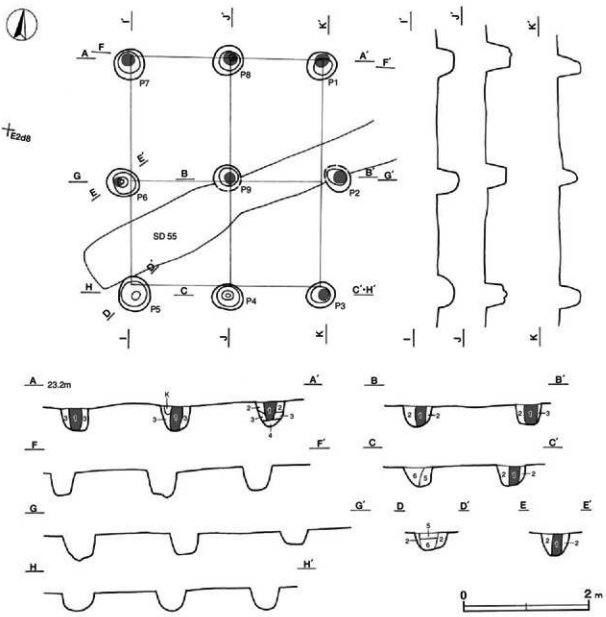
量含んだ黒褐色土で，第１層に相当する。掘り方の埋土はロームブロックを多量含んだ暗褐色土を基調とし，強く叩き締められた様子はなく，第２～４層が相当する。Ｐ４・Ｐ５は，柱が抜き取られ，その覆土は，ロームブロックを少量含んだ黒褐色土を基調とし，第５～６層が相当する。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック微量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　暗褐色　ロームブロック中量
4　暗褐色　ロームブロック多量
5　暗褐色　ロームブロック微量
6　黒褐色　ロームブロック少量

遺物出土状況　Ｐ３の掘り方の埋土から須恵器片１点（鉢），Ｐ４抜取り穴の覆土から須恵器片２点（甕），Ｐ６の掘り方の埋土から須恵器片１点（坏）が出土している。いずれも細片で図示できない。

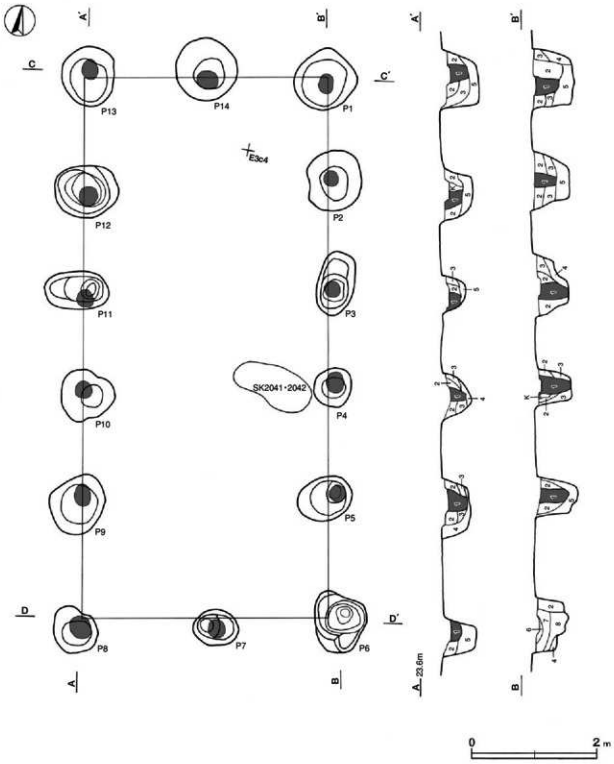
所見　北西14.4mには軸方向がほぼ一致する第148号掘立柱建物跡，西16.3mには柱筋が通って軸方向もほぼ一致する第153号掘立柱建物跡がそれぞれ位置している。また，主軸方向が一致する竪穴住居跡は，８世紀後葉に比定される第507号住居跡や第132号住居跡があり，これらと本跡はほぼ同時期に機能し，南側に開口する「コの字状」の配置をとっている。また，本跡も前述した第150号掘立柱建物跡と同様に東西の中柱がそれぞれ



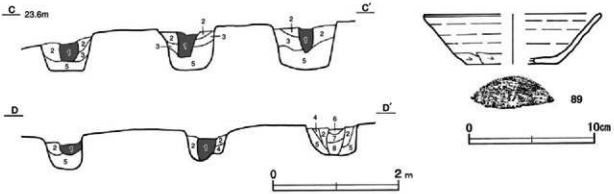
第28図　第151号掘立柱建物跡実測図

張り出しており，棟持ち柱と考えられるが明瞭でない。上屋構造については明確ではないが，「倉」と認識しておきたい。時期は8世紀中葉～後葉と考えられる。

第153号掘立柱建物跡（第29・30図）



第29図　第153号掘立柱建物跡実測図(1)



第30図　第153号掘立柱建物跡・出土遺物実測図(2)

位置　調査区域の中央部から東部，E３b3・E３b4・E３c3・E３c4・E３d3・E３d4区。標高23.5mの台地縁辺部に位置している。北西9.5mには柱筋が通る側柱式の第148号掘立柱建物跡，西16.3mには柱筋が通って軸方向もほぼ一致する総柱式の第151号掘立柱建物跡がそれぞれ位置している。

確認状況　北西隅に位置する妻柱のP13が第56号溝と接している。

規模と構造　桁行５間，梁行２間，柱穴数14か所の側柱建物跡で，桁行方向をN－11°－Wとする南北棟である。桁行8.58m，梁行3.86mで，面積は33.12㎡である。柱間寸法は桁行が1.44～1.96m，梁行が1.76～2.14mであり，両梁柱間は６尺５寸，桁行柱間は北妻より５尺５寸，５尺５寸，５寸，５尺５寸，７尺と中央間と南妻側の柱間寸法が異なる。

柱穴　14か所。長径62～100cm，短径60～96cmの楕円形を基調とし，深さは36～73cmである。柱痕跡はP１～P５，P７～P14で確認され，柱痕跡の径は24～38cmで，土層は粘性・締まりとも弱いロームブロック・焼土粒子を微量含んだ黒褐色土で，第１層に相当する。掘り方の埋土はロームブロックを少量含んだ黒褐色土を基調とし，強く叩き締められた様子はなく，第２～５層が相当する。P６は，柱が抜き取られ，その覆土は，ロームブロックを中量含んだ黒褐色土を基調とし，第７～８層が相当する。

土層解説

1	黒褐色　ロームブロック・炭化粒子微量	5	暗褐色　ロームブロック多量
2	黒褐色　ロームブロック少量，炭化物微量	6	黒褐色　ローム粒子微量
3	暗褐色　ロームブロック中量	7	黒褐色　ロームブロック少量
4	暗褐色　ロームブロック微量	8	黒褐色　ロームブロック微量

遺物出土状況　P２の掘り方の埋土から土師器片５点（甕），須恵器片２点（坏），P８の掘り方の埋土から土師器片１点（甕），須恵器片１点（坏），P９の掘り方の埋土から土師器片２点（甕），須恵器片４点（坏３，蓋１），P10の掘り方の埋土から土師器片４点（甕），須恵器片１点（鉢），P11の掘り方の埋土から土師器片１点（甕），P14の掘り方の埋土から須恵器片１点（蓋）が出土している。大半の遺物が細片である。そのほか，混入した剥片１点がP10の覆土から出土している。

所見　北西9.5mには柱筋が通る第148号掘立柱建物跡，西16.3mにも柱筋と軸方向がほぼ一致する第151号掘立柱建物跡がそれぞれ位置している。また，主軸方向が一致する竪穴住居跡は，８世紀後葉に比定される第507号住居跡がある。これらと本跡はほぼ同時期に機能し，南側に開口する「コの字状」の配置をとっている。時期は８世紀中葉～後葉と考えられる。

第153号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
89	須恵器	坏	[13.8]	4.0	[7.2]	石英・長石・雲母	黄灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ,体部外面下端ヘラ削り,底部外面一方向のヘラ削り	P 9	20%

3　平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は，竪穴住居跡４軒と，掘立柱建物跡１棟，溝１条である。これらの遺構は，主に台地縁辺部から谷部に向かう標高22.9～23.5mの緩斜面に存在している。竪穴住居跡はそれぞれ重複し合うことなく，竈はすべて北壁に構築されている。また，掘立柱建物跡は側柱式の南北棟である。以下，これらの遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

なお，第133号住居跡は，平成10年度のⅡB区と平成13年度の𠀋区にまたがって位置している。住居跡の記述については，基本的に平成13年度の調査状況を中心とした。

（１）　竪穴住居跡

第133号住居跡（第31図）

位置　調査区域の東部，E３d5区。標高23.5mの台地縁辺部に位置している。平成10年度のⅡB区にまたがっているため，一部が『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集で報告されている。平成13年度は北西コーナー部付近を調査した。遺存状況は良好である。

規模と形状　長軸3.4m，短軸3.37mの方形で，壁高は18～33cmで外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－13°－Wである。

床　ほぼ平坦であるが，壁際はゆるやかに立ち上がっている。また，壁際やコーナー部付近を除いて踏み固められている。壁溝は，北東コーナー部から南西コーナー部をわずかにすぎた地点で途切れている。

ピット　２か所。どちらも平成10年度に調査済みである。P１は中央部に位置し，深さ16cmである。P２は東壁際に位置し，深さ８cmである。いずれも性格は不明である。

竈　北壁中央部に付設され，遺存状況は不良であり，大半は平成10年度に調査済みである。平成13年度は左袖部の一部を調査し，黄褐色の砂質粘土ブロックで構築されている。

覆土　８層からなる。ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含み，平成10年度の調査でも人為堆積と考えられている。平成13年度の調査範囲の覆土も，ロームブロックを多く含んだ褐色土である。

土層解説

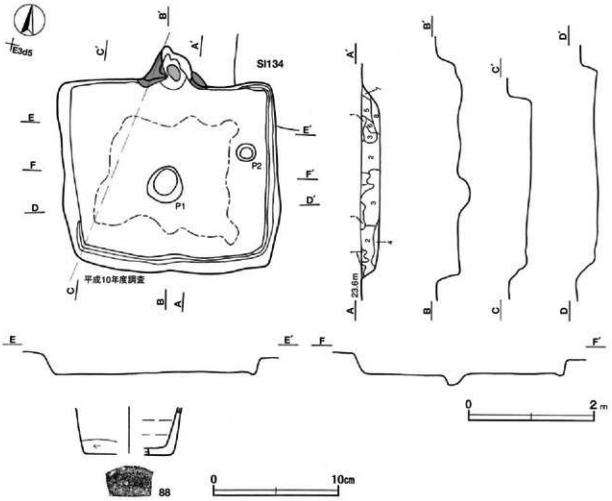
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
3　暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック微量
4　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量
5　褐　色　ロームブロック・焼土粒子中量
6　暗褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
7　褐　色　焼土粒子・砂質粘土粒子少量
8　褐　色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量

遺物出土状況　土師器片47点（坏６，甕24，不明17），須恵器片51点（坏15，高台付坏２，盤１，蓋３，鉢10，壺２，甕２，不明16），瓦１点（平瓦），礫２点が，覆土から廃棄されたような状態で出土している。

所見　平成10年度の調査成果を踏まえ，時期は出土土器から９世紀後葉と考えられる。

第133号住居跡出土遺物観察表（第31図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
88	須恵器	短頸壺	－	(3.8)	[7.0]	長石・黒色粒子	灰黄褐	普通	体部ロクロナデ,外面下端ヘラ削り,底部外面ヘラ削り後ナデ	覆土中	15%



第31図　第133号住居跡・出土遺物実測図

第502号住居跡（第32・33図）

位置　調査区域の北東部，D３i8区。標高23.3mの緩斜面に位置している。北側に向かって傾斜していく地形のため，北壁側が削平されており，遺存状況は不良である。

重複関係　西側で第2037～2040号土坑，東側で第59号溝にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.40m，短軸3.00mの長方形で，壁高は12～22cmでほぼ直立している。主軸方向はN－12°－Wである。

床　緩やかな凹凸が見られるが，ほぼ平坦である。壁際やコーナー部付近は軟弱で，竈の前からＰ１の内側は踏み固められている。壁溝は，竈の東袖から南壁にかけて壁下に確認されたが，西壁及び竈の左袖までの範囲には認められない。深さは４～10cmで，断面形はU字形を呈している。

ピット　２か所。Ｐ１は南壁際の中央部に位置しているため，出入り口施設に関係するピットと推定され，深さは35cmである。Ｐ２は南東コーナー部に位置し，深さ18cmであるが，性格は不明である。

竈　北壁中央部に付設されている。上部がかなり削平されており，遺存状況は不良である。焚口から燃焼部奥壁までの長さは0.87mである。火床部は不整楕円形を呈し，底面は床面からの深さが９cmで，皿状に掘りくぼめられている。最終の火床面は第４層上面に想定されるものの，明瞭な赤変硬化は認められなかった。燃焼部奥壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり，壁外に55cm張り出している。残存する袖部の最大幅は1.45mで，黄

褐色の砂質粘土ブロックで構築されている。覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを含み，第1～4層は流入土，第4層は火床面下位の埋土，第5層は袖部の構築土と判断される。

竈土層解説

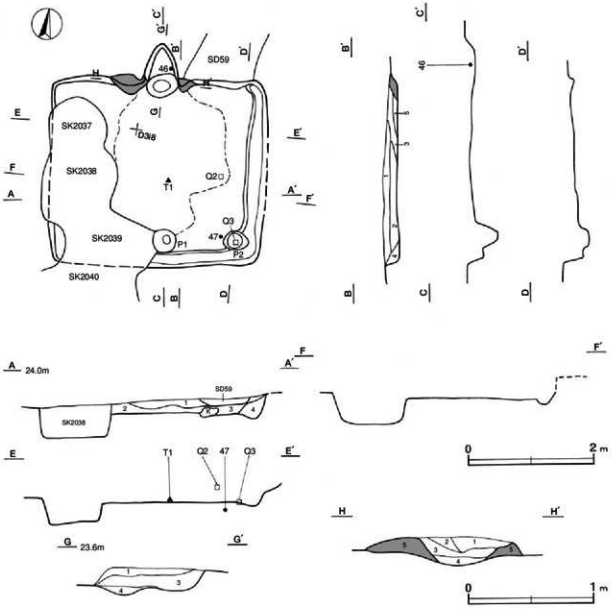
1　黒褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化材微量
4　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量

覆土　5層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物・砂微量
3　暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
4　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量

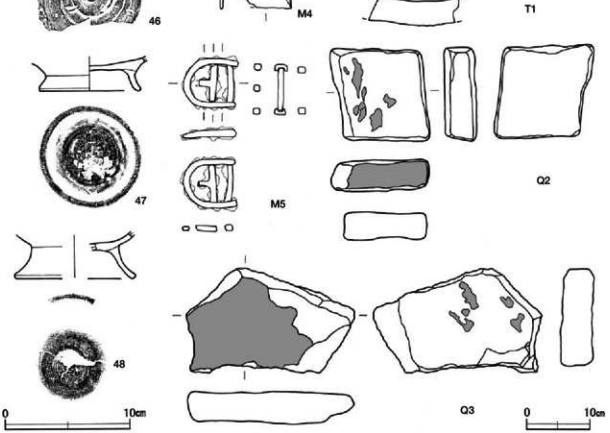
遺物出土状況　土師器片285点（坏66，高台付坏11，甕143，不明65），須恵器片98点（坏36，高台付坏4，高盤2，蓋4，鉢30，壺2，甕1，不明19），金属製品2点（鎌，　具），瓦1点（平瓦），石製品2点（砥石），



第32図　第502号住居跡実測図

礫７点が，主に南東部の覆土上層から下層にかけてまばらに廃棄されたような状態で出土し，Ｔ１は中央部の床面から出土している。竈からは，土師器片７点が覆土中層から鍛層にかけて投棄されたような状態で出土している。そのほか，混入した縄文土器片１点，陶器片７点が出土している。

所見　遺物のほとんどが破片であり，南東部の覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土していることから，住居が廃絶されて窪地化した段階で投棄されたものと考えられる。また，第59号溝の覆土に混入した土師器坏（100）の体部外面に「万」と墨書が見られ，本来は本跡に廃棄された遺物である可能性が高い。時期は竈から出土した46などから，９世紀後葉と考えられる。



第33図　第502号住居跡出土遺物実測図

第502号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
46	土師器	坏	－	（2.5）	8.0	石英・長石・雲母	橙	普通	体部ロクロナデ，底部外面回転ヘラ削り	竈下層	40%
47	土師器	高台付坏	－	（2.7）	7.9	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	底部外面回転ヘラ削り後高台貼り付け	床面	10%
48	土師器	高台付坏	－	（3.7）	［9.6］	石英・長石・雲母	橙	普通	底部外面回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中	10%
49	土師器	高台付坏	－	（2.9）	［9.0］	石英・長石	にぶい黄橙	普通	底部外面回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中	体部内面黒色処理 10%

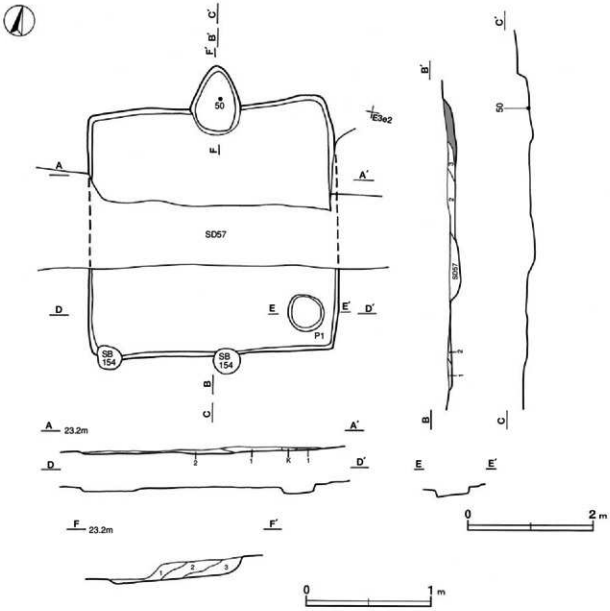
番号	種　別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備　考
M4	鏃	(3.9)	(1.6)	(0.4)	(5.5)	鉄	柄付部折り返し，刃身部欠損	覆土中	PL16
M5	鉸具	4.3	4.1	0.6	16.4	鉄	弓金具固定，銅金可動式	覆土中	PL16

番号	種　別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備　考
T1	平瓦	(6.5)	(7.2)	(2.1)	(122)	土製	凸面格子目叩き，凹面布目痕	床面	PL 6

番号	種　別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備　考
Q2	砥石	15	15.6	5.1	2077	雲母片岩	板状素材，砥面２面，側面研磨明瞭，風化著しい	覆土中層	PL 6
Q3	砥石	16.8	26.6	5.3	3585	雲母片岩	板状素材，砥面２面，風化著しい	床面	

第503号住居跡（第34・35図）

位置　調査区域の中央部，Ｅ３e1区。標高23.0mの緩斜面に位置している。南側に向かって傾斜していく地形



第34図　第503号住居跡実測図

のため，南壁側がかなり削平されており，遺存状況は不良である。

重複関係　第57号溝に中央部を分断され，第154号掘立柱建物跡のP１・P７に南壁を掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.00m，短軸3.96mの方形で，壁高は７～19cmでほぼ直立している。主軸方向はN－10°－Wである。

床　緩やかな凹凸が見られるが，ほぼ平坦である。壁際やコーナー部付近は軟弱で，竈の前からP１の内側は踏み固められている。

ピット　１か所。P１は南東コーナー部に位置し，深さ35cmと浅い。貯蔵穴の可能性がある。

竈　北壁中央部に付設されている。上部はかなり削平されており，遺存状況は不良である。焚口から燃焼部奥壁までの長さは1.09mである。火床部は楕円形を呈し，底面は床面からの深さが６cmで，皿状に掘りくぼめられている。火床面や焼土層は認められなかった。燃焼部奥壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり，壁外に65cm張り出している。袖部は確認できなかった。第１～３層は流入土と判断される。

竈土層解説

1　黒褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量
2　暗褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物少量
3　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック微量

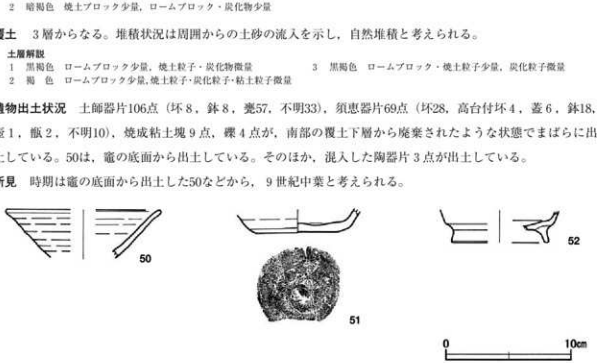
覆土　３層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
2　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片106点（坏８，鉢８，甕57，不明33），須恵器片69点（坏28，高台付坏４，蓋６，鉢18，壺１，甑２，不明10），焼成粘土塊９点，礫４点が，南部の覆土下層から廃棄されたような状態でまばらに出土している。50は，竈の底面から出土している。そのほか，混入した陶器片３点が出土している。

所見　時期は竈の底面から出土した50などから，９世紀中葉と考えられる。



第35図　第503号住居跡出土遺物実測図

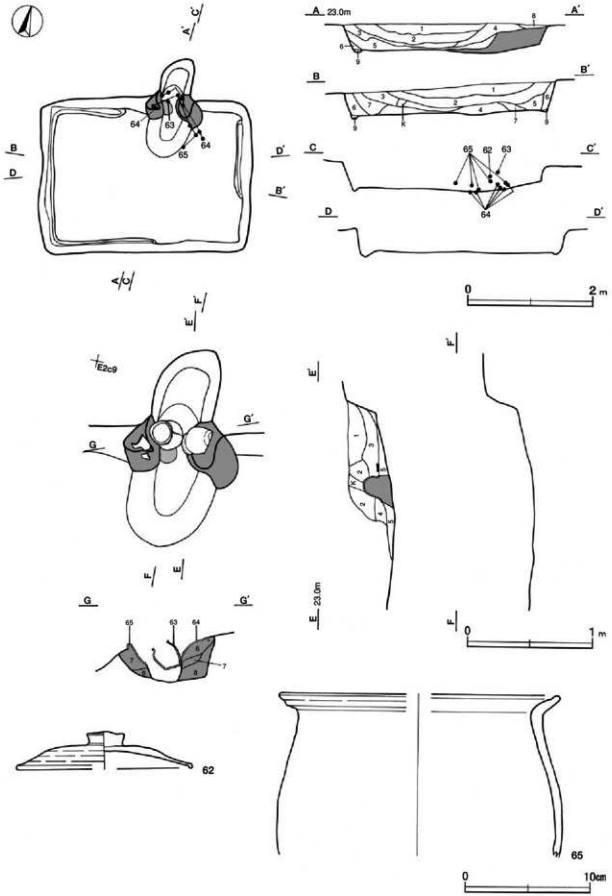
第503号住居跡出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
50	須恵器	坏	〔12.2〕	（3.8）	－	石英・長石・雲母	灰黄	普通	口辺部・体部ロクロナデ，体部外面下端ヘラ削り	竈底面	20%
51	須恵器	坏	－	（1.9）	6.7	石英・白色針状鉱物	褐灰	普通	底部外面多方向のヘラ削り後ナデ	覆土上層	20%
52	須恵器	高台付坏	－	（2.5）	〔7.8〕	石英・長石・雲母	褐灰	普通	体部ロクロナデ，底部外面回転ヘラ削り後高台張り付け	覆土上層	20%

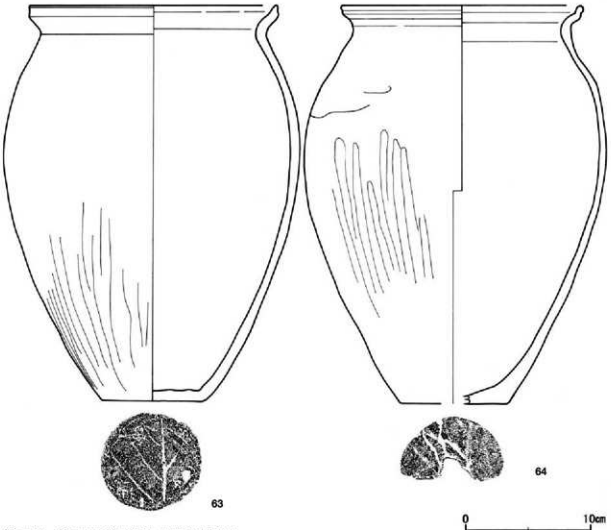
第506号住居跡（第36・37図）

位置　調査区域の西部，E２b8区。標高22.9mの緩斜面に位置している。遺存状況は良好である。

重複関係　第150号掘立柱建物跡の南東隅の柱穴を掘り込んでいる。



第36図　第506号住居跡・出土遺物実測図



第37図　第506号住居跡出土遺物実測図

規模と形状　長軸3.25m，短軸2.50mの長方形で，壁高は35～40cmであり，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－10°－Wである。

床　ほぼ平坦である。全体的に軟弱で，竈の前が部分的に硬化している。壁溝は南東コーナー部と竈の範囲を除く壁下に確認されている。深さは4～10cmで，断面形はU字形を呈している。

竈　北壁中央部の東寄りに付設され，遺存状況は良好である。焚口から燃焼部奥壁までの長さは1.61mである。火床部は細長い楕円形を呈し，底面は床面から深さ8㎝で，皿状に掘りくぼめられている。最終の火床面は長径25cm，短径14cmの楕円形を呈し，赤変硬化している。燃焼部奥壁は底面から外傾して立ち上がり，壁外に63㎝張り出している。残存する袖部の最大幅は0.95mで，黄褐色の砂質粘土ブロックで構築され，両袖の内側に補強材として，土師器甕の大形破片を貼り付けている。火床面から完形の土師器甕が出土しており，この位置に掛け口が存在していたと考えられるが，天井部などは確認できなかった。また，覆土は全体的に焼土ブロックや粘土ブロックを含んでおり，第1～4層は流入土，第5層は火床面下位の埋土，第6～8層は袖部の構築土と判断される。

竈土層解説

1	黒　褐　色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	
2	暗　褐　色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	
3	黒　褐　色	ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量	
4	暗　褐　色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量	
5	暗　褐　色	焼土ブロック中量ロームブロック・炭化物少量	
6	にぶい黄橙色	砂質粘土ブロック中量，焼土ブロック少量	
7	にぶい黄橙色	焼土ブロック・砂質粘土粘土ブロック少量	
8	にぶい黄橙色	砂質粘土ブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物微量	

覆土　9層からなる。堆積状況は周囲からの土砂の流入を示し，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒褐色　ロームブロック・炭化物中量，焼土ブロック微量
4　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
6　暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
7　暗褐色　ロームブロック・炭化物少量
8　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
9　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片102点（甕90，不明12），須恵器片41点（坏14，高台付坏３，蓋３，長頸瓶２，甕６，不明13），焼成粘土塊５点，礫１点が，主に竈の覆土や北東コーナー部の覆土中層から下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。64・65は，竈の袖部の内側に補強材として貼り付けられ，63は，それらに挟まれるような状態で掛け口から出土している。さらに，62は左袖の上面から正位の状態で出土しており，共に遺棄されたものと考えられる。そのほか，混入した縄文土器片２点が出土している。

所見　遺物のほとんどが破片であり，大半の遺物は住居が廃絶されて窪地化した段階で廃棄されたものと考えられる。63と62は，出土位置が近接しており，セットの可能性がある。時期は62・63などから，９世紀中葉～後葉と考えられる。

第506号住居跡出土遺物観察表（第36・37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
62	須恵器	蓋	[14.0]	3.0	－	石英・長石・雲母	灰白	普通	天井部外面回転ヘラ削り，擬宝珠状のつまみ付付	竈袖	90%	PL.11
63	土師器	甕	19.6	31.5	8.0	石英・長石・雲母	橙	普通	口辺部横ナデ，胴部外面下半ヘラ磨き，内面ナデ	竈下層	100%	PL.11
64	土師器	甕	[19.2]	31.8	[8.6]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口辺部横ナデ，胴部外面縦位いヘラ磨き，内面ナデ	竈袖	80%	PL.11
65	土師器	甕	[22.0]	(12.8)	－	石英・雲母	にぶい赤褐	普通	内外面摩滅	竈袖	20%	

（２）掘立柱建物跡

第152号掘立柱建物跡（第38図）

位置　調査区域の西部，Ｅ２e8・Ｅ２e9・Ｅ２f8・Ｅ２F9区。標高22.9mの緩斜面に位置している。北側には総柱式の建物跡群，西4.4mには軸方向がほぼ一致する第503号住居跡，北9.4mにも軸方向がほぼ一致する第506号住居跡がそれぞれ位置している。

重複関係　第504号住居跡の覆土を掘り込み，第57号溝に桁行方向の２か所の柱穴が掘り込まれている。

規模と構造　桁行３間，梁行２間，柱穴数10か所の側柱建物跡と考えられる。桁行方向の２か所の柱穴は第57号溝に掘り込まれ消失しているため，８か所の柱穴が確認され，桁行方向をＮ－13°－Ｗとする南北棟であり，桁行5.42m，梁行3.60mで，面積は19.51㎡である。柱間寸法は桁行1.70～1.76m，梁行1.74～1.86mであり，桁行・梁行とも柱間寸法は６尺である。

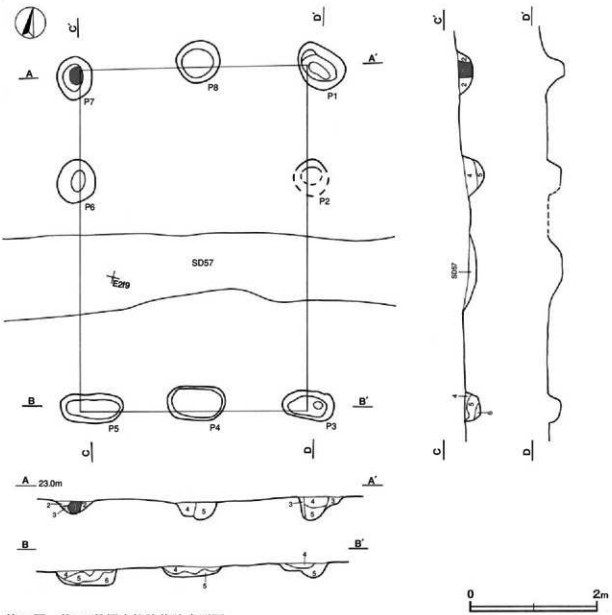
柱穴　８か所。長径70～90cm，短径53～54cmの楕円形を基調とし，深さは16～36cmである。柱痕跡はＰ７で確認され，柱痕跡は長径29cm，短径20cmで，土層は粘性・締まりとも弱いローム粒子・焼土粒子を微量含んだ黒褐色土で，第１層に相当する。掘り方の埋土はロームブロックを少量含んだ暗褐色土を基調とし，強く叩き締められた様子はなく，第２層・第３層が相当する。Ｐ１～Ｐ６・Ｐ８では，柱が抜き取られ，その覆土は，ロームブロックを少量含んだ暗褐色土を基調とし，第４～６層が相当する。

土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　明褐色　ロームブロック中量
4　黒褐色　ローム粒子微量
5　暗褐色　ローム粒子・白色粘土粒子微量
6　暗褐色　ロームブロック少量，白色粘土粒子微量

所見　本跡の西4.4mには９世紀中葉に比定した第503号住居跡が位置し，軸方向が一致することから，ほぼ同

時期に機能していた可能性が高い。また，8世紀後葉～9世紀前葉に比定した第504号住居跡を掘り込んでいることから，時期は，9世紀中葉～後葉と考えられる。



第38図　第152号掘立柱建物跡実測図

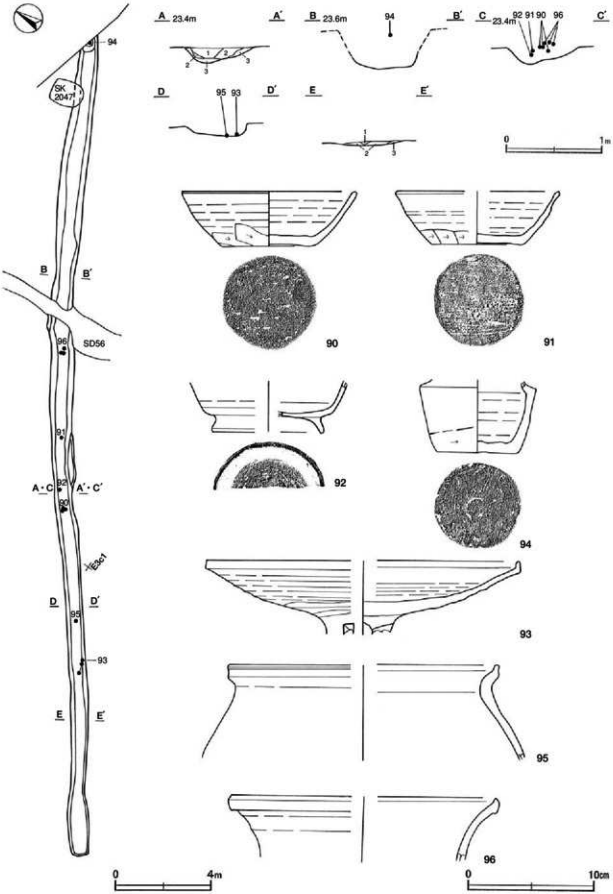
（3）　溝

第55号溝（第39図）

位置　調査区域の中央部，E2d8～E3j6区。標高22.9～23.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係　西端で第151号掘立柱建物跡，東側で第507号住居跡をそれぞれ掘り込み，東側で第2047号土坑，中央部で第56号溝に掘り込まれている。さらに，東端は農道の下に延びているが，農道を越えた北東部で確認されていないため，農道に沿って東側に延びると推測される。

規模と形状　確認した長さ34.7m，上幅55～104cm，下幅42～56cm，深さ5～40cmである。走行方向はN－65°－Wで，ほぼ一直線に延びている。断面形は扁平U字状を呈し，壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦で，西側に緩やかに傾斜している。



第39図　第55号溝・出土遺物実測図

覆土　3層からなる。ロームブロックを少量含む黒褐色土を基調とし，周囲から土砂が流入しているため，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒褐色　ロームブロック少量
2　黒褐色　ロームブロック微量
3　暗褐色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片77点（坏２，高台付坏１，甕74），須恵器片93点（坏43，高台付坏２，盤１，蓋９，高盤10，鉢16，短頸壺１，甕11），焼成粘土塊３点，瓦片１点（平瓦），礫１点が，中央部の覆土下層から中層にかけて，点在して出土している。ほぼ完形の94は，東側の覆土上層から出土している。そのほか，混入した剥片２点が出土している。

所見　出土した遺物は大半が破片であり，投棄されたり，周囲から流れ込んだ遺物と判断できる。８世紀中葉～後葉に比定した第507号住居跡を掘り込んでいることや，出土遺物の時期から９世紀中葉には，ほぼ埋没していたと考えられることなどから，９世紀前葉に機能していたと推測できる。また，等高線に直交するように構築されており，生活域の排水施設と考えられる。

第55号溝出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
90	須恵器	坏	13.6	4.3	7.2	石英・長石	黄灰	普通	口辺部・体部ロクロナデ，体部外面下端ヘラ削り，底部外面一方向のヘラ削り後ナデ	覆土上層	60%　PL14
91	須恵器	坏	[12.6]	4.2	7.0	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	口辺部・体部ロクロナデ，体部外面下端ヘラ削り，底部外面一方向のヘラ削り	覆土上層	40%　PL14
92	須恵器	高台付坏	－	（4.0）	[8.8]	石英・長石・雲母	灰	普通	体部ロクロナデ，底部外面回転ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中層	30%
93	須恵器	高盤	[24.6]	（5.6）	－	石英・長石・雲母	黄灰	普通	体部ロクロナデ，３か所の透かし孔ヘラ切り	床面	40%　PL14
94	須恵器	短頸壺	－	（5.6）	6.4	石英・長石・雲母	黄灰	普通	体部ロクロナデ，外面下端ヘラ削り，底部外面回転ヘラ削り後ナデ	覆土上層	90%　PL14
95	土師器	甕	[21.2]	（7.5）	－	石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部横ナデ，胴部ヘラナデ	床面	50%
96	須恵器	甕	[30.8]	（5.1）	－	石英・雲母	黄灰	普通	口辺部横ナデ	覆土上層	5%

4　近世の遺物と遺構

今回の調査で確認した近世の遺構は，掘立柱建物跡１棟，土坑39基，溝６条である。

掘立柱建物跡は調査区域の南部，同時期あるいは前後する時期に機能していたと想定される第57・58号溝が区画する範囲に確認され，土坑は調査区全域で検出されたが，特に北部及び北東部に集中し，農道に沿って一群を形成している。溝は根切り溝，排水溝，区画溝などと考えられ，様相は様々である。中でも区画溝と考えられる第57・58号溝の区画に，第154号掘立柱建物跡が位置しており，相互の関連性が指摘できる。

ここでは出土遺物などから，近世に位置づけられる第154号掘立柱建物跡について，その特徴と出土した遺物について記述する。また，形態や覆土及び重複関係などから，近世に位置づけられる土坑溝については，実測図と土層解説を掲載し，詳細は一覧表に記載する。

（１）　掘立柱建物跡

第154号掘立柱建物跡（第40図）

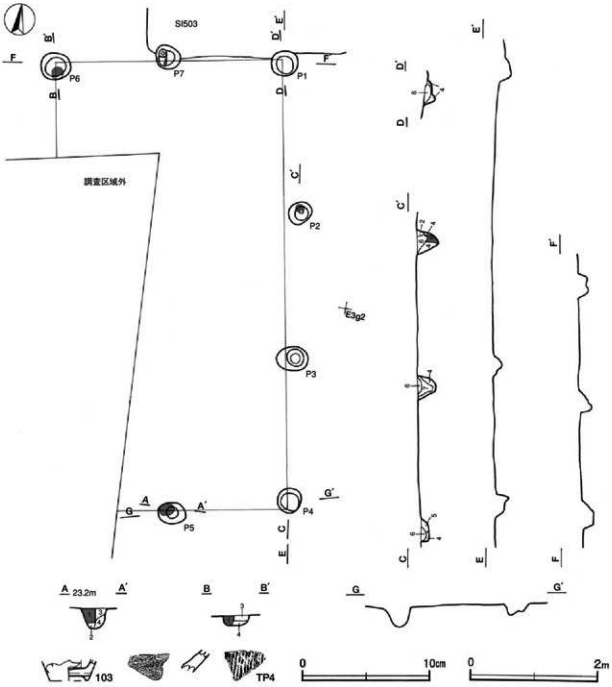
位置　調査区の南部，Ｅ２f0・Ｅ３f1・Ｅ３g1区。標高23.5mの緩斜面に位置している。第57号溝と第58号溝の区画内の北東部に位置している。

重複関係　西側の一部は調査区域外に位置し，北側でＰ１・Ｐ７が第503号住居跡の南壁を掘り込んでいる。

規模と構造　桁行３間，梁行２間，柱穴10か所の側柱建物跡と考えられる。調査区域外に位置する柱穴は確認

できなかったが，７か所の柱穴を確認した。桁行方向はＮ－11°－Ｗとする南北棟であり，桁行7.12ｍ，梁行3.60ｍで，面積は25.63㎡である。柱間寸法は桁行2.36～2.38ｍ，梁行1.78～1.94ｍであり，両妻の柱間は６尺，桁行柱間は８尺と考えられる。

柱穴　７か所。長径39～49㎝，短径33～38㎝の円形を基調と，深さは15～35㎝である。柱痕跡はＰ２・Ｐ５・Ｐ６で確認され，柱痕跡の径は14～26㎝であり，土層は粘性・締まりとも弱いローム粒子・焼土粒子を微量含んだ黒褐色土で，第１層に相当する。掘り方の埋土は，ロームブロックを少量と，焼土粒子を微量含んだ黒褐



第40図　第154号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

色土を基調とし，強く叩き締められた様子はなく，第２～５層が相当する。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７は，柱が抜き取られ，その覆土は，ロームブロックを微量含んだ黒褐色土を基調とし，第６層・第７層が相当する。

土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　黒褐色　ロームブロック少量
4　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
5　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
6　黒褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
7　黒褐色　ロームブロック微量

遺物出土状況　Ｐ２の抜取り穴の覆土から陶器片１点（擂鉢），Ｐ３の抜取り穴の覆土から陶器片２点（擂鉢），磁器片４点（碗３，徳利１）が出土している。大半の遺物が細片である。そのほか，混入した土師器片１点（甕）がＰ１の抜取り穴の覆土から出土し，土師器片１点（甕），須恵器片１点（坏）がＰ２の掘り方の埋土，さらに土師器片24点（坏２，甕16，不明６），須恵器片17点（坏８，蓋１，鉢１，甕１，高盤２，不明４）がＰ３の抜取り穴の覆土から，焼成粘土塊１点がＰ４の覆土から出土している。

所見　陶磁器片は瀬戸・美濃系の鉄釉擂鉢や磁器碗，益子系の急須などであり，近世を遡ることはないと考えられる。本跡の周囲を長方形に区画するように巡る第57・58号溝との関連性は高く，これらの溝とほぼ同時期と推測される。

第154号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
103	磁器	徳利	－	（1.7）	［3.0］	石英	灰	良	内外面透明釉	P3	瀬戸・美濃系 10%
TP4	陶器	擂鉢	－	（1.8）	－	長石	にぶい赤褐	良	内外面鉄釉，内面擂り目	P3	瀬戸・美濃系 5%

（２）土坑

規模と形状から６つに分類することができる。Ⅰ類は長軸１ｍ以上の長方形ないし隅丸長方形を呈する土坑，Ⅱ類は長軸１ｍ以上の方形ないし隅丸方形を呈する土坑，Ⅲ類は長径40㎝以上150㎝未満の円形を呈する土坑，Ⅳ類は長径40㎝以上200㎝未満の楕円形を呈する土坑，Ⅴ類は柱穴と考えられる土坑，Ⅵ類は不定形の土坑である。Ⅰ類は北部や北東部及び中央部に集中し，農道に沿って一群を形成し，Ⅱ～Ⅵ類は調査区全域に分布が認められる。Ⅰ・Ⅱ類は規模と形状や群集する傾向から，耕作に伴う貯蔵穴の可能性が高く，形態や覆土及び重複関係などから，近世と考えられる。しかし，その他の土坑については，出土遺物がほとんど無いため，詳細な時期や性格は不明である。

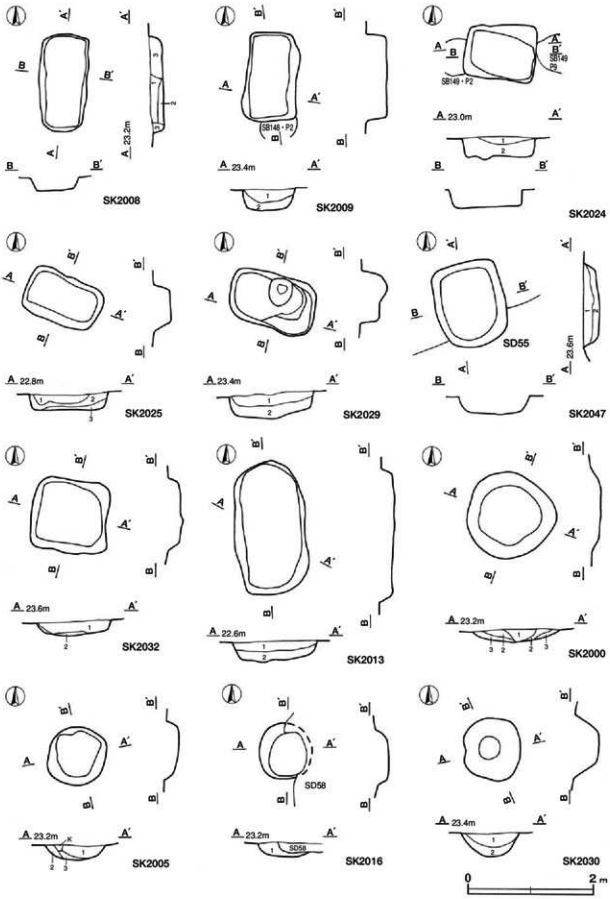
第2000号土坑土層解説
1　褐灰色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック少量

第2001号土坑土層解説
1　黒褐色　ロームブロック少量
2　暗褐色　ロームブロック中量

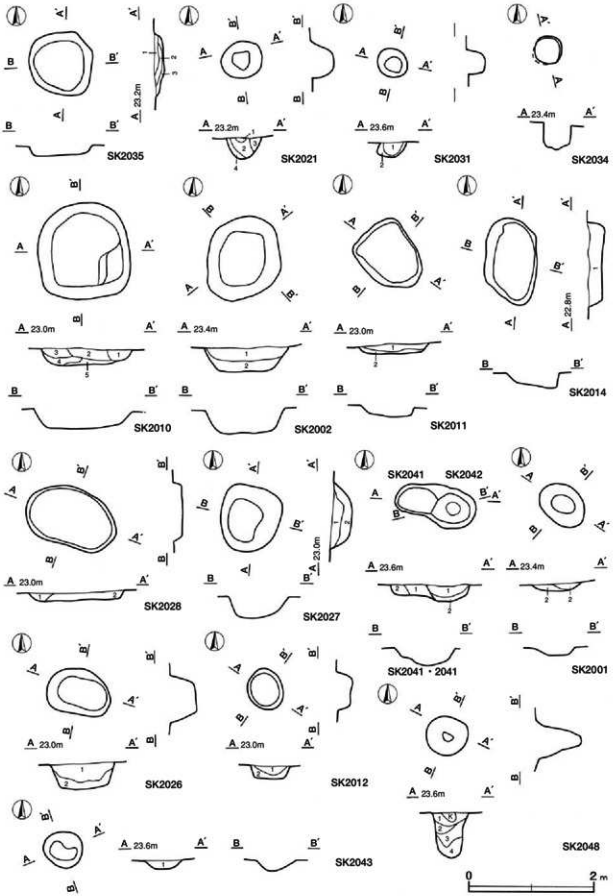
第2002号土坑土層解説
1　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック微量

第2005号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　極暗褐色　ロームブロック中量

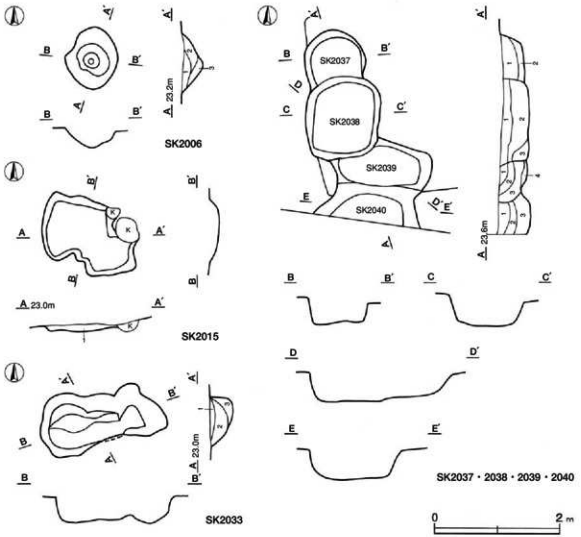
第2006号土坑土層解説
1　黒褐色　ロームブロック中量
2　黒褐色　ロームブロック少量
3　暗褐色　ロームブロック少量


SK2008
A 23.2m
SK2009
A 23.4m
SB146・P2
SK2024
A 23.0m
SB149・P2
SB149
SK2025
A 22.8m
SK2029
A 23.4m
SK2047
A 23.6m
SD55
SK2032
A 23.6m
SK2013
A 22.6m
SK2000
A 23.2m
SK2005
A 23.2m
SK2016
A 23.2m
SD58
SK2030
A 23.4m
0
2 m

第41図　土坑実測図(1)


SK2035
SK2021
SK2031
SK2034
SK2010
SK2002
SK2011
SK2014
SK2028
SK2027
SK2041
SK2042
SK2041・2041
SK2001
SK2026
SK2012
SK2043
SK2048
0
2 m

第42図　土坑実測図(2)



第43図　土坑実測図(3)

第2007号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ローム粒子微量
2　極暗褐色　ローム粒子微量
3　極暗褐色　ローム粒子少量
4　暗 褐 色　ローム粒子中量

第2008号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック中量
2　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
3　黒 褐 色　ロームブロック・焼土粒子微量

第2010号土坑土層解説
1　黒褐色　ロームブロック少量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　黒褐色　ロームブロック・炭化粒子微量
4　黒褐色　ロームブロック微量
5　暗褐色　ロームブロック中量

第2011号土坑土層解説
1　黒褐色　ロームブロック少量
2　暗褐色　ロームブロック中量

第2012号土坑土層解説
1　黒褐色　ロームブロック少量
2　暗褐色　ロームブロック中量

第2013号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック中量
2　極暗褐色　ロームブロック多量

第2014号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック中量

第2015号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック微量

第2016号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック少量

第2021号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒 褐 色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック微量
4　黒 褐 色　ロームブロック少量

第2025号土坑土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック中量
2　極暗褐色　ロームブロック多量
3　黒 褐 色　ロームブロック少量

第2024号土坑土層解説
1　暗褐色　ロームブロック少量
2　褐　色　ロームブロック微量

第2026号土坑土層解説
1　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　褐　色　ロームブロック中量

第2027号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
2　褐　色　ロームブロック少量

第2028号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック微量

第2029号土坑土層解説
1　暗褐色　ロームブロック微量
2　暗褐色　ロームブロック少量

第2030号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック少量

第2031号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック微量

第2032号土坑土層解説
1　暗褐色　ローム粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック微量

第2033号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック微量

第2034号土坑土層解説
1　黒褐色　ロームブロック微量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　暗褐色　ロームブロック・炭化物微量

第2035号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子微量

第2037号土坑土層解説
1　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック多量，焼土粒子微量

第2038号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　黒褐色　ローム粒子微量

第2039号土坑土層解説
1　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック多量，焼土粒子微量
4　褐　色　ロームブロック多量

第2040号土坑土層解説
1　黒褐色　ロームブロック中量
2　暗褐色　ローム粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック多量，焼土粒子微量

第2041号土坑土層解説
1　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック中量

第2042号土坑土層解説
1　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
2　暗褐色　ロームブロック少量

第2043号土坑土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

第2047号土坑土層解説
1　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
2　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子微量

第2048号土坑土層解説
1　暗褐色　ロームブロック少量
2　褐　色　ロームブロック多量
3　黒褐色　ロームブロック少量
4　褐　色　ロームブロック中量

表2　土坑一覧表

番号	位置	長軸方向 長径方向	平面形	規模(m) 長軸×短軸(m)	深さ(cm)	覆土	底面	壁面	出土遺物	備考 (時期・旧→新)	分類
2000	E 2 D0	N-68°-W	円形	1.40×1.34	18	自然	平坦	緩斜	土師器	近世	Ⅱ
2001	E 3 b 1	N-55°-W	楕円形	0.78×0.59	12	自然	平坦	緩斜	土師器	近世	Ⅲ
2002	D 3 j 2	N-18°-E	不整楕円形	1.38×1.16	38	自然	平坦	緩斜	土師器，須恵器，瓦	近世	Ⅲ
2005	D 3 j 1	N-68°-E	不整円形	1.00×0.93	24	自然	凹状	緩斜	須恵器	近世	Ⅱ
2006	D 3 i 1	N-3°-E	不整楕円形	0.98×0.80	30	自然	凹状	緩斜		近世	Ⅴ
2008	D 3 i 2	N-3°-E	長方形	1.53×0.70	20	人為	平坦	外傾		近世	Ⅰ
2009	D 3 i 2	N-0°	長方形	1.70×0.80	32	人為	平坦	外傾	土師器，須恵器	近世　SB148→本跡	Ⅰ
2010	E 2 c 8	N-4°-W	不整円形	1.54×1.44	30	人為	平坦	外傾	土師器	近世	Ⅲ
2011	D 2 i 9	N-42°-W	不整楕円形	1.12×0.84	16	自然	凹状	緩斜		近世	Ⅲ
2012	D 2 i 8	N-36°-W	楕円形	0.65×0.55	25	自然	平坦	外傾		近世	Ⅲ
2013	D 2 h 7	N-4°-W	楕円形	2.10×1.12	26	自然	平坦	外傾		近世	Ⅰ
2014	D 2 g 7	N-14°-W	楕円形	1.4×0.86	23	人為	平坦	緩斜		近世	Ⅲ

番号	位置	長軸方向 長径方向	平面形	規模(m) 長軸×短軸(m)	深さ(cm)	覆土	底面	壁面	出土遺物	備考(時期・旧→新)	分類
2015	E 2 c 8	N-49°-W	不整形	1.72×1.20	15	自然	平坦	緩斜	土師器，土製耳飾り，剥片	近世	V
2016	E 3 f 5	−	［円形］	0.87×［0.82］	18	人為	平坦	緩斜	須恵器，瓦	近世　本跡→SD58	Ⅱ
2021	E 3 D 1	N-82°-E	楕円形	0.65×0.58	33	人為	凹状	緩斜	土師器	近世	Ⅱ
2024	D 2 j 8	N-86°-W	長方形	1.04×0.85	30	人為	平坦	外傾		近世　SB149→本跡	Ⅰ
2025	D 3 g 1	N-67°-W	長方形	1.22×0.67	28	自然	平坦	外傾	須恵器	近世	Ⅰ
2026	D 3 g 2	N-66°-W	楕円形	1.02×0.72	42	自然	平坦	外傾		近世	Ⅲ
2027	D 3 g 1	N-11°-E	楕円形	1.05×0.92	35	自然	凹状	緩斜		近世	Ⅲ
2028	D 3 h 3	N-69°-W	楕円形	1.50×0.92	14	人為	凹状	緩斜		近世	Ⅲ
2029	D 3 h 4	N-73°-W	長方形	1.42×0.82	42	人為	平坦	外傾	土師器，須恵器	近世	Ⅰ
2030	D 3 i 5	N-28°-E	円形	0.99×0.95	38	自然	凹凸	外傾		近世	Ⅱ
2031	D 3 i 7	N-30°-E	不整形	0.51×0.45	27	人為	凹状	緩斜	土師器，須恵器	近世	Ⅱ
2032	D 3 i 7	N-15°-E	方形	1.18×1.14	19	人為	凹状	外傾	磁器，土師器，須恵器，瓦	近世	Ⅰ
2033	D 3 f 7	N-71°-E	不整楕円形	1.90×0.80	41	自然	凹凸	緩斜	須恵器，剥片	近世	Ⅴ
2034	D 3 h 6	−	円形	0.45	41	自然	凹凸	外傾		近世	Ⅱ
2035	E 2 a 0	−	円形	1.03×1.00	15	自然	凹凸	垂直	須恵器	近世	Ⅱ
2037	D 3 i 7	N-75°-E	［楕円形］	0.91×［0.75］	38	人為	平坦	外傾		近世 SD02→本跡→SK2038	Ⅰ
2038	D 3 i 7	N-19°-W	楕円形	1.30×1.16	42	人為	平坦	外傾		近世 SD02→SK2037・2039→本跡	Ⅰ
2039	D 3 i 7	N-83°-E	［楕円形］	1.53×［0.68］	32	人為	平坦	緩斜		近世 SD02→SK2040→本跡→SK2038	Ⅰ
2040	D 3 i 8	N-81°-E	［楕円形］	1.60×［0.55］	40	人為	凹状	外傾	陶器，瓶器，不明陶製品，土師器，須恵器	近世　本跡→SK2039	Ⅰ
2041	E 3 c 4	N-80°-W	［楕円形］	［0.64］×0.48	17	自然	平坦	緩斜		近世　本跡→SK2042	Ⅲ
2042	E 3 c 4	N-75°-W	［楕円形］	［0.64］×0.63	27	自然	凹状	緩斜		近世　SK2041→本跡	Ⅲ
2043	E 3 b 4	N-63°-W	楕円形	0.65×0.55	17	自然	凹状	緩斜	須恵器	近世	Ⅲ
2047	D 2 j 5	N-15°-E	長方形	1.35×1.12	27	自然	平坦	緩斜	土師質土器，土師器，須恵器	近世　SD55→本跡	Ⅰ
2048	D 3 i 4	−	円形	0.67×0.63	71	人為	凹状	外傾		近世	Ⅳ

（3）　溝

溝は調査区全域で確認され，第５４号溝は農道に沿って東西方向に，第５９号溝は農道に直交するように南北方向に延びている。また，第５３・５６号溝は北部と中央部で，それぞれ南北方向に延びている。これらの溝は，深さや平面形に違いがあり，排水溝や根切り溝的な性格が考えられる。第５７・５８号溝は南部で，それぞれ東西方向に延び，東端部が対向してＬ字状に曲がっている。深さや平面形が類似し，出土遺物からも同時期に機能していたと想定でき，区画溝的な性格が考えられる。特に区画内で確認した第１５４号掘立柱建物跡と関連性が高いと考えられる。これらの時期は出土遺物をはじめ，形態や覆土及び重複関係などから，近世と考えられる。

第53号溝土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム粒子微量
3　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　暗褐色　ローム・ブロック微量

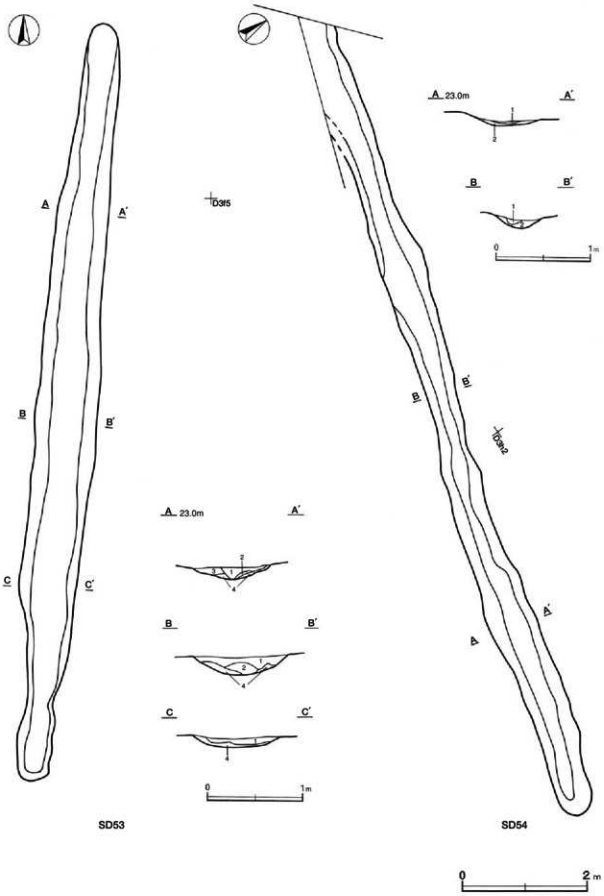
第54号溝土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　暗褐色　ローム・ブロック微量

第56号溝土層解説
1　黒褐色　ローム粒子・炭化物・焼土粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量
4　暗褐色　ローム・ブロック・焼土粒子微量
5　褐　色　ローム・ブロック少量
6　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
7　黒褐色　ローム粒子少量・焼土粒子微量
8　黒褐色　ローム粒子中量

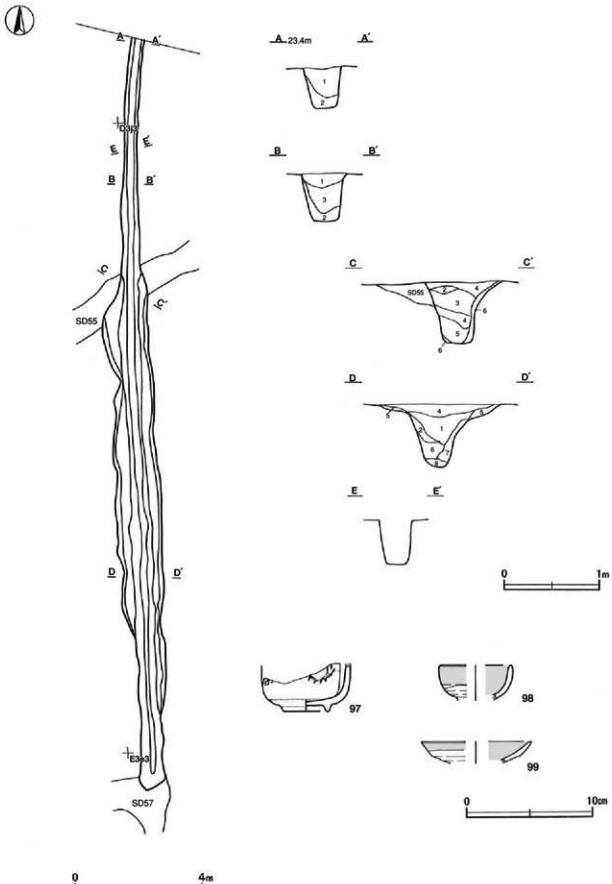
第57号溝土層解説
1　黒褐色　ローム・ブロック少量，炭化粒子微量
2　暗褐色　ローム・ブロック少量，炭化物微量

第58号溝土層解説
1　黒褐色　ローム・ブロック少量
2　黒褐色　ローム・ブロック少量，炭化粒子微量

第59号溝土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物微量



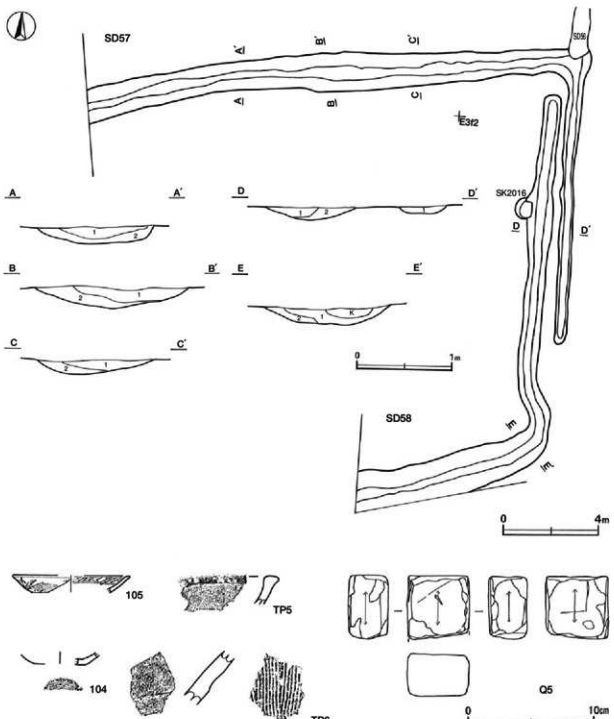
第44図　第53・54号溝実測図



第45図　第56号溝・出土遺物実測図

第56号溝出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
97	磁器	碗	－	（3.8）	3.7	石英	灰白	良	内外面透明釉施釉。体部外面朝唐草文・圏線文を染め付ける。	覆土中	瀬戸・美濃系 30%
98	磁器	猪口	［5.6］	（2.8）	－	石英	灰オリーブ	良	内外面灰釉施釉。体部外面下半露胎	覆土中	瀬戸・美濃系 20%
99	陶器	灯明皿	［8.7］	（1.7）	－	長石	灰黄褐	良	内外面鉄釉施釉。体部外面下半露胎	覆土中	志戸呂系 5%



第46図　第57・58号溝・出土遺物実測図

第58号溝出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
104	土師質土器	かわらけ	－	（1.0）	〔4.0〕	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部外面回転糸切り離し	覆土中	5%
105	瓦器	椀	〔9.2〕	（1.3）	－	石英	灰白	良	内外面透明釉施釉，口辺部外面草花文，内面斜格子文を染め付ける。	覆土中	肥前系 5%
TP5	土師質土器	内耳土器	－	（2.2）	－	長石・雲母	にぶい橙	良	口辺部横ナデ，内面ナデ	覆土中	5%
TP6	陶器	擂鉢	－	（4.1）	－	長石	にぶい赤褐	良	内外面鉄釉，内面擂り目	覆土中	瀬戸・美濃系 5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	砥石	（4.9）	4.8	（3.3）	（131）	凝灰岩	砥面5面，上下欠損，上部再研磨，鑿条痕多数	覆土中	

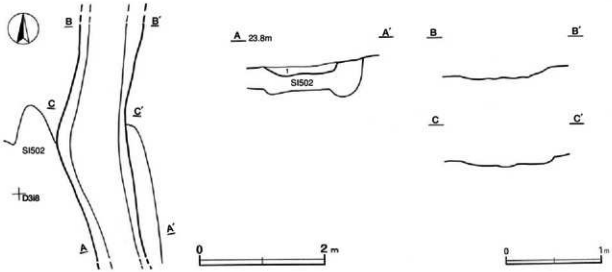


表3　溝一覧表

番号	位置	長軸方向	規模				断面	覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備考（時期-旧→新）
			長さ（m）	上幅（cm）	下幅（cm）	深さ（cm）						
53	D3e4～D3h4	N-5°-E	12.0	40～100	23～61	9～18	逆台形	自然	平坦	緩斜	瓦器，土師器，須恵器	近世
54	D2h0～D3h3	N-73°-W	（13.2）	452～68	45～75	10～45	逆台形	自然	平坦	緩斜		近世
56	D3i3～E3e3	N-1°-E	（23.83）	38～145	10～26	43～67	U字状	自然	平坦	垂直	陶器，瓦器，土師器，須恵器，礫	近世以降 SD55・57→本溝
57	E2f6～E3e3～E3h3	N-77°-E N-2°-W	（39.30）	46～248	15～62	7～20	扁平U字状	自然	平坦	緩斜	陶器，瓦器，土師器，須恵器，剥片，礫	近世 SD53・504，SB132→本溝→SD56
58	E3e2～E3i2～E3i1	N-70°-E N-2°-W	（19.8）	70～106	27～43	7～18	扁平U字状	自然	平坦	緩斜	陶器，瓦器，土師質土器，瓦，砥石，土師器，須恵器，剥片	近世 SK2016→本溝
59	E3h8～E3i8	N-14°-E	（3.5）	75～110	57～75	7～10	扁平U字状	自然	平坦	緩斜	陶器，瓦器，土師質土器，土師器，須恵器，黒曜石，礫	近世以降 SD502→本溝

5　遺構外出土の遺物

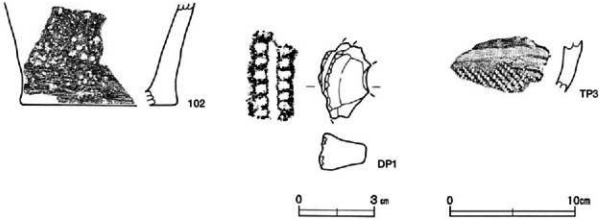
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物は，旧石器時代から近世に至るまでの遺物が出土している。以下，各時代の特色ある遺物を抽出し，詳細は拓影図，実測図及び観察表に記載する。

遺構外出土遺物観察表（第48～51図）

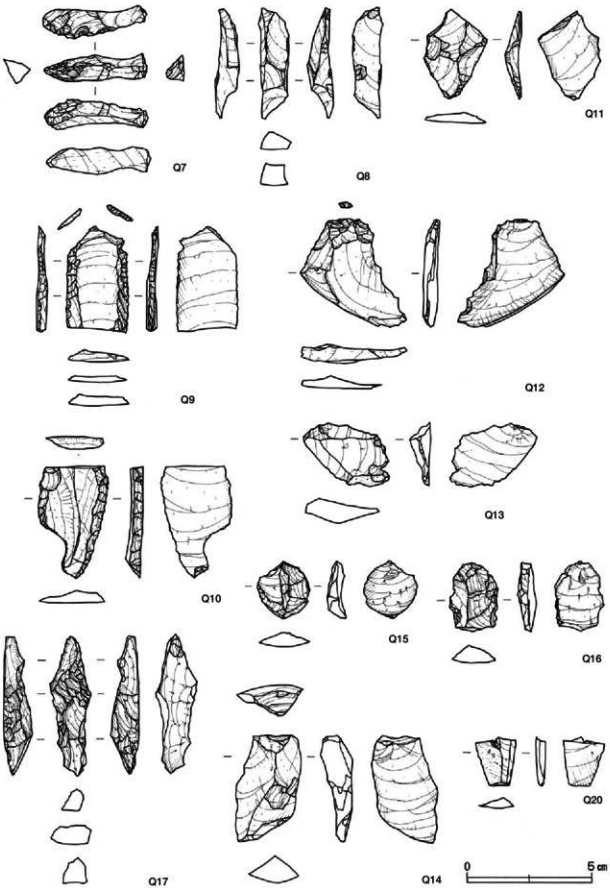
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
100	土師器	坏	－	（2.9）	－	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロナデ	SD59	体部外面墨書「万」 5% PL16
101	縄文土器	深鉢	－	（4.2）	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	内外面ナデ	表採	5%
102	縄文土器	深鉢	－	（8.1）	[12.2]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	内外面ナデ	表採	5%
TP1	縄文土器	深鉢	－	（3.6）	－	長石	褐	普通	口唇部外面に条痕文を施し、口辺部外面に半截竹管状工具による爪形文と刺突文を交互に施す。	SE505	前期後葉 5% PL16
TP2	縄文土器	深鉢	－	（4.3）	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口辺部外面に沈線を巡らせた貝殻文を施す。内面ナデ。	SE505	前期後葉 5% PL16
TP3	縄文土器	深鉢	－	（3.6）	－	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口辺部外面に沈線を巡らし、RL単節縄文を横位に施す。内面ナデ。	SE507	中期後葉 5% PL16

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	耳飾り	（3.0）	（2.1）	(1.5)	(8.2)	土	両面は擦痕ナデによる凹状、側面は中央に沈線を巡らし、半截竹管状工具による刺突文を左右に施す。中央部に孔を有する。	SK2015	PL16

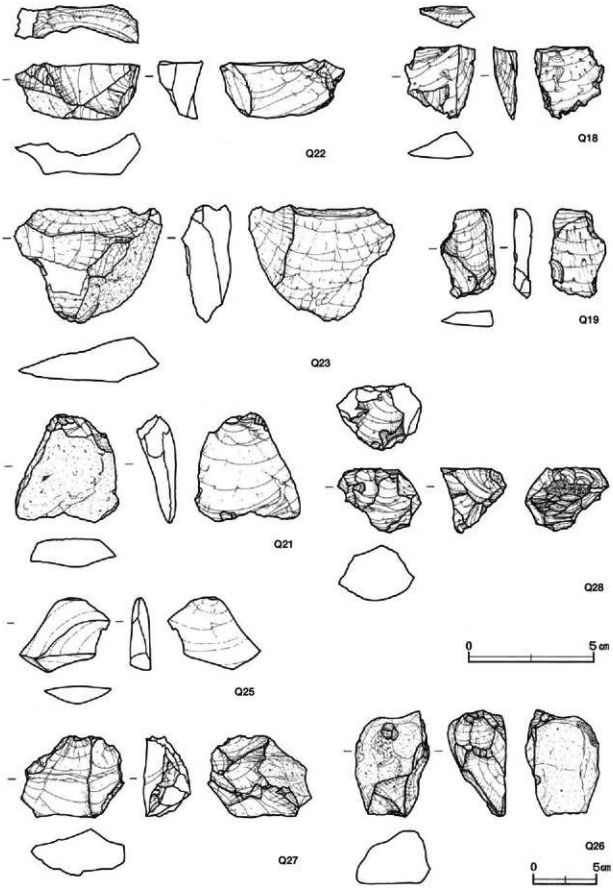
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q7	削片	4.1	1.0	1.2	3.5	硬質頁岩	両面調整細石刃核の削片。背面中央に稜を有し、下端に調整を施す。	SE132	PL16・18
Q8	彫刻刀形石器	4.4	1.2	0.9	4.2	硬質頁岩	縦長剥片を縦に分割した細身の剥片を素材とし、平面な1側縁に彫刻刀面を作出する。	SE58	PL16・18
Q9	彫刻刀形石器	4.2	2.4	0.4	5.7	硬質頁岩	縦長剥片を素材とし、両側縁に腹面側から細かい調整と、右肩にノッチ状の調整を施し、左切に1条の彫刻刀面を作出する。	SE500	PL16・18
Q10	削器	4.4	2.6	0.7	6.4	硬質頁岩	縦長剥片を素材とし、両側縁に腹面側から急角度の調整を施す。	SE500	PL17
Q11	2次加工を有する剥片	3.5	2.4	0.6	2.8	硬質頁岩	縦長剥片を素材とし、1側縁に腹面側から細かい調整を施す。	SE132	PL17
Q12	剥片	4.3	4.2	0.6	8.1	硬質頁岩	横長剥片、背面に前段階の剥離面を有し、打面は複剥離面打面、下端は自然礫底面と考えられる。	SE132	PL17・18
Q13	剥片	2.5	3.5	0.9	5.0	赤玉石	横長剥片、打面は単剥離打面、背面に礫面を残す。	SD55	PL17・18
Q14	剥片	4.2	2.6	1.3	8.7	流紋岩	厚みのある縦長剥片、打面は複剥離面打面、背面中央に稜を有する。	SD55	PL17・18
Q15	剥片	2.2	2.1	0.7	2.1	黒曜石	横長剥片を素材とし、1側縁に微細剥離痕を有する。背面下端に礫面を残す。	SE500	PL17
Q16	剥片	2.8	1.9	0.7	3.7	黒曜石	縦長剥片を素材とし、1側縁に微細剥離痕を有する。	SE507	PL17
Q17	角錐状石器	5.5	1.6	1.1	7.7	黒曜石	両側縁に腹面側から急角度の調整を施す。尖頭部は移行剥離を左右に施し、中央部に細かい調整を加えて器体の厚みを減じている。	SE507	PL16・18
Q18	剥片	2.9	2.7	1.0	6.1	黒曜石	横長剥片を素材とし、1側縁及び上部を切断し、右側縁に微細剥離痕を有する。	SE501	PL17
Q19	剥片	3.5	2.1	0.7	5.4	黒曜石	縦長剥片を素材とし、1側縁に微細剥離痕を有する。打面は背面側から剥離され、背面に礫面を残す。	SB154	
Q20	剥片	1.9	1.6	0.4	0.9	黒曜石	縦長剥片、背面に同一方向の剥離面を有する。打面及び先端部は切断し、背面に礫面を残す。	SK2033	
Q21	剥片	4.4	4.1	1.5	22.2	チャート	縦長剥片、打面は複剥離面打面で、背面に礫面を残す。	SK2015	PL17・18



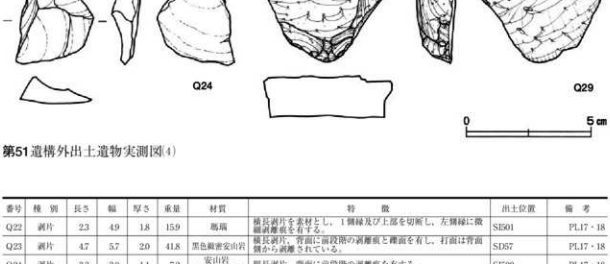
第48図　遺構外出土遺物実測図(1)



第49図　遺構外出土遺物実測図(2)



第50図　遺構外出土遺物実測図(3)



第51 遺構外出土遺物実測図(4)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q22	剥片	2.3	4.9	1.8	15.9	鳴瀬	横長剥片を素材とし、1側縁及び上部を切断し、左側縁に微細剥離を有する。	SE501	PL17・18
Q23	剥片	4.7	5.7	2.0	41.8	黒色頁岩	横長剥片。背面に面段階の調整痕と稜面を有し、打面は背面側から調整されている。	SD57	PL17・18
Q24	剥片	3.3	3.0	1.1	7.2	安山岩(トロトロ石)	縦長剥片。背面に面段階の調整痕を有する。	SE500	PL17・18
Q25	剥片	2.9	3.6	0.8	5.2	安山岩(トロトロ石)	横長剥片。背面に面段階の調整痕を有する。	SE500	PL17
Q26	石核	8.4	5.8	4.6	212.2	珪質頁岩	楕円形の礫を素材とし、上下に設けられた剥離打面及び側上打面から、小形の縦長剥片や大形の横長剥片を剥離している。	SB154	PL17
Q27	石核	3.2	4.1	1.9	21.2	黄玉石	単剥離打面から縦長剥片を剥離している。背面に稜面を残す。	SE500	PL17・18
Q28	石核	2.5	3.3	2.6	18.8	黒曜石	円盤形を呈し、平坦な複剥離打面から小形の縦長剥片を剥離している。作業面の表側には細かい剥投状の調整痕を有する。	SE507	PL17・18
Q29	実験加工を有する剥片	4.0	5.1	1.7	38.7	黒曜石	厚みのある板状の剥片を素材とし、版面側から急角度の調整を施し、下端のエッジには細かい調整を連続して施されている。	SE500	PL17

表4　住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向 長軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設 主柱穴	炉	ピット	竈	貯蔵穴	覆土	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)
132	E 3 f 5	N-15°-W	方形	3.12×2.94	21～36	平坦	～巡	1	1	－	－	1	自然	土師器、須恵器、灰釉陶器、刀子、紡片、礫	8世紀中葉～9世紀後葉
133	E 3 d5	N-13°-W	方形	3.40×3.37	18～33	平坦	～巡	－	－	2	－	1	自然	土師器、須恵器、平瓦、礫	9世紀後葉
500	E 3 f 3	N-11°-W	方形	3.29×3.10	24～50	平坦	22周	4	1	1	－	1	自然	土師器、須恵器、平瓦、土製支脚、鎌、焼成粘土塊、礫	8世紀後葉
501	D 3 h6	N-17°-W	長方形	3.90×3.05	7～24	平坦	22周	4	－	－	－	1	自然	土師器、須恵器、平瓦、刀子、土製支脚、石製紡錘車、焼成粘土塊、紡片、礫	8世紀後葉
502	D 3 i 8	N-12°-W	長方形	3.40×3.00	12～22	平坦	～巡	1	1	－	－	1	自然	土師器、須恵器、平瓦、鎌、鍛具、紡石、礫、鋼文土器、陶器	9世紀後葉本跡→SD59・SK2037→2040
503	E 3 e1	N-10°-W	方形	4.00×3.96	7～19	平坦	－	－	－	2	－	1	自然	土師器、須恵器、焼成粘土塊、礫、陶器	9世紀中葉 本跡→SB154・SD57
504	E 2 e9	N- 8°-W	方形	4.92×4.01	8～32	平坦	～巡	4	1	－	－	1	自然	土師器、須恵器、石製紡錘車	8世紀後葉～9世紀前葉 本跡→SB152・SD57
505	E 3 c2	N- 8°-W	方形	4.77×4.50	20～28	平坦	22巡	4	－	－	－	1	自然	土師器、須恵器、焼成粘土塊、礫、鋼文土器	8世紀後葉～9世紀前葉
506	E 2 b8	N-10°-W	長方形	3.25×2.50	35～40	平坦	～巡	－	－	－	－	1	自然	土師器、須恵器、焼成粘土塊、礫、鋼文土器	9世紀中葉～後葉 SB150→本跡
507	E 3 a 4	N-12°-W	方形	5.72×5.63	30～60	平坦	全周	4	1	－	－	1	自然	土師器、須恵器、刀子、鎌、焼成粘土塊、礫、鋼文土器、紡片、陶器	8世紀中葉～後葉 本跡→SD55

表5　掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数 (桁×梁)	規模(m)	面積 (㎡)	構造	桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱穴平面形	深さ (cm)	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)
148	D31・D32 D33・D32	N-81°-E	3×2	6.25×3.96	24.75	側柱	1.93～2.22	1.98～2.12	円形,楕円形	41～58	土師器、須恵器、石核	8世紀中葉～後葉 SK2009→本跡
149	D27・D28 D27・D28	N- 4°-W	2×2	3.42×3.21	10.98	総柱	1.70～1.72	1.56～1.68	円形,楕円形 不定形	30～68	土師器、須恵器、礫	8世紀中葉～9世紀前葉 SK177→本跡→SI1
150	E2a7・E2a8 E2b7・E2b8	N-83°-E	2×2	3.27×3.25	12.25	総柱	1.76～1.79	1.59～1.68	円形,楕円形	30～49	土師器,須恵器,鋼文土器	8世紀中葉～9世紀前葉 本跡→SE506
151	E2c8・E2c9 E2d8・E2d9	N- 9°-W	2×2	3.62×3.05	11.04	総柱	1.65～1.97	1.44～1.57	円形,楕円形	21～40	須恵器	8世紀中葉～後葉 本跡→SD55
152	E2e8・E2e9 E2f8・E2f9	N-13°-W	2×2	5.42×3.60	19.51	総柱	1.70～1.76	1.74～1.86	円形,楕円形	16～36	—	9世紀中葉～後葉 SE504→本跡→SD57
153	E3b3・E3b4 E3d3・E3d4	N-11°-W	5×2	8.58×3.86	33.12	側柱	1.44～1.96	1.76～2.14	円形,楕円形	36～73	土師器、須恵器、紡片	8世紀中葉～後葉
154	E2f0・E3f1 E2g0・E3g1	N-11°-W	3×2	7.12×3.60	26.54	側柱	2.36～2.38	1.78～1.94	円形,楕円形	15～35	陶器、細片、土師器、須恵器、焼成粘土塊	近世 SE503→本跡

第4節　ま　と　め

1　Ⅶ区における奈良・平安時代の集落変遷

これまでの調査で，当遺跡は河内郡衙や九重廃寺と密接な関係にあった「官衙関連遺跡」と考えられている。8世紀から10世紀前葉の竪穴住居跡505軒，掘立柱建物跡139棟，そこから出土した豊富な遺物，特に船載の青磁や白磁，緑釉陶器や灰釉陶器，墨書土器に代表される多数の文字資料などは，一般の集落とは異なる郡衙周辺集落の様相を物語っている。また，集落の変遷は，報告書によれば「8世紀前葉に突然出現し，当初，区画を設け，計画的に居住域と倉庫域を分けていた。郡衙と密接な関係を持ちながら，農業生産や手工業による経済活動を行い成長していく」とある。さらに9世紀後葉に「集落として最も栄えているなか転換期を迎え」，「急激に衰退し」，10世紀前葉をもって「200年以上に及んだ集落は突如として姿を消していく」とされている[1]。

以下，これまでに明らかにされた集落変遷の中で，Ⅶ区の様相はいかなるものか，その概略を述べる。詳細は『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集を参照されたい。

8世紀前葉は，標高24m以上の台地中央部に位置し，竪穴住居の集中区域と掘立柱建物の集中区域が，意図的に空白域と堀によって明確に区画され，集落の出現期とされる。Ⅶ区の位置する台地西側の緩斜面部は，まだ土地利用されない段階である。8世紀中葉は，標高24m以上の台地中央部を基本としながら，住居が台地全体に拡散し，倍増する。台地北西側の斜面部である標高20mの地点まで住居と掘立柱建物が構築され，集落の成長期とされる。当期に鉄鉾形土器や銅鏡を保有するようになり，仏教が浸透する。Ⅶ区の緩斜面部において，大形竪穴住居と柱筋が通って軸方向がほぼ一致する掘立柱建物が構築され，土地利用が開始される。Ⅻ区では，第132・507号竪穴住居跡と第148・151・153号掘立柱建物跡が「コの字状」の配置をとる。

これまでの調査では，掘立柱建物はA～Fの6群に分けられているが，Ⅻ区の一群を新たに加え，集落は台地西部に大きく拡大する。8世紀後葉は，前期の集落規模を保った充実期とされる。台地南西部の掘立柱建物群は消滅し，中央部寄りに竪穴住居が移動する。当期には鉄器の保有が多くなり，手工業の発展が推測される。Ⅶ区においては，第500・501号竪穴住居跡と第148・151・153号掘立柱建物跡が「コの字状」の配置をとる。9世紀前葉には，集落規模が減少する。その反面大規模な掘立柱建物や大形住居が出現し，台地中央部と南部及び南東部に大きく分かれて竪穴住居と掘立柱建物が分布し，経済基盤の相違や集落内の階層分化が進んだ時期とされる。Ⅶ区においては，第504・505号竪穴住居跡と第149・150号掘立柱建物跡が「L の字状」の配置をとり，生活域の排水施設と考えられる第55号溝が中央に構築されている。9世紀中葉は集落が再び拡大する時期とされ，掘立柱建物群は南部の一群のみになる。Ⅶ区においては第503・506号住居跡，第152号掘立柱建物が，標高22mの斜面部に構築されている。9世紀後半は集落の最盛期かつ転換期とされる。一辺が6mを超す大形住居があり，集落規模も最大となる。また，集落全体に鉄や紡織の関連遺物，灰釉陶器などが普及する時期でもある。仏堂的建物とされる四面庇付掘立柱建物が台地中央部南側に位置する。Ⅶ区は第133・502号竪穴住居跡のみが見られ，以降土地利用されなくなる。10世紀前葉になると集落規模は激減し，住居は台地中央での集中も見られるが，また，台地全体に散在するような状況にあり衰退期とされる。このような集落の変遷は，まさに「律令制と消長を共にした集落である」[2] と言える。

2　東岡中原遺跡における竈構造の変化

竈は東国においてほぼ一斉に採用された住居の内部施設である。竈は基本的な構造を変化させることなく，

日々の暖房や調理施設として生活基盤を支え，また，竈信仰に代表される宗教的行為を介在させて，日常生活における精神的安定を与える装置として機能してきた。さらに，竈の構築材や構築・補修方法などは，その地域の実状を反映し，集落及び集団の違いとして認識できる可能性は高いと考えられる。そこで，当遺跡で確認された奈良・平安時代の竪穴住居跡505軒について，竈の構造について検討し，特に竈の補強材，支脚の位置，支脚の形態に焦点を当て，当遺跡の竈構造の変化を探りたい。

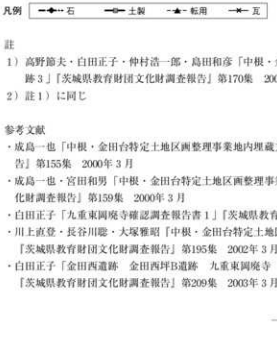
竈は構築材から，「粘土造りの竈」，「土器造りの竈」，「石造りの竈」，「石と土器造りの竈」と大別できる。当遺跡で確認した竈は，「粘土造りの竈」がその他を凌駕している。土器や石が構築・補強材として利用されている竈は505軒中50例で，全体の10%にすぎない。竪穴住居跡の覆土中から風化した雲母片岩が出土しているが，その量や大きさなどから「石造りの竈」ではなく，それらは袖部の補強材として利用された程度と考えられる。「土器造りの竈」といっても，当遺跡で確認した例は，土器が袖内部に埋め込まれた例や，袖内側に土器片を貼り付けた例，土師器甕を連結して天井部とした例（第352号住居跡１例のみ）など，「粘土造りの竈」における袖部の補強や芯材として土器が利用されている。さらに，袖内部から須恵器蓋や坏が埋納されたような状態で出土した例として，第７・204・437・506号住居跡の４例がある。第437・506号住居跡の竈では，須恵器蓋が左袖内部，第７号住居跡の竈では，須恵器坏が右袖内部からそれぞれ出土し，さらに第204号住居跡の竈では，左袖内部から須恵器坏と高台付坏が正位に重ねられた状態で出土している。単に袖部の補強材とは判断できず，竈の構築時における儀礼的な行為の所産とも考えられる。加えて，第438号住居跡は，いわゆるコーナー竈を持ち，焚き口から35cmの右袖脇から須恵器坏が逆位に重ねられた状態で出土し，竈の覆土中からは完形の鉄鉢形土器が正位の状態で確認されている。極めて特殊な例で，仏教の信仰と少なからず関係があると推定される。なお，支脚の数から，「横並び２掛」と考えられる竈は６例で，第207・221・240・453・460・494号住居跡の竈が相当する。時期は８世紀後葉の第460号住居跡を除いて，９世紀中葉～10世紀前葉に位置づけられる。以上，当遺跡における竈構造の概略と竈の補強材について述べた。

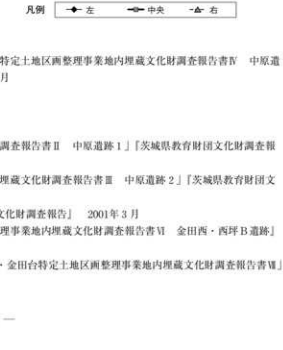
次に，支脚の位置は，焚き口と煙道部を結ぶ中心線上に位置するものを「中央支脚」，中心線より左に位置するものを「左支脚」，中心線より右に位置するものを「右支脚」として分析した。その結果，119例中，中央支脚が69例（58%），左支脚が29例（24%），右支脚が21例（18%）となり，中央支脚の優位性が判明した。次に多い左支脚は「横並び２掛」を想起させ，大小二つの土器を掛けた場合，大きく重い土器を支えるためと考えられる。グラフ②の支脚位置の時期的変化を見ると，他と比べて中央支脚が９世紀前葉を画期に急増している。しかし，９世紀後葉から激減し，10世紀前葉には３者ともほぼ同数となり，竈の規制が崩れて，バリエーションが増えたと推測される。前述した９世紀中葉～10世紀前葉に数を増す「横並び２掛」の竈も，こうした背景から生じたものと考えられる。また，焚き口から支脚までの距離の平均は，およそ65cmであった。この値は大人が焚き口に立って腕を伸ばした位置にほぼ相当する。

最後に，支脚の形態について述べる。支脚を伴う竈は505軒中134例で，全体の27%である。本来は支脚を伴っていたが，住居の廃絶時に竈を破壊したり，支脚や焼土・灰を掻き出すことによって消失した場合も想定でき，実際には30～40%と推測される。支脚は可動式であるため，再利用されたり，住居の建て替えや移動に伴って持ち出される場合も多かったと考えられる。支脚の形態は，「石支脚（雲母片岩や砂岩）」，「土製支脚」，「転用支脚（甕・坏・高盤）」，「瓦支脚の」４つの形態が確認された。瓦支脚は転用支脚に含められるものであるが，日常生活で使用する土器類と建築材という性質の相違から，今回は区別した。確認した134例中，石支脚が20例（15%），土製支脚が30例（22%），転用支脚が81例（61%），瓦支脚が３例（２%）であり，圧倒的に転用支脚が多い。特に土師器の小形甕を逆位に置き，その上に土師器坏や須恵器坏を重ねて高さ調整を行っ

ている例が目立っている。土製支脚は被熱により脆弱なものが多く，使用中に壊れたものも数多く存在したと推測できる。土製支脚の上に土師器坏や須恵器坏を逆位で重ねたり，石支脚や土製支脚と転用支脚を組み合わせた例も見られる。今回の調査で確認した第500号住居跡の竈は，土師器甕の胴部以下を逆位に置き，その上に須恵器坏を７枚重ねた転用支脚で，８世紀後葉と考えられる。グラフ①の形態別支脚の時期的変化を見てみると，瓦支脚は８世紀中葉に出現・消失，再び９世紀後葉～10世紀前葉に散見される程度である。当遺跡の東約300mには，８世紀前葉には成立したとされる九重東岡廃寺が存在していることから，利用された瓦は，九重東岡廃寺の周辺から調達されたと考えられる。石支脚は９世紀前葉から数を増やし，９世紀後葉～10世紀前葉で土製支脚の数を上回っている。土製支脚は８世紀前葉～９世紀中葉までほぼ横這い状態で，９世紀後葉で数を増すが，10世紀前葉で石支脚の数を下回る。転用支脚は９世紀前葉を除いて他を上回り，ピークは８世紀後葉と９世紀後葉である。前者はそれまでの「官的様相」が見られなくなり，有力者層が経済基盤を整える時期で，後者は九重東岡廃寺が衰退し，集落内に仏堂的建物が建てられ，有力富豪層が成長し，血縁・地縁的集団として強く結びついた時期とされ，転用支脚のピーク時の社会的背景として無関係ではないと考えられる。10世紀前葉にはピーク時のほぼ半数に減じ，転用する土器も土師器甕から土師器高台付坏・高台付皿などに変化する。各時期の土器組成によって転用される土器は，大きな影響を受けると考えられる。

以上の通り，竈の分析を通じて，各時期の土器様相や集落における生活様相，ひいては集落を取り巻く政治・経済・宗教・文化の一端をうかがえる可能性を指摘することができる。





註

1）高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和彦「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　中原遺跡３」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集　2001年３月

2）註１）に同じ

参考文献

・成島一也「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　中原遺跡１」『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集　2000年３月

・成島一也・宮田和男「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　中原遺跡２」『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集　2000年３月

・白田正子「九重東岡廃寺確認調査報告書１」『茨城県教育財団文化財調査報告』　2001年３月

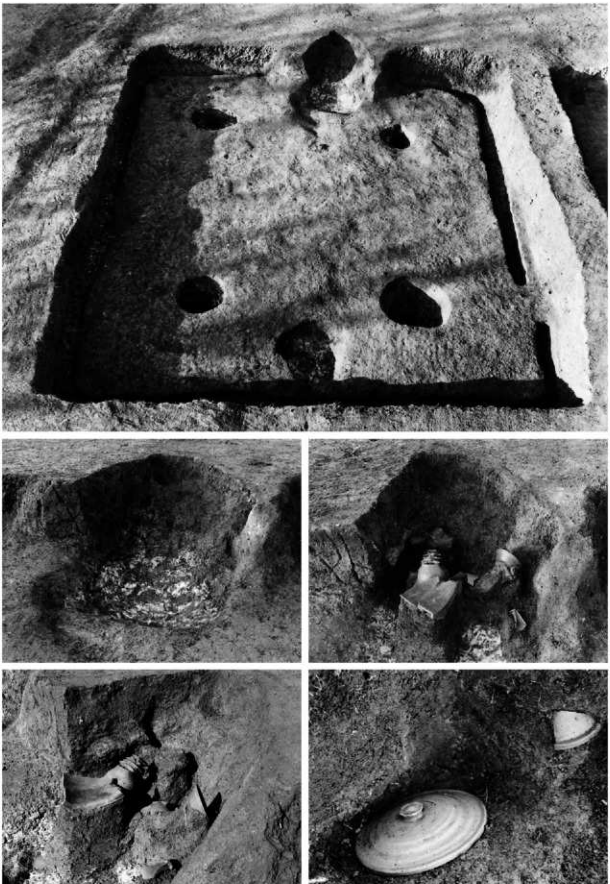
・川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ　金田西・西坪Ｂ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第195集　2002年３月

・白田正子「金田西遺跡　金田西坪Ｂ遺跡　九重東岡廃寺　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第209集　2003年３月

写　真　図　版

東岡中原遺跡遠景（南方から）

完掘全景（中央部）



第500号住居跡完掘・遺物出土状況

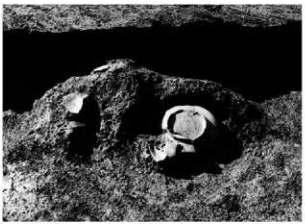
第500号住居跡遺物出土状況・出土遺物

28

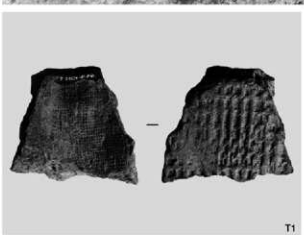
30

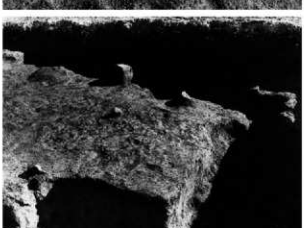
31

第501号住居跡・出土遺物

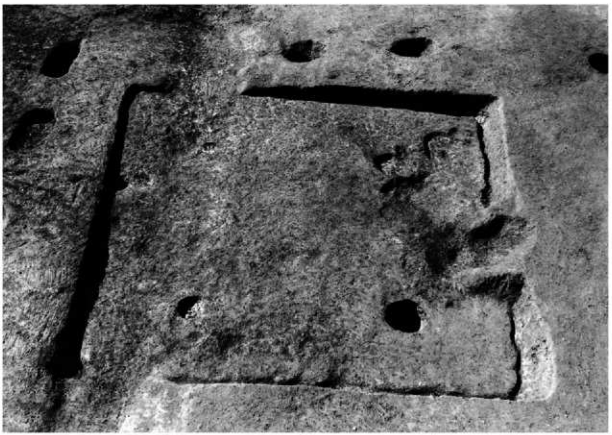


第501号住居跡遺物出土状況・出土遺物

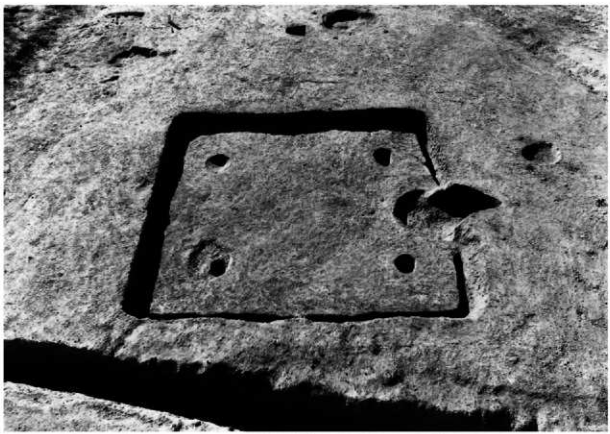




第502号住居跡・出土遺物



第504号住居跡・出土遺物



58

第505号住居跡・出土遺物

67

73

83

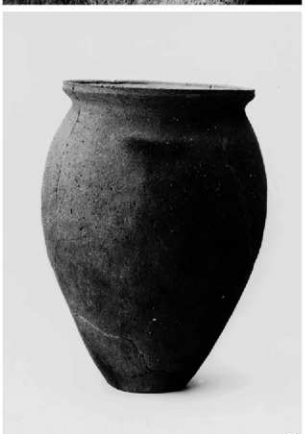
75

第507号住居跡完掘状況・出土遺物

第503号住居跡完掘状況

第506号住居跡完掘状況

62

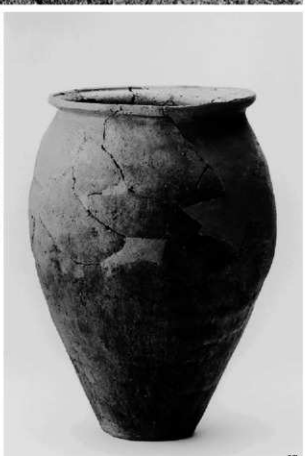


63

64

第506号住居跡遺物出土状況・出土遺物

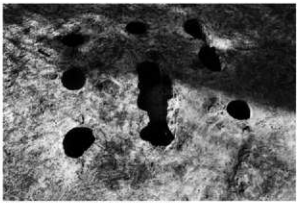
86



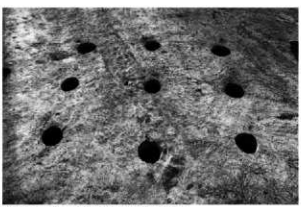
87

第132号住居跡・出土遺物

第148号掘立柱建物跡完掘状況


第149号掘立柱建物跡完掘状況

第150号掘立柱建物跡完掘状況


第151号掘立柱建物跡完掘状況

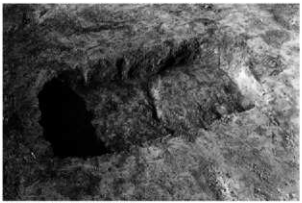
第153号掘立柱建物跡完掘状況

第153号掘立柱建物跡確認状況

第152号掘立柱建物跡完掘状況

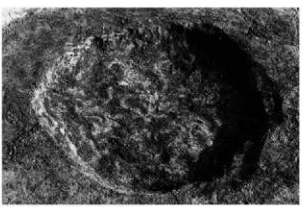
第154号掘立柱建物跡完掘状況

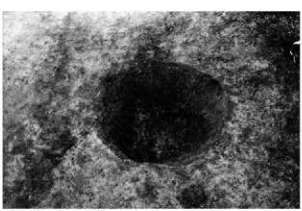
第55号溝遺物出土状況・出土遺物


第2008号土坑完掘状況

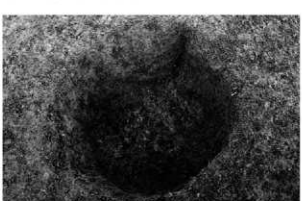
第2029号土坑完掘状況

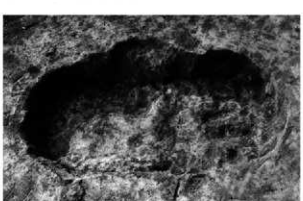
第2047号土坑完掘状況


第2000号土坑完掘状況


第2030号土坑完掘状況

第2035号土坑完掘状況


第2021号土坑完掘状況


第2013号土坑完掘状況

遺構外 - TP1

遺構外 - TP2

遺構外 - TP3

遺構外 - DP1

遺構外 - 100

SI500 - M2

SI501 - M3

SI502 - M5

SI507 - M7

SI500 - M1

SI507 - M6

SI132 - M8

SI502 - M4

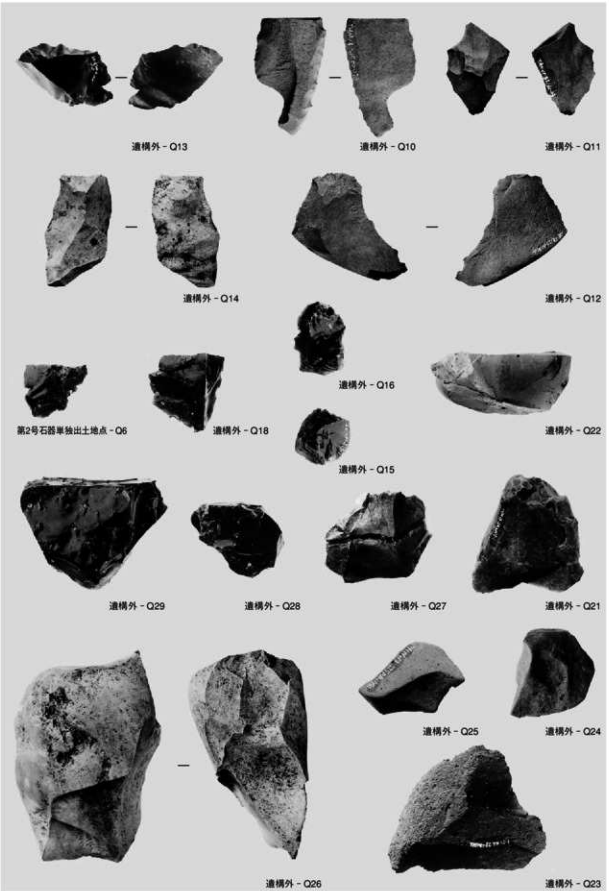
遺構外 - Q7

遺構外 - Q9

遺構外 - Q8

遺構外 - Q17

出土遺物（縄文土器・土製品・墨書土器・金属製品・石器）


遺構外 - Q13
遺構外 - Q10
遺構外 - Q11
遺構外 - Q14
遺構外 - Q12
遺構外 - Q16
第2号石器単独出土地点 - Q6
遺構外 - Q18
遺構外 - Q22
遺構外 - Q15
遺構外 - Q29
遺構外 - Q28
遺構外 - Q27
遺構外 - Q21
遺構外 - Q25
遺構外 - Q24
遺構外 - Q26
遺構外 - Q23

出土石器

出土石器（Q7~10·12:硬質頁岩，Q13:赤玉石，Q14:流紋岩，Q27:黄玉石，Q6·17·28:黒曜石
Q21:チャート，Q22:瑪瑙，Q23:黒色緻密安山岩，Q24:安山岩（トロトロ石））

茨城県教育財団文化財調査報告第251集

東岡中原遺跡4

平成17(2005)年3月22日　印刷
平成17(2005)年3月25日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911　水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587

印刷　富士オフセット印刷株式会社
〒310-0067　水戸市根本3丁目1534－2
TEL　029－231－4241㈹